第Ⅰ章　伊是名村伊是名貝塚

Ⅰ．はじめに

伊是名貝塚は1967年、多和田真淳によって発見された縄文時代の複合遺跡である(註1)。本貝塚は沖縄本島北部の西方海上に浮かぶ伊是名島（村）の字伊是名にある(第１図－Ａ)。伊是名の集落は同島南端のほぼ中央に位置し、臨海砂丘地に立地している(第１図－Ｂ)。同島では現在10数遺跡が知られている（第１図－Ｃ)。最古の遺跡は伊是名島の属島である具志川島の岩立遺跡西区に所在する縄文前期の遺跡である（註２)。しかし、現在のところ、伊是名本島では同期に比定できる古い遺跡は発見されておらず、縄文後期の遺跡が最古である。

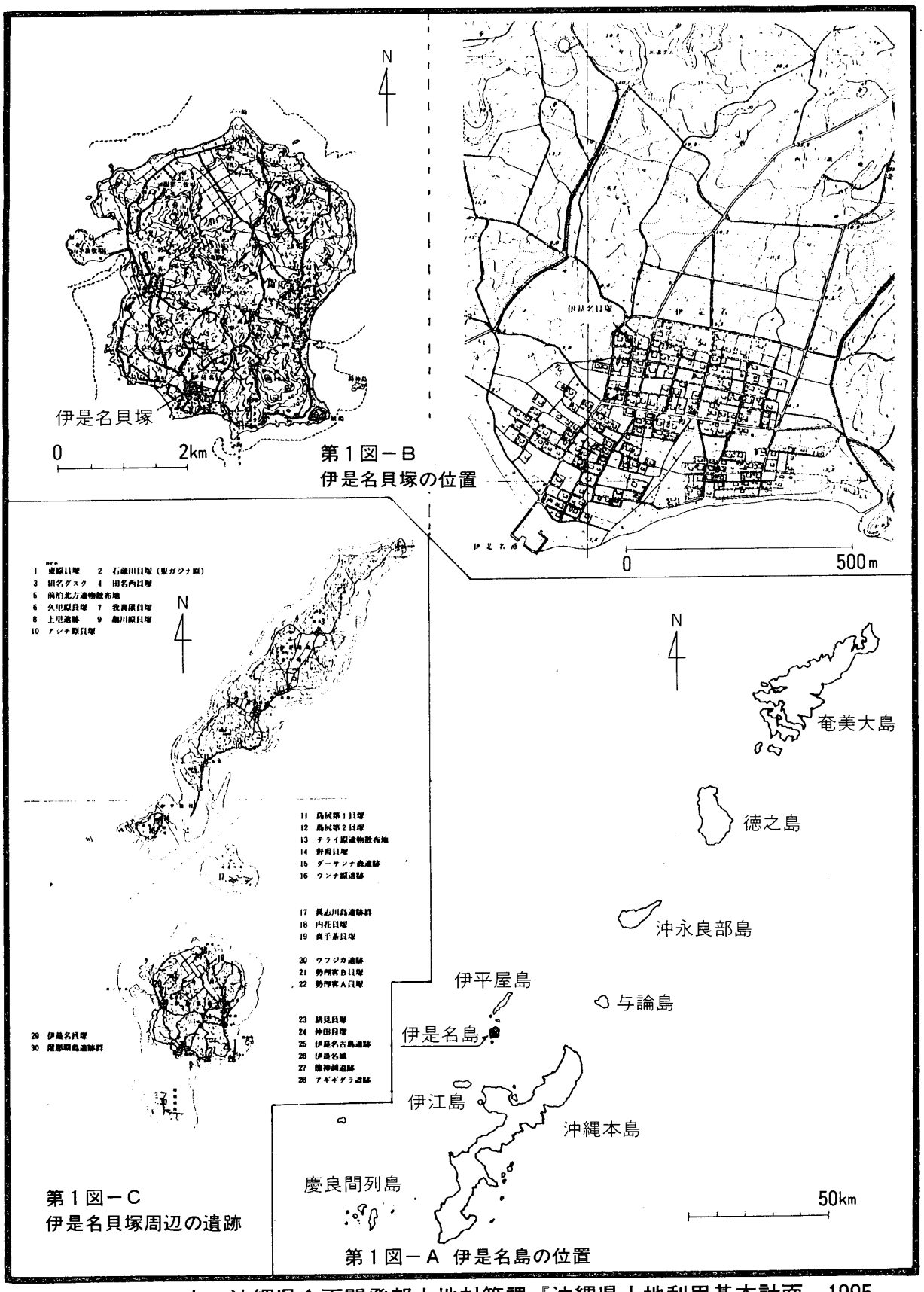
筆者の一人高宮は1964年９月、沖縄大学の付属研究機関である「琉球文化研究所」の一員として同島の調査に参加した際、当時の所轄官庁であった琉球政府文化財保護委員会の許可を得て小試掘を行った。調査成果については早い機会に報告するはずであったが、諸種の事情が重なって大幅に遅れてしまった。ここに調査の概要を記し、責の一斑を果たしたい。

本貝塚については1979年、県文化課の安里嗣淳氏が宅地造成に伴う緊急調査を行い（註３)、また、1991年には伊是名貝塚学術調査団による学術調査が実施され、概報や詳細な報告書などが刊行されている（註４、５)。併せてご参照いただきたい。

なお、発掘にあたっては地主の伊礼正晃氏から発掘許可のご快諾を得、また、泉文貎・東江清栄両氏からは物心両面にわたるご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

Ⅱ．調査経過

本貝塚は伊是名集落の後方、つまり、北西縁部に位置し、ここは砂丘地の末端部でもある。試掘地は伊礼正晃氏所有の畑地で行った。遺物はこの畑地とそれに南接する宅地、道一つ隔てた北側のキビ畑、このキビ畑に東接する屋敷跡の畑地、その南に位置する宅地など広範囲に散布している。畑地では遺物の採集も比較的容易であるが、宅地内は地表面が踏み固められている上、遺物の散布量も少なく、本文で紹介する良好な表採資料のほとんどは畑地採集のものである。表採資料のなかには荻堂式や大山式の他宇佐浜式なども見受けられ、縄文後・晩期を主体とする遺跡と察せられた。この時期の北部地域と中・南部地域の土器に地域差が認められるのかどうか甚だ興味ある問題であり、比較資料の採集を目的として試掘を行った。



Ｂ－左　沖縄県企画開発部土地対策課『沖縄県土地利用基本計画』1995

第１図－Ｂ－右　伊是名村教育委員会『伊是名貝塚』1979

Ｃ　伊是名村教育委員会『伊是名貝塚』1979

Ⅲ．トレンチの設定と層序

試掘地は第２図の略図記載のように（注１）、芋畑のうち収穫がすんで空地になった部分に設定した。隣接する石垣に沿って１×３ｍのトレンチを東西方向に設け、１㎡ごとの３区に区切り、西から東へ向けてＷ－１、Ｗ－２、Ｗ－３の呼称を与えた（第２図－Ａ）。

層序は基盤の白砂層を含め、５枚認められた（第２図－Ｂ）。

第Ⅰ層は耕作による撹乱部分（表土層）で、厚さは30㎝前後、ほぼ同じ厚さで水平方向に広がっている。先史遺物のほか陶磁器や鉄片などを含む。

第Ⅱ層は暗褐色砂層で、厚さは10㎝前後。この層もほぼ同じ厚さで東西方向にのびている。部分的に撹乱を受けており、Ｗ－２区０～10㎝レベルより陶磁片が１点出土した。

第Ⅲ層は黒色混礫砂層で、遺物包含層である。土器・石器・貝製品などが出土した。厚さは東側で約30㎝、西へ傾斜し、厚くなる。

第Ⅳ層は黒色砂層で、上層と違ってほとんど礫を含まない。層厚は薄く５～10㎝程度。東から西へ傾斜し、若干下方へ厚くなる。遺物包含層であるが、遺物は少なく土器の胴部破片が若干出土した。

第Ⅴ層は基盤の白砂層である。上面より荻堂式の壺形口縁１点の他、無文胴部が３点出土した。Ｗ－３区でこの白砂層をさらに掘り下げてみたが、試掘した範囲で、上記以外に人工品の陥入は見受けられなかった。

今回は時間の制約があって、Ｗ－１区を完掘できず、同区第Ⅲ層の下部以下を実見できなかったことは残念である。次項以降において、今回採集した遺物の概要を紹介したい。

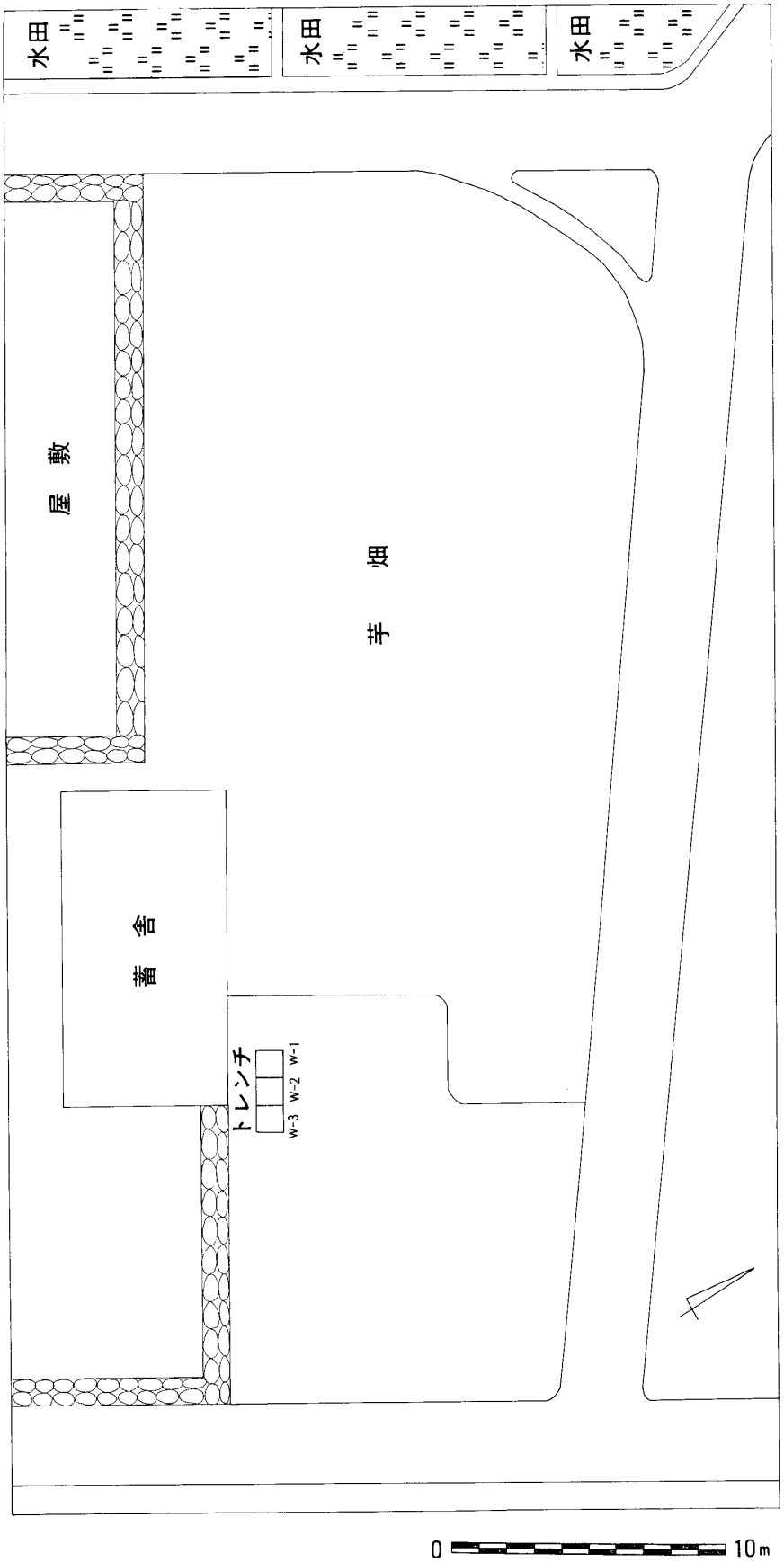
（注１）調査終了後、遺跡地の平面図を作成したが、1975年の春、高宮の自宅が類焼にあい消失してしまった。やむを得ず略図を使用することをご諒承願いたい。

Ⅳ．出土遺物

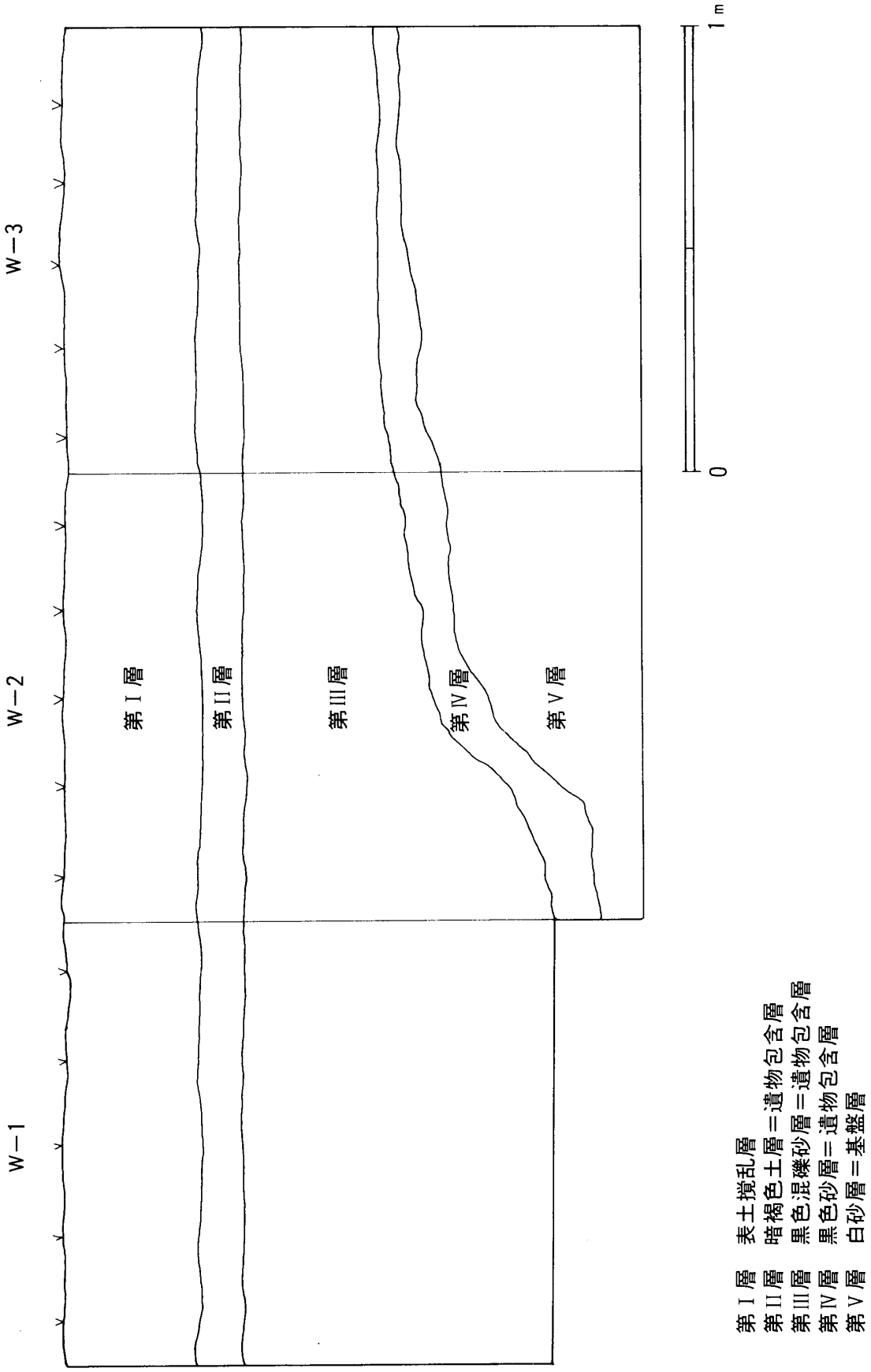
本貝塚の出土品は表採資料も含めて、自然遺物（食料残滓等）及び人工遺物に分けられる（表１）。遺物総数は1338点（100％）で、前者が40点（3.0％）、後者が1298点（97.0％、小数第２位で四捨五入。以下、割合は全てこれにしたがう）である。ただし、人工遺物は先史遺物と、本来貝塚に由来しない近現代の遺物に分けられ、前者は1271点（95.0％）、後者は27点（2.0％）である。以下、割合については近現代遺物を除く遺物数1311点を100％としてカウントすることとする。

自然遺物には獣魚骨及び貝類がある。人工遺物は石器、貝製品、土器の他、近現代遺物として陶磁器及び鉄製品も出土をみた。

本貝塚より出土した自然遺物は40点（100％）で、そのうち獣魚骨は28点（70％）、貝類は12点（30％）である。全出土量1311点からみるとわずか３％に過ぎない。現在のところ専門家による同定を行っておらず、詳しくは次回に報告したい。



第２図－Ａ　遺跡周辺の略図


W－1
W－2
W－3
第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
0
1m
第Ⅰ層　表土撹乱層
第Ⅱ層　暗褐色土層＝遺物包含層
第Ⅲ層　黒色混礫砂層＝遺物包含層
第Ⅳ層　黒色砂層＝遺物包含層
第Ⅴ層　白砂層＝基盤層

第２図－Ｂ　層序断面図

表１　遺物の出土状況

遺物／層位	自然遺物		人工遺物					総計
	獣魚骨	貝類	石器	貝製品	土器	陶磁器	鉄製品	
表採			5		24			29
第Ⅰ層	3	7		1	115	21	3	150
第Ⅱ層	9	3			203	1		216
第Ⅲ層	16	1	3	4	660			684
第Ⅳ層					240			240
第Ⅴ層					4			4
層序不明		1	2		10	2		15
総計	28	12	10	5	1256	24	3	1338

先史遺物1311点(100%)の中では、土器が1256点(95.8%)と圧倒的出土量を示し、次いで石器10点(0.8%)、貝製品が５点(0.4%)で、骨製品は得られていない。近現代遺物については「D）その他の人工遺物」の項で述べる。

以下、石器より記述する。

A）石器

本貝塚出土の石器は表採品５点、第Ⅲ層出土３点、層序不明２点の計10点（0.8%）で、器種の判明するものは石斧（４点のうち、敲石への転用例１点を含む）と磨石（２点のうち、敲石兼用のもの１点）の２種類である。完形品はなく、全て破損品である。また、破損が著しく器種の把握できない資料が４点あり、不明品として分類した（表２）。石質の同定は大城逸朗氏に依頼した。

以下、その概要を述べる。

イ、石斧

石斧は表採品２点、Ⅲ層出土が２点の計４点である。前述のように完形品はなく、平面形の把握できるものは１点のみで、両者とも

表２　石製品出土状況

器種／層位		石斧			磨石			不明品			計
グリット名		1	2	3	1	2	3	1	2	3	
表採			2			2			1		5
第Ⅲ層	(20-30)	2									2
	(60-70)								1		1
層序不明									2		2
計		4			2			4			10

撥形に属する。また、刃形の窺えるものが３点あり、いずれも両刃である。以下、表採品より記述する。

第３図１（第Ⅰ図版－１）は両刃の磨製石斧と思料されるもので、表面は摩耗により磨面は消え多少ザラつくが、刃部の片面には丁寧な研磨面も残る。刃は潰れ、敲打痕が認められることから、敲石に転用されたものであろう。グリップは握るとフィットするように加工されており、平面形は撥形に属する。表採品。残存部の器長は13.2cm、最大幅6.6cm、重量約538ｇを計る。輝緑岩製。

第３図２（第Ⅰ図版－２）も表面採集の磨製石斧で、基部を欠く刃部付近の資料である。刃部は大きく欠けているが、一部に刃面が認められる。残存部から推察される刃型は両刃である。破損面以外の器面の研磨は丁寧である。残存部からみると短冊形に属すると思われるが確言はできない。また、折損部の側面を１条ないし２条の細い傷痕が巡っており、大城逸郎氏より標品を切断する際の傷痕ではないかとのご教示を受けた。その傷痕をつけた道具は不明。残存長5.4cm、幅6.3cm、厚さ3.8cm、重量約200ｇを計る。硬質砂岩製。

第３図３（第Ⅰ図版－３）はW－１グリッ

ト第Ⅲ層（レベル20-30）出土の両刃の磨製石斧で円刃を呈する。平面形は胴中央から刃部へ幅のやや狭まる形態が推定される。全体的に光沢が出るほど磨かれているが、特に刃部は丁寧である。破損が著しく全景はつかめない。残存長7.6㎝、幅5.7㎝、重量約170ｇを計る。輝緑岩製。

第４図１（第Ⅱ図版－１）はW－１グリット第Ⅲ層（レベル20-30）より出土した両刃石斧の刃部破片で、刃部には光沢が残る。平面形は撥形と思料されるが、胴中央から刃部へ若干幅を減ずるタイプである。残存長7.0㎝、幅3.6㎝、重量約90ｇを計る。輝緑岩製。

ロ、磨石

磨石は２点の出土で、完形品はなく全て破損品である。なかには残存部に敲打痕らしきものが認められる製品も１点あり、敲石との兼用を推定させる。２点とも表採品である。

第４図２（第Ⅱ図版－２）は磨石と敲石を兼用したと思われる表採品で、重量感のある石器である。だいぶ破損しているが、平面は半円形に近く、断面はルーズな楕円形を呈する。全面に研磨が施されているが、先端部には敲打痕も見受けられる。残存長は13.0㎝、最大幅8.1㎝、重量738ｇを計り、硬質砂岩製である。この種の磨石は野国貝塚（註６）などで表採されており、沖縄ではいわゆる後期（弥生～平安時代併行期）の産物と考えられているが、奄美では縄文後期に出現しているようであり（註７）、本貝塚のものは時期的には奄美例に近いものであろう。

第４図３（第Ⅱ図版－３）は磨石の破片と考えられるもので、平板状を呈しているが、この平坦面が実は原形における断面で、また、側面が完形時の表面（図の狭小な左右の平面と側面）である。この表面と側面は丁寧に研磨され、光沢を有する。本来の断面である現平坦面はざらついているが、手慣れ様の摩耗痕が認められる。また、側面に接する平坦面の一部には３条の浅い溝が見受けられ、溝の断面はＶ字状を呈し、長さは7.8㎜で間隔はそれぞれ４㎜と８㎜である。この短線の性格は現在のところ不明。残存長は13.3㎝、幅は5.4㎝、重量は約182ｇを計る。硬質砂岩製。表採品。

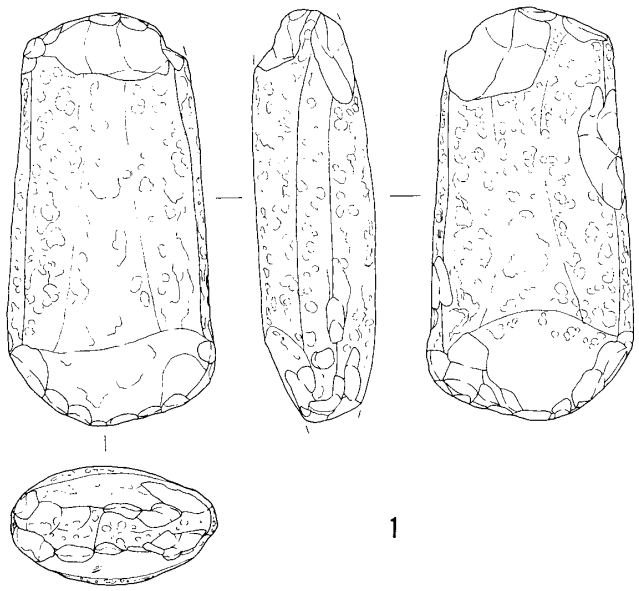
ハ、不明品

不明品は４点である。

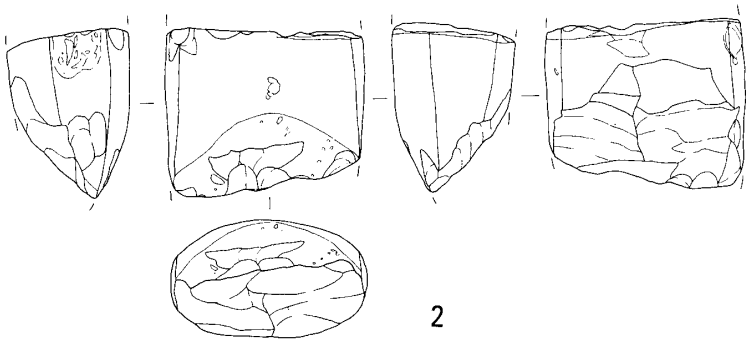
第５図１（第Ⅲ図版－１）はW－２グリット第Ⅲ層（レベル60-70）出土の資料で、上下端を欠く。表面はほぼ全面に石灰分が付着し、器面は観察し難いが、裏面は自然面を残す。残存部の平面形が撥形の石斧に似るが、軟質の砂岩であるため自然礫の可能性が強い。残存長は10.5㎝、最大幅は6.7㎝、重量約291ｇを計る。

第５図２（第Ⅲ図版－２）は表採資料の石器片。平面と側面の一部を残す資料で、両面に磨面が認められ、一部に光沢も見受けられる。破損が大きく全景は不明だが、残存形態とその大きさから磨石の可能性が考えられる。残存長は約10㎝、幅は6.0㎝、厚さ1.9㎝、重量約150ｇを計る。輝緑岩製。

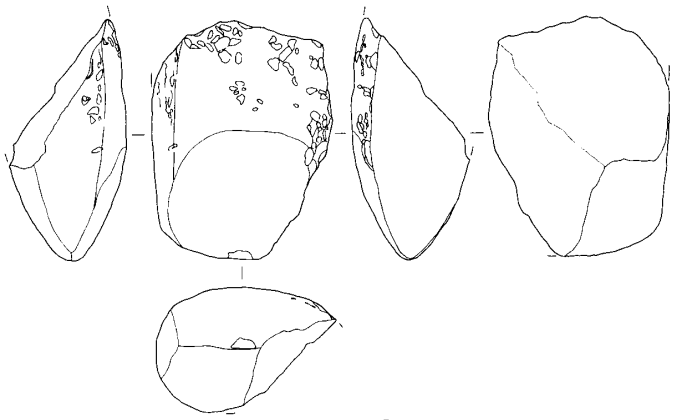
第５図３（第Ⅲ図版－３）は層序不明の石器片で、表面は研磨面を有する。大破しており原形は窺えないが、平坦な表面とそれに接する側面の一部をわずかに残しており、現状



1



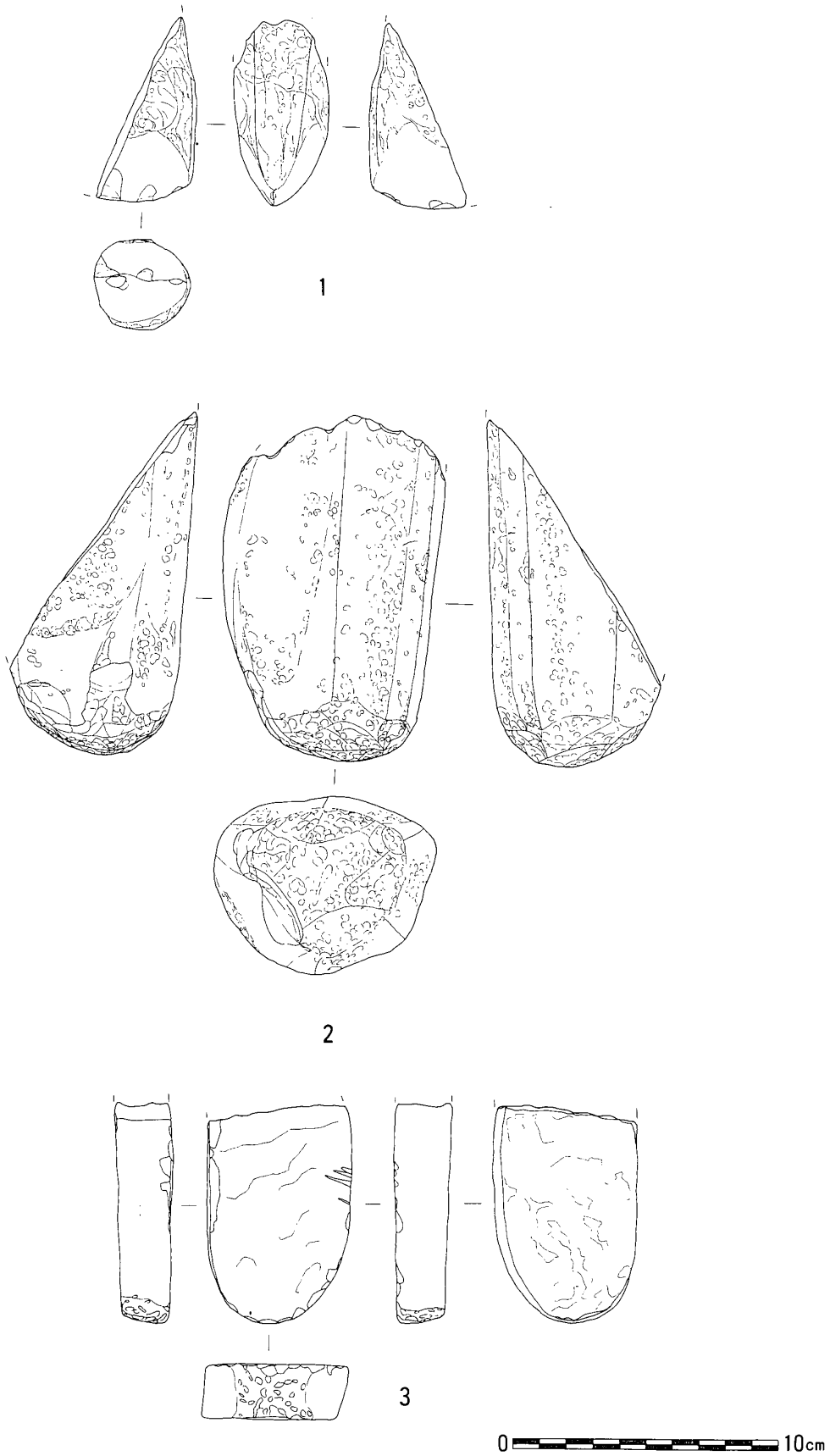
2



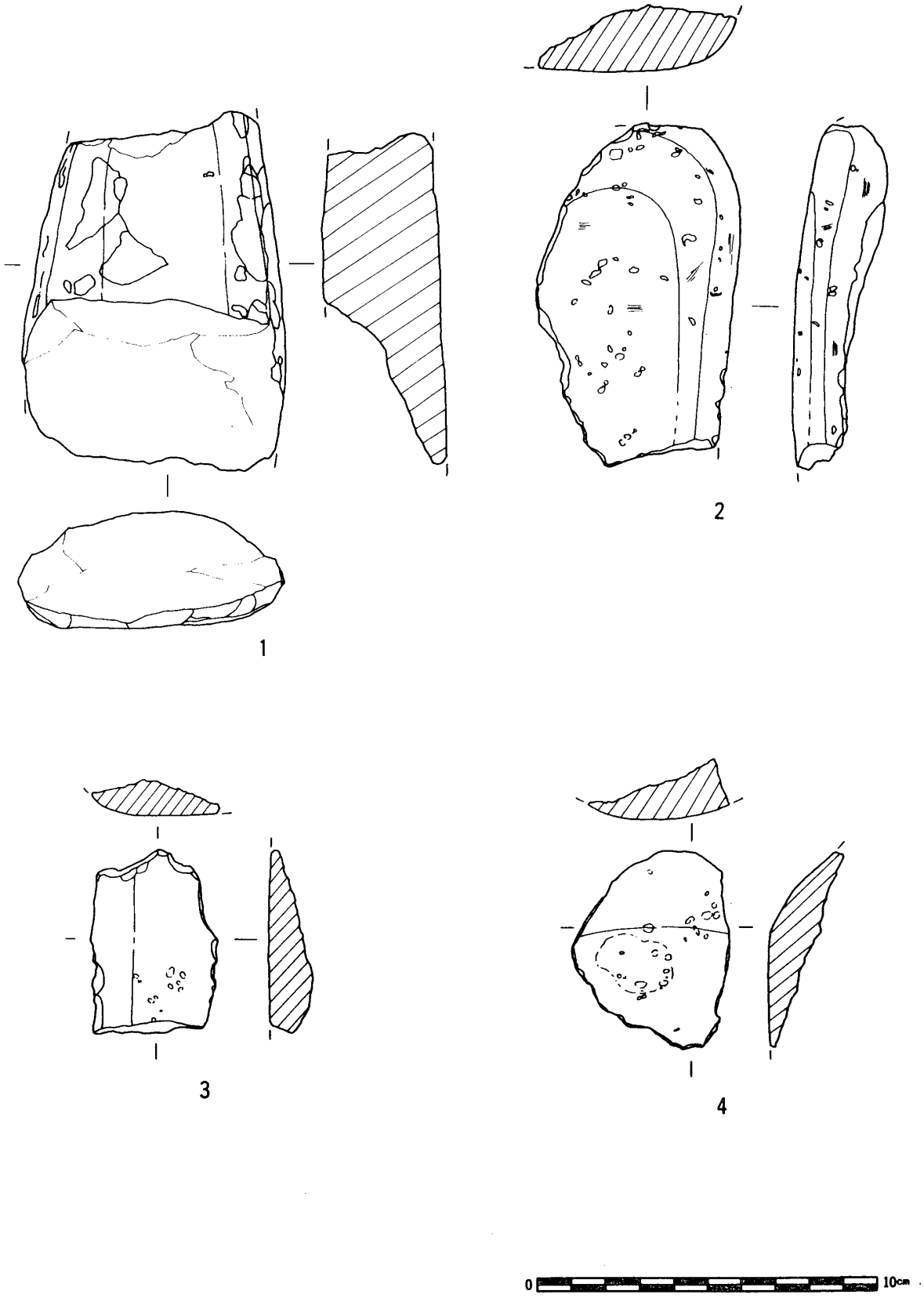
3

0 10cm

第３図　石器：1･2石斧(表採)，3 石斧(第Ⅲ層レベル20-30)



第４図　石器：1 石斧(第Ⅲ層レベル20-30)，2･3磨石(表採)



第５図　石器：不明品(1 第Ⅲ層レベル60-70，2 表採，3･4 層序不明)

から推察される器形は石斧か磨石である。残存部の長さは5.4cm、幅3.7cm、重量約40ｇ。輝緑岩製。

第５図４（第Ⅲ図版－４）も出土層位不明の磨石の破片と思われるもので、表面は全体的に磨かれており、中央部に「く」の字状に屈曲した箇所がある。平面と側面の接する部分であろう。現状から磨石の破片である可能性が高い。残存部は器長5.8cm、最大幅は4.5cm、重量約38ｇ。輝緑岩製。

ニ、まとめ

石器は前述のように石斧と思料されるもの４点、磨石と思われるもの２点、不明品４点の出土である。

これらは石材からみると石斧は輝緑岩製が３点、硬質砂岩が１点である。第３図２（第Ⅰ図版－２）は石斧の形態を呈しているが硬質砂岩が石斧の素材となり得るか、今後の検討課題である。

磨石は２点とも硬質砂岩である。

不明品は輝緑岩製が３点、軟質砂岩製が１点である。輝緑岩製はその残存形態から石斧及び磨石の用途が考えられるが、輝緑岩が磨石として利用された例は少ない。また、第５図１（第Ⅲ図版－１）の軟質砂岩利用の遺物は石斧を連想させるが、その素材の性質及び加工痕の不明瞭なことから自然石の可能性が強い。

大城逸朗氏のご教示によると本貝塚出土の輝緑岩は沖縄諸島産ではなく、近隣では奄美・徳之島産の可能性があり、また、硬質砂岩は名護層のものに近似するとのことである。

Ｂ）貝製品

本貝塚より出土した貝製品はその可能性あるものを含めて計５点(0.4％)の出土である。第Ⅰ層より１点、第Ⅲ層より４点検出されている（表３）。用途別にみると装飾品２点、実用品２点の他、不明のものが１点得られている。調査範囲の狭小なこともあるが、出土数は類例遺跡に比べ、少ないように思われる。以下、その概要を記す。

表３　貝製品出土状況

器種／層位		有孔品			ペンダント			貝匙			不明品			計
グリット名		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
第Ⅰ層											1			1
第Ⅲ層	(30-40)		1											1
	(50-60)							2						2
	レベル不明					1								1
計		1			1			2			1			5

イ、有孔製品

第６図１（第Ⅳ図版－１）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土のフデガイ利用の有孔製品である。体層部に外面より一孔を穿っており、内径は0.4cm、外径は0.5cmを計る。殻頂部、殻口部の一部を欠損する。装身具の一種と思料されるが、未製品であろう。残存長6.4cm、最大幅1.6cm、重量約8.0ｇを計る。

ロ、ペンダント

第Ⅴ図版（次頁）はＷ－２グリット第Ⅲ層下部より出土したヤコウガイ製のペンダントで、採取時に頭部左側の突起部をわずかに欠いてしまったが、ほぼ完形品である。長さ

9.3cm、最大幅3.7cm。現上面がヤコウガイの外（表面）面にあたる。自然面と同部の結節肋を除去し、真珠層が露出するまで研磨を施している。本標品には2孔が穿たれており、いずれも両面から穿孔している。

本製品は最初からペンダントであったのか疑わしい。下端の孔が半欠状になっていることからみて、当初、貝匙であったものを破損したためにペンダントに転用したものであろう。

第Ⅴ図版　ヤコウガイ製ペンダント

ハ、貝匙

第6図3（第Ⅳ図版－3）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル50-60）より出土した夜光貝製の匙状製品の破片である。体層部を利用し、身部の大半を欠損するが、舌状端部の一部が残存する。破損が著しいため詳細は不明であるが、内外面ともに自然面を残し、加工痕は認められない。縁辺部も打割によって形を整える程度で、全体的に作りは粗雑である。残存部の深さは1.8cm、幅7.0cm、重量約46.3gを計る。

第6図4（第Ⅳ図版－4）もW－1グリット第Ⅲ層（レベル50-60）より出土した夜光貝製の匙状製品である。体層部を切り取った未製品で、縁辺部には粗い研磨痕が認められる。上面観は楕円形を呈する。外面は結節の自然螺肋を残し、内面も未加工のままで、石灰分の付着が部分的に認められる。器長12.9cm、幅6.2cm、容器の深さ1.5cm、重量約82.0g。

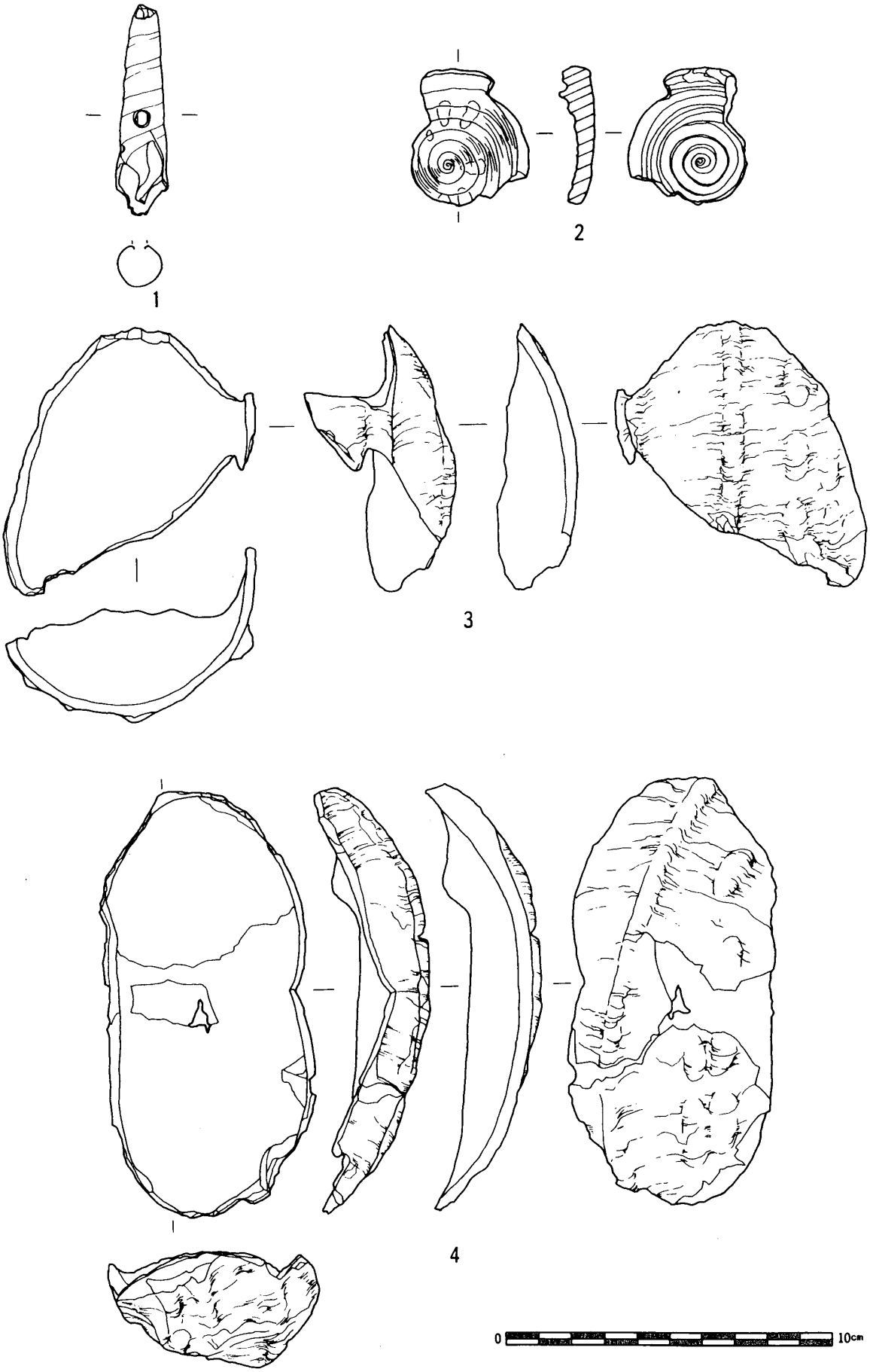
ニ、不明品

第6図2（第Ⅳ図版－2）は、W－1グリット第Ⅰ層（レベル10-20）出土のイモガイ利用の未製品と思われる資料で、螺塔部を残すが、摩耗のため表裏面ともに加工痕は不明瞭である。推定径は約6.0cm、最小部の厚さは0.5cm、最大は0.9cm、残存部の重量は約19.8gである。

C）土器

本貝塚出土の土器は出土遺物のなかで計1256点（95.8%）という圧倒的な出土量である。また、先史時代の人工遺物（1271点）のうちの98.8%を占める。

土器1256点（100%）は層位別の割合をみると、表採は24点（1.9%）、第Ⅰ層が115点（9.2%）、第Ⅱ層が203点（16.2%）、第Ⅲ層660点（52.5%）、第Ⅳ層240点（19.1%）、第Ⅴ層4点（0.3%）、層序不明10点（0.8%）となる（表4）。全形の窺える資料はなく、口径の推算可能な土器が数点あるのみである。



第６図　貝製品：1 有孔貝製品(第Ⅲ層レベル30-40)，2 用途不明品(第Ⅰ層10-20)，
3･4 貝匙(第Ⅲ層50-60)

表４　土器型式別出土状況

時期区分			縄文後期																		縄文晩期									縄文後・晩期						小計	無文胴部			小計	底部			小計	総計	
型式名 / グリット名 / 層位			伊波式土器			荻堂式土器			大山式土器			室川式土器			カンヤウチバンタ式土器			嘉徳系土器			室の川上層期土器			宇佐浜式土器			喜念Ⅰ式系土土器			その他の有文土器			無文口縁土器												
グリット名			1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3		1	2	3		1	2	3			
表採		口					5			1			2												4			2							3		17										
		胴					1												2																		3		1		1		3		3	24	
層位 Ⅰ層	0-10	口																						1				1					1			3											
		胴																																				21	14	35					38		
	10-20	口																																												115	
		胴																																			29	5	15	49					49		
	20-30	口																																1		1											
		胴						1																												1		12	14	26					28		
Ⅱ層	0-10	口					1	1	1			1	2																					2	5	13										
		胴									1								2	1										1						5	65	35	84	184	1			1	203		
Ⅲ層	0-10	口					1						1	1	1						1							3						1	1	10											
		胴			1	1		5	2		2							1										2				1				15	52	88	60	200		1	1	2	227		
	10-20	口				2	1			2	1	1	2																					1	2	12											
		胴						1	1																											2	34	51	36	121	1			1	136		
	20-30	口	1			1	1			1			1																	1				3	2	11											
		胴	1			2	1		1		1																									6	43	49	13	105			3	3	125		
	30-40	口	1			4	1		1	1																										8										660	
		胴		1		1																														2	28	19		47	3	1		4	61		
	40-50	口					1																													1											
		胴					1																													1		19		19					21		
	50-60	口		1		3																								1						5											
		胴				1																														1	24	7		31					37		
	60-70	口																															7			7											
		胴					1																													1	36	4		40	5			5	53		
Ⅳ層	0-10	口																																													
		胴																																					240	240					240		
Ⅴ層	基盤	口					1																													1											
		胴																																				3		3					4		
層序不明		口																																5		5											
		胴		1																								1								2							3	3	10		
小計		口	2	1		10	7	1	2	4	1	2	6	1	1						1				1			4		2			8	8	10	72											
		胴	1	1	1	5	3	7	4		4							1	2	1								2		1		1				34	311	313	476		10	2	4	16		
総計		口		3			23			8			11			1						1			5			6			4			34		94											
		胴		4			16			8									6									3								39				1101				22	1256		

口縁部、胴部資料を含めて確実に型式の同定された資料は８型式あり、全体的な出土量からみると各型式の出土量は希少である。すなわち、伊波式土器７点（0.6%）、荻堂式土器39点（3.1%）、大山式土器16点（1.3%）、室川式土器11点（0.9%）、カヤウチバンタ式土器１点(0.1%)、宇佐浜式土器５点(0.4%)、嘉徳式系土器（嘉徳Ⅱ式の他、その系統と思料されるものを含む）が６点（0.5%）、喜念Ⅰ式系土器（喜念Ⅰ式の他、その系統と考えられるものを含む）が９点（0.7%）出土している。

以上のほかに、室川上層期の土器１点(0.1%)、型式の判明しない４点（0.3%）の有文資料と、無文平口縁の土器が34点(2.7%)、無文胴部1101点〔≒87.7%（この割合は土器総量を100%とするため0.2%減じてある)〕、底部資料が22点（1.8%）出土している。

形態及び文様、その他の特徴は項目ごとに記述する。テンパーに関しては

Ａ類－チャート粒＋石英粒

Ｂ類－チャート粒＋石英粒＋その他の鉱物（石灰質粒子、異質岩片など）

Ｃ類－チャート粒＋石英粒＋黒雲母

Ｄ類－石英粒＋黒雲母〔＋その他の鉱物(石灰質粒子、異質岩片、炭化物など)〕

Ｅ類－石英粒＋粘板岩の小礫など
の５類に分類することができる。

石灰質粒子とはサンゴの小礫や貝の小片で、多量に含まれることはない。異質岩片とは同定の困難な細粒をいう。またＤ類には稀に「その他の鉱物」も含まれる。炭化物が何であるのかは不明。また、これら５類に小粘土塊が含有されることがあるが、これはテンパーとして意図的に加えたものではなく偶然に混入したものと考え、あえて分類はしなかった。これらのテンパーについては大城逸郎氏にサンプルを同定していただいたものである。

以下、土器は伊波式より記述する。なお、実測図の配列は層序別となっている。

イ、《伊波式土器》

伊波式土器は全て破片で、口縁部資料３点、胴部資料４点の計７点の出土である。本型式は土器総数（1256点）から割り出すと全体のわずか0.6％に過ぎず、主に第Ⅲ層のレベル０～60㎝間で出土し、１点のみ層序不明がある。荻堂式土器や無文土器よりは上のレベルで検出されている（第４表）。器種は口縁部、胴部を含めて全て深鉢形に属すると思われ、確実な壺形は含まれていない。底部は残存資料がなく不明であるが、本貝塚出土の底部が全て平底であることや、類例遺跡の状況から推しても平底になると思われる。

文様は本型式の資料が小破片であることから文様構成などの細分については言及できないが、残存部から点刻文のみのもの、沈線文と鋸歯文を組み合わせるもの、羽状文と沈線文を組み合わせるものなどが認められる。テンパーは前述のＡ類（チャート粒＋石英粒）のみ使用される。

以下、伊波式土器のデータを口縁資料、胴部資料の順に記す。

第７図１（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－１）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の伊波式土器で、無文山形口縁の復元図である。口縁部は左右均整のとれた山形を呈し、口径約16.8㎝を計る。器厚はほぼ一定しており、約0.6㎝を計り、山形直下の部分を指で押さえたため同部は若干窪み、口縁上部がやや厚みを増す。器面は表裏面ともにナデにより調整される。器色は明褐色で、焼成は良好。テンパーとして粗いチャート及び石英を多量に混入する。

伊波式期には無文口縁は極めて稀である。特に山形口縁は沖縄市室川貝塚（註８）、久米島北原貝塚（註９）に出土例の報告があるのみである。また、荻堂式には無文口縁の存在がわずかながら知られており、当初荻堂式に含めるべきかと考えたが、器形が朝顔状を呈することや山形頂部外面に瘤状突起が認められないことから伊波式に含めた。今後の資料にも注意したい。

第７図５（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－５）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の伊波式土器の口縁部片である。口縁部には叉状工具による長さ１㎝前後の点刻文が第一文様帯に２組認められ、第二文様帯以下は欠損のため不明である。口唇部にも同種工具による２組の短沈線文が見受けられる。施文はいずれも左から右の方向である。表裏面とも擦痕を施した後、ナデ消しているが消え切らずに残る部分もある。器色は淡褐色で、焼成はかなり良好。テンパーとして粗・細のチャート粒、

石英粒が多量に混入されている。

第７図６（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－６）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル50-60）出土の口縁部片で、口唇部は外傾し一見、断面三角形の肥厚口縁に見える。文様は口縁部に叉状工具による２組の点刻文が横位に残存するものの、小破片のため文様の長さや文様構成など詳細は不明である。施文方向は左から右である。表裏面ともにナデ調整され、器色は赤褐色で、焼成はやや良好。胎土に粗いチャート及び石英を混入する。

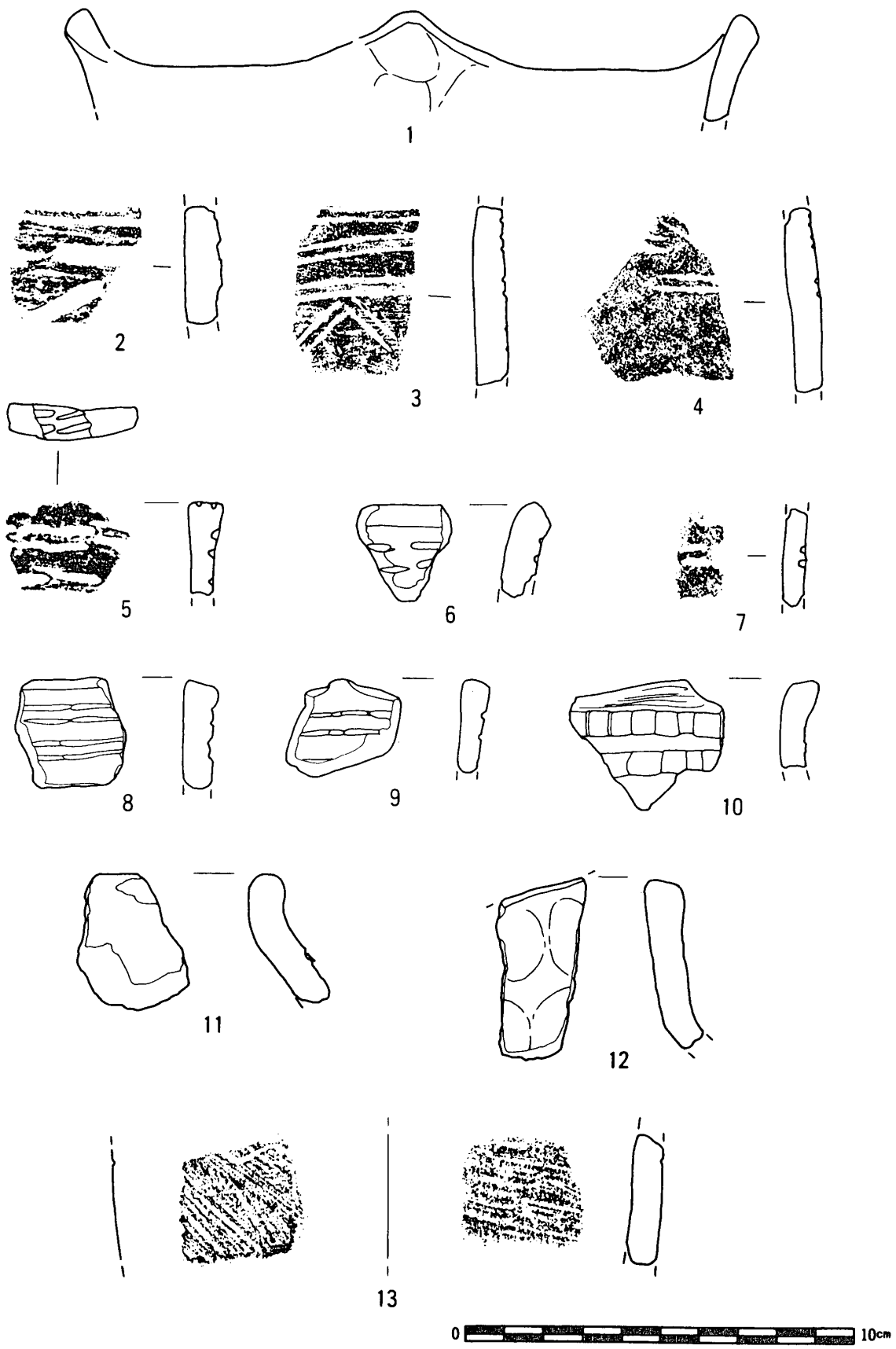
第７図７（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－７）は層序不明の頸胴部の資料で、文様の特徴から伊波式に分類した。文様は叉状工具による点刻文が１組残存するのみで、詳細は不明である。施文方向は左から右である。器色は表面が茶褐色で、裏面は赤褐色を呈する。焼成は良好で、胎土にチャート及び石英粗粒が多量に混入される。調整は表裏面ともに擦痕を施した後、それをナデ消している。

第７図４（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－４）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の胴部資料で、胴上部に叉状工具による沈線文を施す。上位の文様は残存部から横位羽状文の一種と推察され、最下段の文様は１組の横位沈線文である。施文方向は不明である。器色は両面とも焼けて黒褐色を呈する。焼成はかなり良好で、胎土に石英微細粒及びチャート微細粒を少量含み、他の伊波式より細かくほとんど目立たない。表裏面ともにナデ調整で、表面に斜位の指頭痕が残る。

第７図２（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－２）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の頸胴部で、施文法から伊波式土器か荻堂式土器の範疇に入るものである。半截竹管状工具による施文であるが、上部に施文された２条の横位文様は荻堂式には認められず、他方、下部の鋸歯文は横に広がる低平なもので荻堂式の特徴に近い。上部の横位沈線文によって伊波式に含めたが、今後の資料を待ちたい。施文は左から右の方向である。表裏面ともに目の粗い擦痕が施されているが、裏面はその後ナデ調整を行っている。テンパーとして石英微細粒及びチャート微細粒を主体に、部分的に粗いチャート粒が混入される。器色は表面が赤褐色、裏面は茶褐色で、焼成はやや良好である。

第７図３（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－３）も伊波式土器及び荻堂式土器の特徴を有するもので、Ｗ－１グリット第Ⅲ層（レベル20-30）の出土である。上部の叉状工具による３組の横位長沈線文は伊波式的であり、鋸歯文は荻堂的要素に属する。移行形態と見なし得るかどうかは今後の課題。鋸歯文の施文方向から文様は左から右へ施されたことが分かる。器面調整は表面は擦痕をなで消し、裏面はナデ調整のみ認められる。器色は黄橙色で、焼成はかなり良好である。テンパーにチャート・石英の微細粒を少量使用するが、ほとんど目立たない。

伊波式の文様について概観してみると、第一文様帯には叉状工具による点刻文があり〔第７図５・６（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－５・６）〕、明らかに第二文様帯に属すると思料されるものはないが、最下段の文様帯には沈線文が見受けられる〔第７図４（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－４）〕。また、叉状工具による長沈線文と鋸歯文を組み合わせるもの〔第７図３（第Ⅵ図版



第７図　1～7 伊波式土器(2 第Ⅲ層レベル0-10, 1・3 Ⅲの20-30, 4・5 Ⅲの30-40 6 Ⅲの50-60　7 層序不明), 8～13 荻堂式土器(表採)

A・B－3)〕、半截竹管工具による押し引き文と鋸歯文を組み合わせるもの〔第7図2(第Ⅵ図版A・B－2)〕などが認められる。口唇部に2組の点刻文が残存するものは1点のみの出土である〔第7図5（第Ⅵ図版A・B－5)〕。これらは同じ第Ⅲ層内に出土しているため先後関係は明らかではないが、レベル的には相違した出土状況を知り得る（表5)。

つまり、羽状文及び点刻文が配される資料はレベル的に古く、沈線文と鋸歯文の組み合わせをもつものは新しく出ているが、資料自体が小破片のため確言できない。工具別にみると叉状工具による施文は5点、半截竹管状工具は1点で、単篦工具は認められず、叉状工具による施文が本貝塚でも優位にある。

表5　伊波式土器の文様別出土状況

層位＼文様		部位	沈線文＋鋸歯文（半截竹管状工具）	長沈線文＋鋸歯文（叉状工具）	羽状文＋沈線文（叉状工具）	点刻文（叉状工具）	計
第Ⅲ層（ ）内はセンチ	(0-10)	口					1
		胴	1				
	(20-30)	口					1
		胴		1			
	(30-40)	口				1	2
		胴			1		
	(50-60)	口				1	1
		胴					
層序不明		口					1
		胴				1	
計			1	1	1	3	6

ロ、《荻堂式土器》

荻堂式土器は総計39点(口縁部23点、胴部16点）の出土で、前述のように土器の全出土量からすればわずか3.1％であるが、型式の同定がなされたものの中では最も出土量が多い。本型式の層序別出土状況をみると総計39点（≒100％）のうち、表採品は6点（15.4％)、第Ⅰ層は1点(2.6％)、第Ⅱ層で2点(5.1％)、第Ⅲ層29点(≒74.4％)、第Ⅴ層は1点(2.6％)で、第Ⅲ層に最も多い（表4)。

荻堂式の器種には壺形と深鉢形があり、後者が33点（84.6％）と多い。両者は口縁部の形状によって細分される。両者ともに底部資料は見受けられない。本型式の器厚は両者ともに8㎜前後が主体である。

壺形は無文だが、深鉢形は単篦・半截竹管・叉状工具の3種の工具で5種の文様（連点文、押し引き文、沈線文、鋸歯文、斜行文）が施される。テンパーは2類が認められる。すなわちチャート粒及び石英粒を混入するもの（A類)、石英粒及びチャート粒の他石灰質粒子を混入するもの（B類）であるが、前

者が主体で、後者はわずか１点のみである。以下、壺形及び深鉢形は口縁の形態に即し、胴部については文様別にまとめ概要を記す。

１、壺形土器

荻堂期の壺形土器は総数６点の出土で、本型式〔39点（100％）〕のうち15.4％を占め、これは他の類例遺跡に比しても高い割合を示す。これら６点の土器破片には山形口縁を呈するもの（第Ⅰ類）と山形突起の認められないもの（第Ⅱ類）とがあり、前者は４個の突起をもつものと、２個と推定されるものとがある。底部は確実な資料がないため不明である。有文資料は無く、全て無文である。器面調整について言えば、口縁部の表裏面は丁寧になで消されるが、肩部以下に擦痕が目立つ。テンパーは全てＡ類となるが、３点は小粘土塊も混入している。

ｉ）第Ⅰ類（５点）〔第７図12、第８図12・13、第９図５・14（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－12、第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－12・13、第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－５・14）〕

第Ⅰ類は先述のように山形口縁を有するグループである。

７図12（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－12）は表採の口縁部片で、口径は不明。山形を呈すると思われる。何個の山形突起をつけたかは不明。無文で直口状を呈し、長さ３㎝前後の長頸である。表面はナデ調整により、裏面は斜位の擦痕をなで消すが部分的に消え切らない。表面には指頭痕が目立つ。テンパーとして石英粒、小粘土塊などを使用し（Ａ類）、器面への露出が著しい。焼成は良好、表面は橙褐色、裏面は赤褐色を呈する。

第８図12（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－12）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部片で、破片から推定される形状は短頸であり、山形頂部付近が若干肥厚する。口径は不明。表裏ともナデ調整を行っており、口唇部はやや丁寧になでられている。胎土にチャート及び石英微細粒を含むがほとんど目立たない（Ａ類）。色調は黄橙色、焼成は良好である。

第８図13（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－13）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部で、口径は推算4.6㎝。４個の山形突起が推定され、口縁はやや外反する。頸部が短く、肩部の張りが強くなる器形が推定される。表面は横位の擦痕をなで消し、裏面は全面がナデ調整による。テンパーに細かいチャート粒及び石英粒が使用されるが（Ａ類）、器面への露出は少なくあまり目立たない。色調は黒色を呈し、焼成は良好。

第９図５（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－５）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁部片で、口径約4.6㎝を計る。口径のわりに山形突起の幅が広く、かつ低平であることから２個の山形に属すると思われる。頸部の長さは３㎝前後で、上部へ向かって外反し、やや開きぎみである。表面は口縁全面に横・斜位の擦痕を施した後なで消すが、消え切らない箇所が多い。裏面には粘土帯の継ぎ目が残り、整形の粗雑さを思わせる。焼成は普通で、器色は褐色を呈していたと思われるが、石灰分の付着により全体的な色調は不明。テンパーとしてチャート及び石英が使用される（Ａ類）。

第９図14（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－14）はＷ－２

グリット第Ⅴ層（基盤層）出土の荻堂期の壺形口縁で、本貝塚の最深部より出土した。口唇部が外傾し、口縁上端が内傾する珍しい器形である。口径約4.1cmを計り、頸の長さが3cm前後の長頸の部類に入り、直立気味の形態を示す。器面調整は表面は口唇部を除いて全体的に横・斜位の擦痕を施した後、口頸部のみなで消すが、胴上部に調整痕が残る。裏面はナデ調整のみ行っている。器質はかなり堅緻で、本貝塚最古式の土器とは思えないほどの焼成度である。色調は橙褐色、テンパーとして粗い石英粒、チャート粒の他小粘土塊を混入する（A類）。

ⅱ）第Ⅱ類（1点）〔第7図11（第Ⅵ図版A・B－11）〕

第Ⅱ類は前述のように山形突起の有無が確認できないものである。

第7図11（第Ⅵ図版A・B－11）は表採の口縁部片で、山形頂部から外れた口縁資料である。山形を呈するのか平口縁なのか口縁の残存部が小さいために確認できない。口縁上部は直立気味の短頸である。表裏面ともに横位のナデ調整がなされ、胎土に多量のチャート及び石英が混入され、小粘土塊も見受けられる（A類）。器色は赤褐色で焼成は良好。本標品の有する特徴から荻堂期に含めた。

荻堂期の壺形資料で、4個の山形突起を有するものは伊平屋島久里原貝塚（註10）、伊是名島伊是名ウフジカ遺跡（註11）、伊江島浜崎貝塚（註12）、沖縄市室川貝塚（註13）などに見受けられ、2個の山形突起を有するものは代表的な遺跡に嘉手納町嘉手納貝塚（註14）が挙げられる。平口縁は久里原貝塚（註10）、嘉手納貝塚（註14）などで出土がある。このように壺形には上記3種の口縁形態があり、本貝塚では4個、2個の突起をもつものが出土している。平口縁の1点は小破片のため性格は不明である。1993年報告の伊是名貝塚の資料中（註5）には伊波式期の壺形がカラー写真で紹介されており、本貝塚の6点の壺形土器に類似している。検討を要する資料であろう。

2、深鉢形

深鉢形の口縁部は計17点出土しており、本型式の43.6％を占める。前述のように山形突起の残存するものと（第Ⅰ類）、突起部から外れた口縁の部分資料（第Ⅱ類）とに大別した。これらを細別した分類表は表6の通りである。

文様は連点文、押し引き文、沈線文、鋸歯文、斜行文の5種がある。連点文、押し引き文、沈線文の単一文様（第一文様帯）だけが残存するものや、押し引き文と斜行文を組み合わせるもの、押捺刻文と斜行文を組み合わせるもの、押し引き文・縦位区画文と鋸歯文を組み合わせるものなど複数の文様を組み合わせるものも見受けられる。

器面調整をみると胴部から下方に擦痕が残ることが多く、頸胴部付近はなで消される。しかし、頸胴部にも著しく擦痕が残存するものもある。

口縁部におけるテンパーはA類をのみ使用されるが、小粘土塊を混入するものも1点ある。

表６　荻堂式口縁の形態分類表

	山形の有無	頂部形態	瘤部外面形状	頂部正面観
壺形 (6)	第Ⅰ類（山形口縁部）（5） 第Ⅱ類（頂部を外れた部分資料）（1）	第１種（若干肥厚）（1） 第２種（無肥厚）（4）		①（均整山形）（1） ②（不明）（3）
深鉢形 (17)	第Ⅰ類（山形頂部）（12） 第Ⅱ類（頂部を外れた部分資料）（5）	第１種（瘤状突起）（5） 第２種（若干肥厚）（5） 第３種（不明）（4）	ⅰ凹部形成（2） ⅱ丸み（3）	①均整山形（5） ①（偏形）（2） ②（不明）（1）

ⅰ）第Ⅰ類（山形頂部）（12点）

第Ⅰ類は前述のように山形突起を有するグループである。

深鉢形土器の山形頂部は、表６のように明確な瘤状突起をもつもの（第１種）と若干の肥厚を示すもの（第２種）に分類される。瘤状突起は瘤部外面が凹部を形成するもの（ⅰ）と瘤全体が丸く膨らむもの（ⅱ）に細分される。また、山形頂部の正面観が均整のとれた山形をなすもの（①）しか出土していない。第２種の「若干の肥厚」を示すタイプは現在のところ類型化できないが、この第２種の正面観についていえば均整のとれた山形をなすものはなく、片方が急傾斜をなす変形的なもの（①）と、小破片のため形状の把握できないもの（②）とがある。

①　第Ⅰ類－第１種－ⅰ－①（２点）〔第９図２・７（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－２・７）〕

第９図２（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－２）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の山形口縁で、正面観は均整のとれた山形を呈する。同頂部に瘤状突起を貼付し、突起外面が凹部を形成するもので瘤部の突出が著しい。口径約12cmを計り、口縁部に幅約2.5mmの巾狭な単篦工具による横位押し引き文が１条認められ、左から右方向への施文である。表面はナデ調整され、内面は擦痕をナデ消すが十分でない。テンパーにチャート粒及び石英粒が多量に混入され、器表への露出が見られる（Ａ類）。淡褐色を呈し、焼成良好。

第９図７（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－７）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル40-50）出土の口縁部破片で、上記と同種の瘤状突起を貼付する。しかし、外面への突出は弱い。横位文様が施されていたと思われるが、文様最上部（第一文様帯の最上部文様）で破損しており、施文が確認できるのみである。表裏面ともにナデ調整され、チャート粒及び石英粒を胎土に混入する（Ａ類）。器色は淡褐色、焼成は良好である。

② **第Ⅰ類ー第1種ーⅱー①（3点）**〔第9図1・9・11（第Ⅷ図版A・B－1・9・11）〕

第9図1（第Ⅷ図版A・B－1）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁破片で、頂部は均整のとれた山形を呈し、同部外面は丸く造形され、口径は約10.4cmを計る。文様は第二文様帯まで残存し、幅約3mmの巾狭な単篦工具による押し引き文を5条、第一文様帯に配し、第二文様帯に同種工具による1条の鋸歯文を配する。また、山形突起直下に1条の縦位区画文が配される。口頸部の施文は左から右の方向である。表裏面ともに擦痕を斜めに施し、それをなで消すが消え切っていない。裏面も同様であるが、裏面には指頭痕による凹凸も目立つ。胎土に微細のチャート粒及び石英粒を混入し、ほとんど表面に露出しない（A類）。色調は淡褐色で、焼成はかなり良好。

第9図9（第Ⅷ図版A・B－9）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル50-60）出土の口縁部片で、山形頂部右半部の資料である。瘤状突起に属するが、外面に凹部が認められないことから、丸く膨らむタイプであろう。頂部欠落のため全景は窺えないが、瘤状突起になることから考えても同部の正面観は均整な山形を呈するものと思われる。第一文様帯に叉状工具による横位の連点文が3組見受けられる他、山形頂部へ移行する口唇部にも同種工具による平行短沈線文が1組残存する。施文方向は左から右である。器面調整は表裏面ともに斜位の擦痕をなで消している。テンパーにチャート及び石英が混入され（A類）、色調は赤褐色、焼成は良好である。

第9図11（第Ⅷ図版A・B－11）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル50-60）出土の瘤状突起部の破損資料で、文様は残っていない。表裏面ともにわずかに擦痕が残存し、それをなで消しているが、完全ではない。テンパーにチャート及び石英が使用され（A類）、色調は瘤部がやや黒色を呈する他は、橙褐色で焼成はやや良好。器面は砂質のザラつく手触りである。

③ **第Ⅰ類ー第2種ー①（2点）**〔第7図9・10（第Ⅵ図版A・B－9・10）〕

第7図9（第Ⅵ図版A・B－9）は表採の山形頂部資料で、山形頂部は左右非相称的であることから、一般に主要（中央）突起の左右に設けられる副突起の可能性があるが、主要頂部が偏形を呈する資料の可能性もある。後者の類例としては沖縄市知花遺跡が挙げられる（註15）。資料の増加が望まれる。第一文様帯に叉状工具による1組の横位押し引き文が残存する。施文は浅く、方向は左から右である。ナデ調整されるが器面は摩耗が著しく、部分的に石灰分も付着しており、詳細は不明。多量のチャート及び石英が混入される（A類）。焼成はやや悪く脆弱、色調は黄褐色を呈する。頂部は摩耗しているが、原形は若干肥厚していたものと思われる。

第7図10（第Ⅵ図版A・B－10）も表採の山形頂部資料で、頂部正面観において山の片側が急傾斜をなすものであり、左右アンバランスである。同部は若干肥厚するものの、前項と同じく副突起の可能性がある。口縁部の第一文様帯に幅約5.5mmの単篦工具による横位押し引き文が2条認められ、施文方向は左

から右である。表裏面ともに横位の擦痕をなで消すが、特に表面には擦痕が著しく残る。テンパーにチャート及び石英が多量に混入され、器表への露出が目立つ（A類）。色調は褐色、焼成は良好である。

④ **第Ⅰ類－第2種－②（1点）**〔第8図2（第Ⅶ図版A・B－2）〕

第8図2（第Ⅶ図版－2）はW－3グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁破片で、上端部を若干丸く造形した肥厚を示す。突起頂部へ移行する左半部の資料で、文様は認められない。荻堂式の無文深鉢形かと考えているが壺形の可能性もある。器面は両面ともにナデ調整。テンパーに石英粒やチャート粒を混入し（A類）、色調は淡褐色、焼成は良好。器面は砂質で多少ザラついた手触りである。

⑤、**第Ⅰ類－3種（4点）**〔第8図4・11・16、第9図10（第Ⅶ図版A・B－4・11・16、第Ⅷ図版A・B－10）〕

第8図4（第Ⅶ図版A・B－4）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の山形口縁の左側の小片である。口縁部直下に半截竹管状工具による横位の沈線が1条認められ、また、現破片の下端に斜行沈線様の傷が見受けられるが正体不明。また、施文方向も不明である。表裏ともに丁寧にナデ調整される。テンパーにチャート及び石英細粒を使用（A類）。焼成は良好、色調は淡褐色を呈する。

第8図11（第Ⅶ図版A・B－11）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁資料で、山形左半部の移行部分である。叉状工具による2組の連点文が第一文様帯に残る。施文は左から右である。表裏面ともに擦痕をなで消し、細かいチャート粒、石英粒を胎土に混入する（A類）。表面は黒褐色、裏面は褐色を呈す。焼成は良好である。

第8図16（第Ⅶ図版A・B－16）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の口縁部で、山形頂部へ移行する左側の資料である。第一文様帯の上下の連点文は2組認められるが、やや間隔をおいて施文されており、通例の施文配置と若干異なっている。施文は左から右の方向である。工具は前述した一般の叉状工具と若干異なり、文様の横断面から見ると工具の先端がV字状を呈する叉状工具が推定される。表面では斜位、裏面では横位の擦痕をなで消すが、消え切らない。テンパーとして石英粒、チャート粒が混入されており（A類）、茶褐色を呈し、焼成は良好である。

第9図10（図版Ⅷ A・B－10）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル50-60）出土の山形口縁の資料である。頂部へ移行する右側部分で、口縁部は若干肥厚している。口縁部の第一文様帯に叉状工具による連点文が2組認められるが、以下は不明。口唇部にも同種工具による1組の短沈線文が配され、左方より右方へ施文する。表面は縦位、裏面は横位の擦痕をなで消し、胎土にチャート粒及び石英粒を混入する（A類）。表面は茶褐色、裏面は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

ⅱ）第Ⅱ類

第Ⅱ類は、前述のように山形頂部を外れた部分の資料である。したがって山形頂部を形成するのか平口縁を呈するのか形態の把握できない資料である。以下、その概略を述べる。

第Ⅱ類（5点）（第7図8、第8図3・19、第9図3・6〔第Ⅵ図版A・B－8、第Ⅶ図版A・B－3・19、第Ⅷ図版A・B－3・6〕）

第7図8（第Ⅵ図版A・B－8）は表採品で、器面摩耗の著しい口縁資料である。第一文様帯のみ残存し、叉状工具による2組の連点文が見受けられるが、全面摩耗のため施文方向は不明である。調整も不明瞭であるが、現状から推察するとナデであろう。テンパーに粗いチャート粒及び石英粒を混入し（A類）、色調は淡橙色を呈し、焼成はやや良好。

第8図3（第Ⅶ図版A・B－3）はW－2グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁部小破片で、全面摩耗している。第一文様帯に2組の連点文、口唇部にも同種工具によると思われる1組の短沈線文が見受けられる。施文は他と異なり右方より左方になされる。器面の残りも悪いが、ナデ調整されたものであろう。テンパーとしてチャート粒及び石英粒、その他粘土の小塊を含む（A類）。橙褐色を呈し、焼成はやや不良。

第8図19（第Ⅶ図版A・B－19）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル20-30）より出土した口縁資料である。口径約11.2cmを計り、第二文様帯まで残存する。第一文様帯には幅約3mmの巾狭な単篦工具による横位押し引き文が3条施され、第二文様帯には同工具による斜位の短沈線文が見受けられる。荻堂式の後出タイプとみられる。表裏面ともに横位の擦痕を比較的丁寧になで消す。胎土にチャート粒及び石英粒を混入し（A類）、色調は赤褐色、焼成良好である。

第9図3（第Ⅷ図版A・B－3）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁部片で、口径約12.2cm。第一文様帯には叉状工具による3組の連点文が見受けられ、施文は左から右の方向である。混入物として石英粗粒、チャート粒が認められる（A類）。調整は表裏面ともに横位の擦痕をなで消す手法である。焼成は良好。表面は赤褐色、黒色のまだらとなり、裏面は茶褐色を呈する。

第9図6（第Ⅷ図版A・B－6）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁資料で、口径約11.8cmである。文様は第二文様帯まで施されており、第一文様帯には半截竹管状工具による横捺刻文を2条横走させ、第二文様帯の押捺刻文は左下がりの斜行文となっている。第一文様帯下段の1条の押捺刻文は、いったん施文を止め、段を違えて描き始めたため、文様の始点と終点は上下に重なっている。このような段違い施文が何回か繰り返されるのか、それともこの1箇所だけなのかは不明。荻堂式における第二文様帯の不規則な斜行文は希少な例であるが、室川貝塚に出土例がある（註13）。施文は第一文様帯は他の資料と異なり右から左の方向で、第二文様帯は上から下の方向である。表面は縦位の擦痕を、裏面は横・斜位の擦痕をそれぞれなで消すが、裏面の口縁下約4.7cmの箇所に横位の擦痕が明瞭に残る。全体的に粘土帯の接合部分で指頭痕による凹凸が目立つ。テンパーとして粗いチャート粒及び石英粒が混入され（A類）、器面への露出が著しい。焼成は良好。表面の器色は褐色、黄橙色のまだら、裏面は赤褐色を呈する。

ⅲ）荻堂式の胴部資料

ここに分類される胴部資料は荻堂式の胴部片で、叉状工具、半截竹管状工具、単篦工具によって施文され、平行文のみ施されるものや、平行文と鋸歯文を組み合わせる文様などが認められる。その他、上段に半截竹管状工具による文様、中段に短沈線文を施す横位の外耳、下段には半截竹管状工具による１条の鋸歯文を施すというそれぞれ異なった３段構成の文様を施すものもある。しかし、胴部も小破片が多く文様構成が完全に分かるものは少ない。よって残存部における文様で分類する。テンパーはＡ類が15点、Ｂ類が１点である。

以下、文様を中心に記述する。

①　連点文のみ（４点）〔第８図１・５・６、第９図12（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－１・５・６、第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－12）〕

第８図１（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－１）はＷ－３グリット第Ⅰ層（レベル20-30）出土の胴部片で、叉状工具による連点文を施していることから荻堂式に分類したが、小破片であるため第一文様帯のものか、それとも第三文様帯のものか不明。表面は茶褐色、裏面は赤褐色を呈し、焼成は良好。テンパーとしてチャート及び石英の粗粒を混入する（Ａ類）。

第８図５（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－５）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部の破片で、叉状工具による連点文が３条左から右方向へ横位に施されるが、どの文様帯に属するかは不明。表裏面ともに斜位の擦痕を施した後なで消すが、表面には擦痕が著しく残存。焼成はやや悪く、橙褐色を呈する。胎土中にチャート粒及び石英粒を多量に混入する（Ａ類）。

第８図６（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－６）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部破片で、２条の横位連点文が残存しており、どの文様帯に属するかは不明であるが、文様帯の下方は無文である。施文方向は左から右である。テンパーとしてチャート粒及び石英粒を多量に含み（Ａ類）、表裏面ともにナデ調整される。焼成は良好、表面は赤褐色、裏面は茶褐色を呈する。

第９図12（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－12）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル50-60）出土の胴部片で、叉状工具による１組の横位連点文を施すが、どの文様帯に属するかは不明。施文は左から右方向と思われる。器面はナデ調整される。焼成は良好で、表面は橙褐色、裏面は黄橙色を呈する。テンパーとして石英粗粒、チャートの粗粒を胎土に混入する（Ａ類）。

②　連点文＋鋸歯文（２点）〔第８図８・10（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－８・10）〕

第８図８（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－８）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部で、叉状工具による鋸歯文と横位連点文の組み合わせである。この文様がどの文様帯に属するかは不明であるが、諸資料の施文方向が概して左から右であることから前者を上段、後者を下段に位置づけた。胎土にチャート粒及び石英粒を混入し（Ａ類）、焼成は良好。器面は横位のナデにより調整される。赤褐色を呈する。

第８図10（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－10）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部片

で、２組の連点文と１組の鋸歯文が認められる。下段の連点文は途中で途切れている。鋸歯文は低平な幅の広い山を描く。文様は全て左から右の方向に施される。この両文様が第一・第二文様帯に属するのか、それとも第三・第四文様帯に属するのかは現資料からは不明。焼成はやや良好で、裏面は斜位の擦痕をなで消す。テンパーとしてチャート及び石英の微細粒（Ａ類）を含むがほとんど目立たない。全体的に石灰分が付着している。

③　**鋸歯文のみ（５点）**〔第７図13、第８図７・９・17、第９図４（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－13、第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－７・９・17、第Ⅷ図版ａ・ｂ－４）〕

第７図13（第Ⅵ図版Ａ・Ｂ－13）は表採の胴部片で、最下段の文様帯である。ただし、第二文様帯のものか第四文様帯のものかは不明。叉状工具による低平な鋸歯文を工具を器面から離すことなく連続的に施す。施文方向は左から右である。表面は斜位、裏面は横位の擦痕を施した後、なで消すが消え切らない。胎土にチャート粒及び石英粒を混入する（Ａ類）。器色は赤褐色を呈するが部分的に石灰分が付着し、色調がややくすむ。焼成はやや良好で、ザラついた手触りである。

第８図７（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－17）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の鋸歯文部分の資料である。約３㎜の巾狭な単篦工具で左から右方向へ施文される。どの文様帯に属するかは不明。胎土にチャート粒及び石英粒を混入し（Ａ類）、表面は他と異なり黄橙色を呈する。表裏面ともにナデ調整され、粉っぽい手触りとなる。

第８図９（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－９）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部で、鋸歯文の一部分が見受けられ、施文は左から右の方向であろうか。どの文様帯に属するかは不明。チャート及び石英の微細粒を胎土に混入するが（Ａ類）ほとんど目立たない。焼成は良好で、器厚は約５㎜の薄手である。色調は赤褐色、ナデ調整される。

第８図17（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－17）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の胴部で、鋸歯文の一部分が見受けられる。どの文様帯の鋸歯文かは不明。半截竹管状工具による平行の沈線文が左から右の方向へ施文される。焼成は良好で、胎土にチャート粒及び石英粒を混入する（Ａ類）。色調は他と異なり黄橙色を呈し、粉っぽい手触りである。

第９図４（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－４）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の胴部の破片で、最下段文様帯の残存部である。最下段の文様ではあるが、２段文様の最下段か、４段文様の最下段かは不明。幅約4.5㎜の半截竹管状工具によって左から右方向へ施文され、不規則に連結する。表裏面ともに擦痕で調整した後、なで消しているが不完全である。鋸歯文の上にみられる２組の縦位沈線は文様ではなく、偶然の傷である。このような調整は他の荻堂式には見当たらない。今後の類例を待ちたい。焼成はやや悪く、表面は黄橙色、裏面は茶褐色を呈し、器面はザラつく。胎土中にチャート粒及び石英細粒が含まれる（Ａ類）。部分的に石灰分が付着している。

④　押し引き文＋鋸歯文（３点）〔第８図14・18、第９図８（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－14・18、第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－８）〕

第８図14（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－14）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の胴部で、約2.5㎜の巾狭な単篦工具によって上段に横位押し引き文、下段は低平な鋸歯文によって構成される。施文は左から右の方向である。表面に横位、裏面に斜位の擦痕を施した後、なで消すが表面は著しく残存する。テンパーにチャート粒及び石英微細粒を混ずるが（Ａ類）、ほとんど目立たない。色調は赤褐色で、焼成はやや良好。ザラつく手触りである。部分的に石灰分が付着する。

第８図18（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－18）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の胴部で、２段の文様帯が確認できる。約２㎜の巾狭な単篦工具によって施文され、施文方向は他と異なり右から左である。上部の文様は横位押し引き文が１条認められ、下段には押し引きによる鋸歯文が１条施されている。施文は浅く不明瞭。表裏面ともに横位の擦痕をなで消すが、表面には著しく残る。テンパーに石英粗粒、チャート粗粒を多量に混入し（Ａ類）、器表への露出が著しい。焼成は良好で橙褐色を呈し、手触りはザラつく。

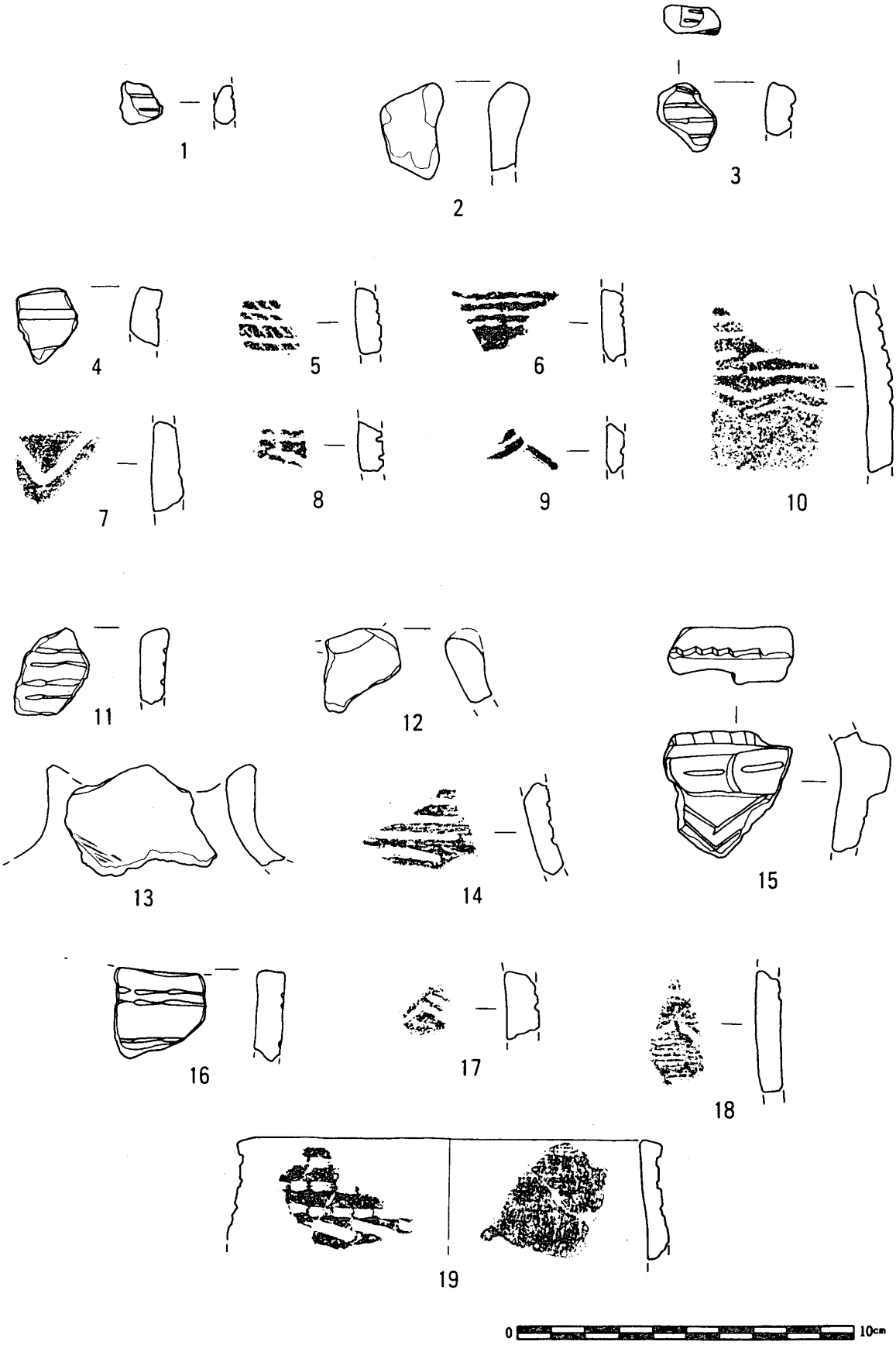
第９図８（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－８）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル40-50）出土の胴部破片で、２種の施文具を使用している。すなわち約5.5㎜の巾広の単篦工具による横位押し引き文の下方に幅約３㎜の単篦工具により、鋸歯文様の斜行沈線が認められる。後者を鋸歯文とみなし、ここでは荻堂式に含めた。施文方向は左から右である。表面では斜位の擦痕、裏面では横・斜位の擦痕をなで消すが、表面に著しく残存する。焼成は良好で橙褐色を呈する。胎土混入物としてチャート粒及び石英粒を使用する（Ａ類）。

⑤　押し引き文＋斜行文（１点）〔第９図13（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－13）〕

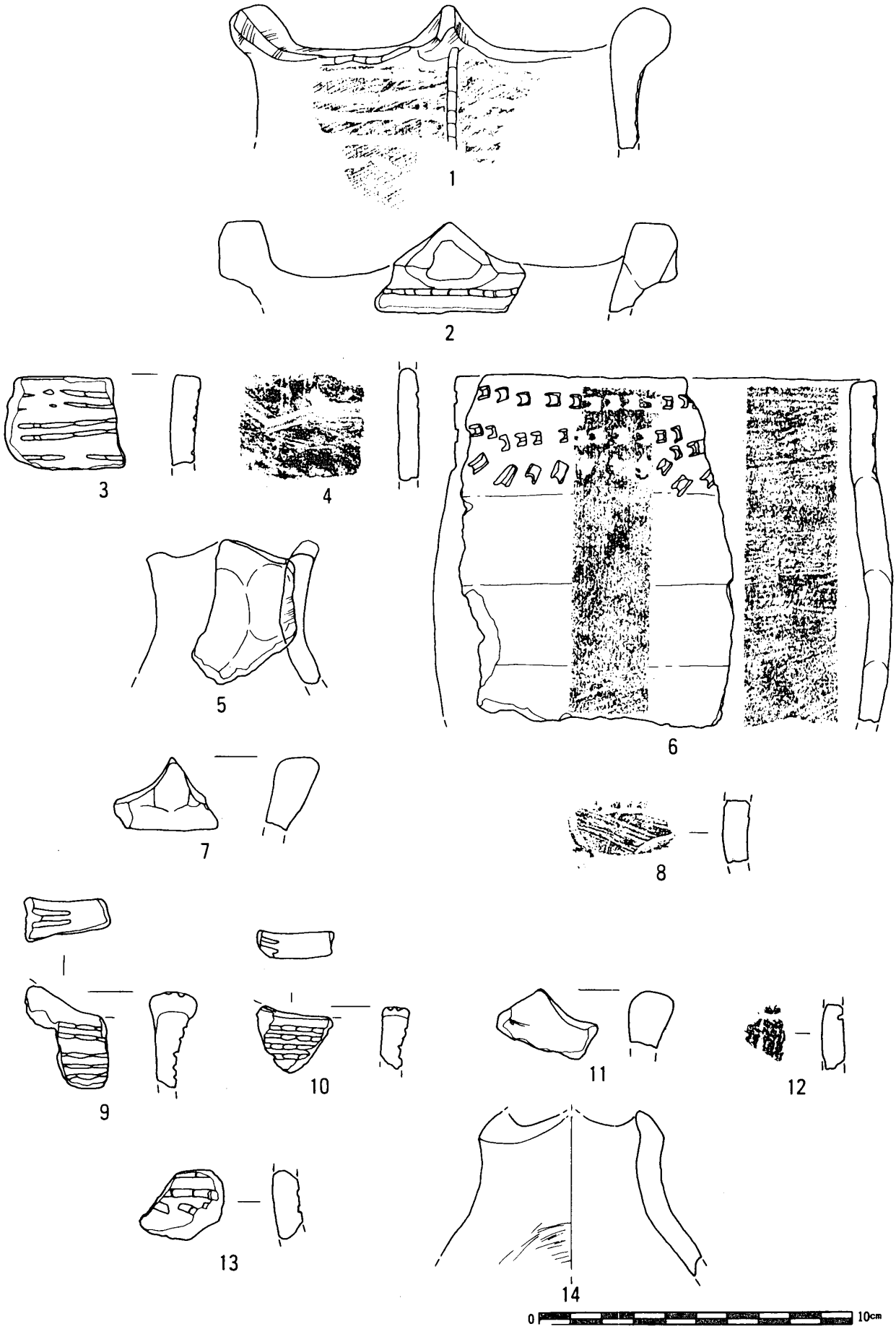
第９図13（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－13）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル60-70）出土の胴部で、下段の２文様帯を残す。上部の２条の横位押し引き文は約2.5㎜の巾狭な単篦工具によるもので、荻堂式の連点文に通じ、下部の同種工具による斜沈線文も荻堂式に類例がみられる。施文は左から右方向へなされる。胎土混入物にチャート粒及び石英粗粒を用い（Ａ類）、焼成は良好で、赤褐色を呈する。表面はナデ調整され、裏面は横位の擦痕をなで消しているが不十分である。

⑥　その他（１点）〔第８図15（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－15）〕

第８図15（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－15）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の外耳を有する胴部資料である。三段の異なる文様帯が見受けられる。現破片の上段は幅約４㎜の半截竹管工具による横位押し引き文を右から左方向へ施文し、中段に幅約1.5㎝、最厚部約６㎜、最薄部約３㎜の外耳を貼付する。外耳は右半部が欠けている。この外耳を上面からみると鋸歯状を呈し、均整のとれた山形ではなく片方の傾斜が急をなす波状形に属しており、前面は凹面を形成すると思われる。つまり、上面からみた場合、凸形の凹面外耳が類推される。また、凹面中央部にはそれぞ



第８図　荻堂式土器
1(第Ⅰ層レベル20-30)，2･3(第Ⅱ層)，4～10(第Ⅲ層レベル0-10)，10～13･15(Ⅲの10-20)，14･16～19(Ⅲの20-30)



第９図　荻堂式土器
1～6(第Ⅲ層レベル30-40)，7･8(Ⅲの40-50)，9～12(Ⅲの50～60)，13(Ⅲの60-70)，14(第Ⅴ層：基盤層)

れ１条の横位短沈線文が施されており、沈線文の横断面から先端の尖る工具によって左から右へ施文されていることが分かる。下段は半截竹管状工具による鋸歯文であり、施文が浅いため注意しなければ叉状工具と間違えるおそれがある。施文方向は右から左である。表面は丁寧にナデ調整され、裏面は横位の擦痕をなで消すが、部分的に消え切らない。焼成はかなり良好。表面は黄橙色、裏面は茶褐色を呈する。テンパーとしてチャート及び石英の微細粒、石灰質粒子(サンゴ)が少量混入されている(Ｂ類)。この種の耳形突起の類例としては、津堅島キガ浜貝塚（註16)、沖縄市室川貝塚(註13)、伊江島阿良東貝塚(註17)、玉城村百名第二貝塚（註18）などがあり、本資料も同期に位置づけられるものと解される。

４、まとめ

本型式の器種は深鉢形と壺形の２種あり、計39点中前者は33点（84.6％）で、他の類例遺跡と同様、高比率である。深鉢形の口縁はシェヴロン状の４個の山形突起を設け、同頂部を瘤状突起で装飾するタイプと、平口縁に４個の瘤状突起を設けるだけのタイプに分けられるが、本貝塚には前者が多い。深鉢形の口径は推算可能なものについてみると約10～12cmの範囲に収まる小型である（表７)。小破片が多く器形を明示できるものは少ないが、第９図６（第Ⅷ図版Ａ・Ｂ－６）や類例遺跡の資料によると胴上部に最大径が位置する器形とみてよいであろう。底部に連続する確実な資料は得られていないが、類例遺跡の資料からすると平底となろう。文様は叉状工具、半截竹管状工具、単篦工具などを用いて連点文や押し引き文を施し、それらを鋸歯文などと組み合わせる例が多い。

壺形土器の口縁もまた山形を造形するものがあり、類例遺跡の資料からすると山形突起は４個と２個の場合がある。本貝塚の資料にも若干のバラエティーが認められる。第８図13（第Ⅶ図版ａ・ｂ－13）は４個の例で、第９図５（第Ⅷ図版ａ・ｂ－５）は頸径から類推すると４個とは認めがたく、２個になる可能性がある。底部は確実なものは得られてい

表７　荻堂式口縁部の推算口径表

	実測図番号 図版番号	器種	推算口径	口縁形態	文　様	テンパー	出土地点・層位	備　　考
1	第８図19 第Ⅶ図版A・B-19	深鉢形	約11.4cm	Ⅱ類	押し引き文 ＋斜行文	Ａ類	Ｗ－１　Ⅲ（20-30）	第二文様帯まで残存
2	第９図１ 第Ⅶ図版A・B-１	深鉢形	約10.4cm	Ⅰ類１種－ⅱ－①	押し引き文 ＋縦位区画文 ＋鋸歯文	Ａ類	Ｗ－１　Ⅲ（30-40）	第一・二文様帯
3	第９図２ 第Ⅶ図版A・B-２	深鉢形	約11.2cm	Ⅰ類１種－ⅰ－①	押し引き文	Ａ類	Ｗ－１　Ⅲ（30-40）	第一文様帯のみ残存
4	第９図６ 第Ⅶ図版A・B-６	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類	押捺刻文 ＋斜行文	Ａ類	Ｗ－１　Ⅲ（30-40）	第一・二文様帯
5	第８図13 第Ⅶ図版A・B-13	壺形	約 4.6cm	Ⅰ類	無文	Ａ類	Ｗ－２　Ⅲ（10-20）	
6	第９図５ 第Ⅶ図版A・B-５	壺形	約 4.6cm	Ⅰ類	無文	Ａ類	Ｗ－２　Ⅲ（30-40）	
7	第９図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約 4.1cm	Ⅰ類	無文	Ａ類	Ｗ－２　Ⅴ （基盤層～）	

ない。現在、類例遺跡でも壺形の確実な底部資料の報告はない。しかし、平底とみていいだろう。壺形土器は全て無文であり、表面に横位や斜め方向の擦痕を施した後、口頸部のみなで消す傾向にある。口唇部及び裏面はナデ調整される。壺形土器は本型式の総計39点中、6点（15.4%）あり、他の類例遺跡に比しても高い割合を示しており、注目される。本貝塚最深部（第Ⅴ層上面）出土の1点も荻堂式の壺形に属する。わずか1点の資料ではあるが、荻堂式土器は層位的に本貝塚の最古層を代表する。しかし、本貝塚では前項記載のように伊波式土器も若干出土しており、レベル的には荻堂式より上位から出土しているものの、このことは荻堂式の隆盛期まで伊波式が若干残存したケースとみてよいだろう。

荻堂式の口縁部形態は一連の通し番号で分類した（表6）。すなわち、深鉢形土器の口縁部17点は口縁部における山形の有無によって、第Ⅰ類の山形突起を有する口縁と、破損のため山形の様相のつかめない第Ⅱ類とに分類される。第Ⅰ類は頂部の形態によって第1種の瘤状突起（厚手肥厚）、第2種の「若干の肥厚」グループ、第3種の形状不明に細分される。第Ⅱ類は頂部欠落のため形状が把握できず、類型化できない。第1種の頂部形状は2種に分けられる。すなわち瘤部外面が凹面を形成するもの（ⅰ）と丸みを帯びるもの（ⅱ）である。

第1種の正面形は全て均整な山形を呈し、第2種は山の片側が急傾斜する偏形タイプ、正面形が不明となるタイプなどが見受けられる。第3種もまた山形頂部を欠損するので形状は不明となる。これらの口縁形態別出土状況をみると、表8のようになる。すなわち、本貝塚では荻堂式口縁資料が第Ⅲ層より15点出土したが、第Ⅰ類の1・2種に分類される装飾的口縁部は表採品2点、第Ⅱ層で1点、第Ⅲ層（0～30cm）で5点出土している。また、第Ⅱ類の口縁資料は山形頂部を外れた部分の資料か、または平口縁に瘤状突起を貼付するだけの資料である可能性もある。層位的には第Ⅰ類の出土状況に類似する。しかし、先後関係はつかめない（表8）。

表8　荻堂式口縁の形態別出土状況

形態 ＼ 層位		壺形				深鉢形						計
		第Ⅰ類			第Ⅱ類	第Ⅰ類					第Ⅱ類	
		第1種	第2種			第1種		第2種		第3種		
			①	②		ⅰ	ⅱ	①	②			
						①						
表採		1			1			2			1	5
第Ⅱ層									1		1	2
第Ⅲ層	(0-10)									1		15
	(10-20)		1	1						1		
	(20-30)									1	1	
	(30-40)			1		1	1				2	
	(40-50)					1						
	(50-60)						2			1		
第Ⅴ層				1								1
計		1	1	3	1	2	3	2	1	4	5	23

次に荻堂式土器の文様別の出土状況を層位的にみてみよう。表9は第一文様帯における文様別の出土状況で、連点文を施すものは第Ⅱ層～第Ⅲ層のレベル20cmまで出土している。押し引き文や押捺刻文は連点文に後続して出現するようである。表10及び表11にみられるように、第二文様帯及び最下段における文様には鋸歯文や斜行文があるが、これらは層位的にほぼ混在して出土していることから、時間差は認められない。しかし、型式学的には斜行文は鋸歯文の後続形態として捉えることができ、このことは同文様が単篦工具や半截竹管状工具によって施文されることからも頷けるものと思われる。また、大山式土器は3条の押捺刻文や横位押し引き文を基本としており、概して文様構成の単純化が進んでいることから、荻堂式の最下段の文様は鋸歯文→斜行文→無文化の推移が想定できる。

また、2種以上の文様の組み合わせによる文様別出土状況は表12の通りで、一定のパターンは見出し得なかった。

施文工具は前述のように叉状工具、半截竹

表9　荻堂式第一文様帯の文様別出土状況

層位＼文様		連点文	押し引き文	押捺刻文	計
表　採		2	1		3
第Ⅱ層		1			1
第Ⅲ層	(0-10)		1		1
	(10-20)	1			1
	(20-30)	1	1		2
	(30-40)	1	2	1	4
	(40-50)	1			1
	(50-60)	2			2
計		9	5	1	15

表10　荻堂式第二文様帯の文様別出土状況

層位＼文様		鋸歯文（単篦工具）	斜行文（単篦工具）	斜行文（半截竹管工具）	計
第Ⅲ層	(20-30)		1		1
	(30-40)	1		1	2
計		1	1	1	3

表11　荻堂式最下段文様帯の文様別出土状況

層位＼文様		鋸歯文（単篦工具）	斜行文（単篦工具）	斜行文（半截竹管工具）	計
表　採		1			1
第Ⅲ層	(0-10)	1			1
	(10-20)	1			1
	(20-30)		1		1
	(30-40)	2		1	3
計		5	1	1	7

表12　荻堂式の2種以上の文様組み合わせによる文様別出土状況

層位＼文様		連点文＋鋸歯文	押し引き文＋鋸歯文	押し引き文＋斜行文	押捺刻文＋斜行文	押し引き文＋（沈線文）＋鋸歯文	計
第Ⅲ層	(0-10)	2					2
	(10-20)					1	1
	(20-30)		2	1			3
	(30-40)		1		1		2
	(40-50)		1				1
	(60-70)			1			1
計		2	4	2	1	1	10

管状工具、単篦工具の３種が認められ、これらはそれぞれ単独に使用される。しかし１点ではあるが、半截竹管状工具と単篦工具を併用し、かつ外耳を加えた複雑な施文例〔第８図15（第Ⅶ図版Ａ・Ｂ－15)〕もある。荻堂式土器の施文具は叉状工具が17点（43.6％)、単篦工具が10点（25.6％)、半截竹管状工具が３点（7.7％）となり、叉状工具が出土量の約半数を占めるが、単篦工具による施文例も少なくない（表13)。このような比率は本貝塚の荻堂式が伊波式土器の流れを残しつつ、後続の大山式土器へ移行する段階の状況を示しているものと思われる。

表13　荻堂式土器の工具別出土状況

工具／層位	部位	叉状工具	半截竹管工具	単篦工具	半截竹管＋単篦工具＋耳状突起	計
表　採	口	2		1		4
	胴	1				
第Ⅰ層	口					1
	胴	1				
第Ⅱ層	口	1				1
	胴					
第Ⅲ層	口	6	2	3		25
	胴	7	1	5	1	
計		18	3	9	1	31

荻堂式の胎土混入物はＡ・Ｂ類の２類が認められ、Ａ類は38点、Ｂ類は１点のみの出土であった。Ａ類は稀に小粘土塊を含むこともある。Ｂ類はチャート及び石英のほか石灰質粒子（サンゴ）を含むものであるが、わずか１点のみの出土であることから意図的な混入ではなく、土器の製作過程において偶然に混入したものであろう。荻堂式もまた伊波式同様、Ａ類の使用を基本とする。

ハ、《大山式土器》

大山式土器は表採１点、第Ⅱ層２点、第Ⅲ層13点の計16点（1.3％）で、口縁部８点、胴部８点の出土である。第Ⅱ層からⅢ層のレベル40cm間にかけて出土する（表４)。本型式における口縁部と胴部の割合は各々50％である。器種は全て深鉢形に属し、口縁の断面形状は直口状及び緩やかな外反の２タイプ認められる。胴は弱い張りを示し、最大径は胴上部に位置する。底部に連続する資料はないが、類例遺跡の資料から平底が類推される。文様は２類認められる。すなわち、第Ⅰ類は沈文のみを有する資料で、文様幅の広狭から２種に分類される。第１種は幅５mm以上のもの、第２種は4.9mm以下のグループである。第Ⅱ類は沈文の他、凸帯及び擬凸帯を有する一群で、さらに２種に細分が可能である。すなわち、第１種は凸帯、第２種は擬凸帯の土器である。文様幅は概して５mm以上である。また、１点のみ、文様下端部欠落のため分類できないものもある。テンパーは全てＡ類（チャート粒＋石英粒）である。

以下、各グループについて記述する。

１、第Ⅰ類（10点)

前述のように第１類は凸帯及び擬凸帯を有さない一群で、文様の押捺刻文は施文具先端の幅から２種に分類される。第１種２点、第２種は８点の出土である。

ⅰ）第１種〔第10図４、第11図３（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－４，第Ⅹ図版Ａ・Ｂ－３)〕

第Ⅰ種は先述のように文様の幅が５mm以上のもので、２点のみの出土である。

第10図４（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－４）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部で、胴の最大径は約15.4㎝、器厚約９㎜の比較的厚手の土器である。幅約6.5㎜の押捺刻文が２条認められるが、上部文様の下端で欠損している。施文は単篦工具による。同部は粘土帯の接合部でもある。施文方向は他と異なり右から左方向で、深めに施文される。器面はナデ調整を行うが、裏面には横位の擦痕も認められる。テンパーにチャート粒及び石英粒を混入し、焼成良好。赤褐色を呈する。

第11図３（第Ｘ図版Ａ・Ｂ－３）はＷ－３グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の胴部の破片で、器厚は１㎝前後の厚手である。胴径は約18㎝。破片上端に２条の横位押し引き文が認められ、幅約5.5㎜である。単篦工具で左から右へ施文する。文様は浅めである。器面はナデ調整を行うが、表面にはほぼ全面に斜位の擦痕、裏面には縦位の擦痕が部分的に残る。テンパーはチャート及び石英で、色調は赤褐色、焼成は良好である。なお、下端は粘土帯の接合部から欠損する。

ⅱ）**第２種**〔第10図１～３・５・７・９・11、第11図２（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－１～３・５・７・９・11、第Ｘ図版Ａ・Ｂ－２）〕

第10図１（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－１）は表採の口縁資料で、上端をわずかに外反させる。口縁直下に押し引き文が１条見受けられる。施文方向は左から右で、浅めである。文様幅は約３㎜と巾狭である。表裏面ともにナデ調整され、焼成はやや良好、器色は赤褐色である。テンパーとして石英、チャートを混入する。

第10図２（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－２）はＷ－１グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁部片で、薄手である。幅約３㎜の刺突様の押捺刻文を不規則に施し、３条認められる。施文は左から右方向である。両面ともナデ調整を行う。テンパーとしてチャート、石英が混入されている。橙褐色を呈し、焼成は普通である。

第10図３（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－３）はＷ－３グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の頸胴部の破片で、破損、摩耗が著しい。表面に辛うじて幅約４㎜の押し引き文が２条横位に認められる。単篦工具を使用し、右から左方向に施文する。文様は浅めである。表面は摩耗によって調整痕は不明確だが、裏面にはわずかに擦痕が見受けられる。テンパーとしてチャート粒及び石英粗粒を混入する。表面は黄橙色、裏面は橙褐色を呈する。焼成は悪く、脆弱である。

第10図５（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－５）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の頸胴部片で、幅約３㎜の押し引き文が左から右へ２条施される。表裏面ともに擦痕をなで消すが、特に表面は擦痕の残りが著しい。胎土にチャート及び石英を混入し、色調は茶褐色、焼成は悪く、脆弱。

第10図７（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－７）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部片で、単篦工具で幅４㎜前後の押し引き文を施す。押し引き文は２条認められ、いずれも施文は浅く、左から右方向である。両面ともに横位の擦痕が著しい。テンパーに石英及びチャートが認められる。色調は茶褐色で、焼成は良好である。

第10図９（第Ⅸ図版Ａ・Ｂ－９）はＷ－１

グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の胴部の破片で、全面に石灰分の付着がみられる。幅4㎜前後の押し引き文を2条配する。施文は単篦工具による。施文方向は左から右である。器面はナデ調整を行うが、部分的に横・斜位の擦痕が見受けられる。テンパーとして石英粒、チャート粒が混入される。色調は橙褐色、焼成は悪く脆弱である。

第10図11（第Ⅸ図版A・B－11）はW－3グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部片で、山形口縁の可能性がある。残存部は直口に近く、器厚約9㎜の厚手土器である。約3㎜幅の半截竹管状工具による押し引き文が2条見受けられるが、先細りの工具によるため、文様幅は4.5㎜程度になる。上部文様は斜位の方向をとり、下部の文様はやや横位に施されるが同文様下端で欠損する。器面は表裏ともに目の粗い擦痕を施し、それをなで消しているが完全には消え切らない。色調は橙褐色を呈し、焼成はやや良好。部分的に石灰分の付着が見受けられる。胎土にチャート・石英の粗粒を混入する。

第11図2（第X図版A・B－2）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の胴部片で、3条の押し引き文を左から右方向へ描き、施文は先端の幅約3.5㎜の単篦工具によるが、上部が幅広になる工具によるため文様は約4.5㎜程の幅となる。器面は表裏ともに横、斜めの擦痕を施した後なで消すが、部分的に残る。また、整形時の器面調整は粗雑で器面は平滑にならずに凹凸が著しい。チャート及び石英を胎土に多量に混入し、色調は茶褐色、焼成は脆弱である。

2、第Ⅱ類（5点）

第Ⅱ類は凸帯及び擬凸帯を有する一群で、第1種の凸帯文と第2種の擬凸帯とに分類される。前者は1点、後者は4点の出土である。また、第2種は凸帯文及び擬凸帯を有する他、沈文も施されるが、前者には沈文はない。

ⅰ）第1種〔第11図1（第X図版A・B－1）〕

第1種は口縁部に凸帯文を横走させるもので、無文である。1点の出土。

第11図1（第X図版A・B－1）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル20-30）より出土した山形口縁の破片で、口縁部付近の器厚は約1㎝、比較的厚手の土器である。外反は認められず直口状を呈する。口唇下約2㎝の箇所に、幅約1㎝の凸帯文をほぼ口縁に沿って1条巡らす。凸帯の断面形状は台形で、幅は約1.5㎝、厚さは約5㎜である。器面はナデ調整を行っているが、表裏面ともに横あるいは斜めの擦痕が部分的に残る。凸帯上面にも擦痕が残存する。凸帯に隣接する上下の器面は、幅約7㎜のヘラ状工具で軽くなでられ、同部は浅い凹部を形成する。混入物としてチャート及び石英が多量に含まれる。焼成は良好、器色は表面褐色、裏面は焼けて黒色を呈する。類例に伊平屋島久里原貝塚（註10）、津堅島キガ浜貝塚（註16）、座間味島古座間味貝塚（註19）、渡名喜島東貝塚（註20）などの土器がある。

ⅱ）第2種〔第10図8・10、第11図4・5（第Ⅸ図版A・B－8・10、第X図版A・B－4・5）〕

第2種は口頸部に擬凸帯を形成するもので、

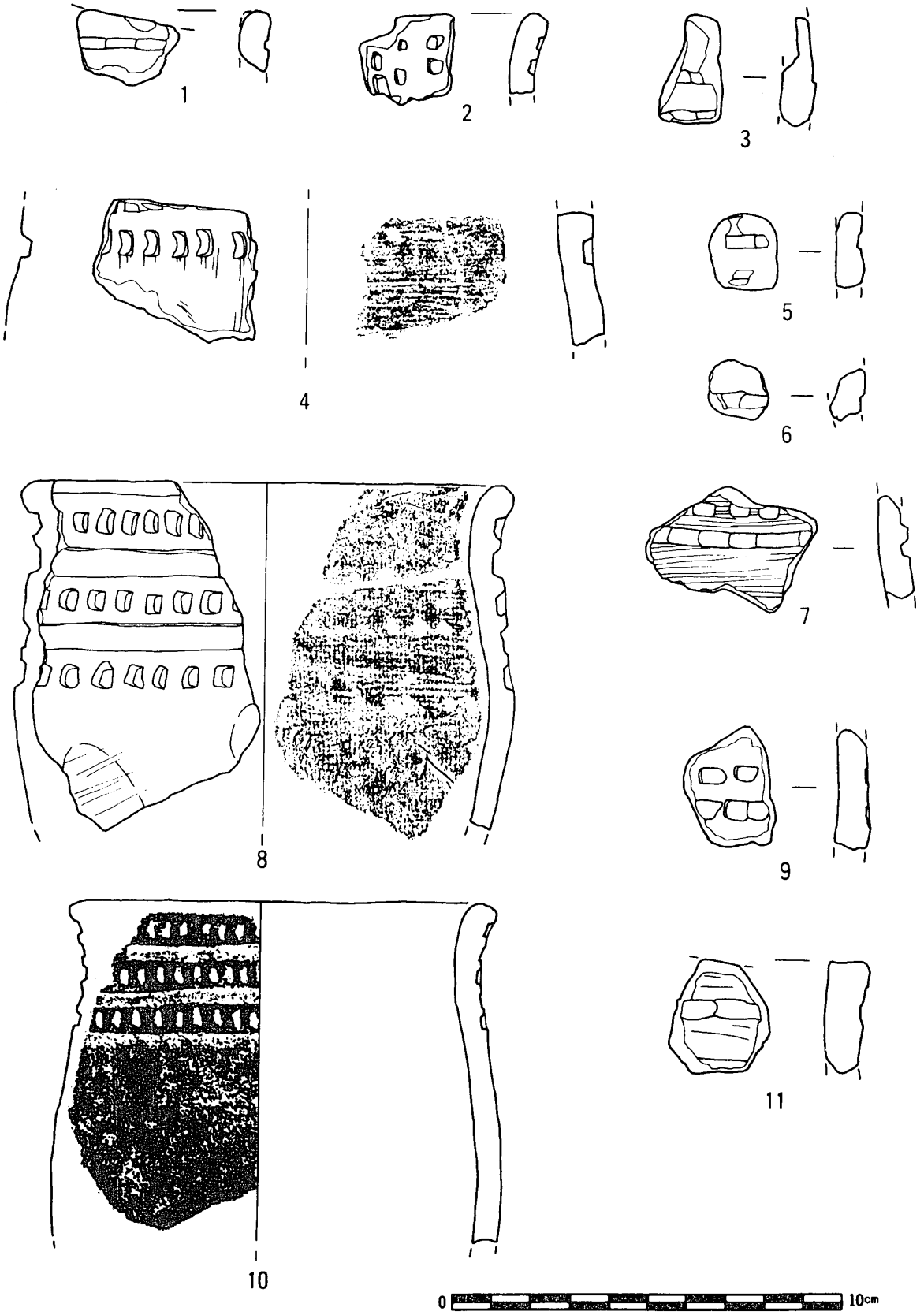
4点出土している。

第10図8（第Ⅸ図版A・B－8）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁破片で、口径は約12cmである。口縁は外反し、口唇部はやや平坦に整形され、若干外傾する。胴の最大径は頸胴部の境目に位置する。この土器の施文上の大きな特徴は篦によって深めの凹線を横走させることにより、上下の部分が浮いて凸帯状に見えることである。以下、この種の技法によるものを擬凸帯と呼ぶことにする。本標品は擬凸帯の典型例で、2条の凹線によって擬凸帯を作り出す。凹線は深めである。凸帯上には単篦工具によって、幅約6mmの押捺刻文を描く。凹線部には押し引き文は認められない。本資料の施文は他と異なり、工具を右斜めから刺突し、その後工具を若干右に倒してから引き抜くため、刻文の左右の幅は5mm前後の刻文となり、他の擬凸帯に施される爪形様文とは異なった形状となる。施文方向は左から右である。両面ともにナデ調整されるが、表面には斜位、裏面には横位の擦痕が残る。裏面では指頭整形による浅い凹凸も見受けられる。焼成はやや良好で橙褐色を呈する。テンパーとして石英、チャートが混入される。部分的に石灰分が付着する。

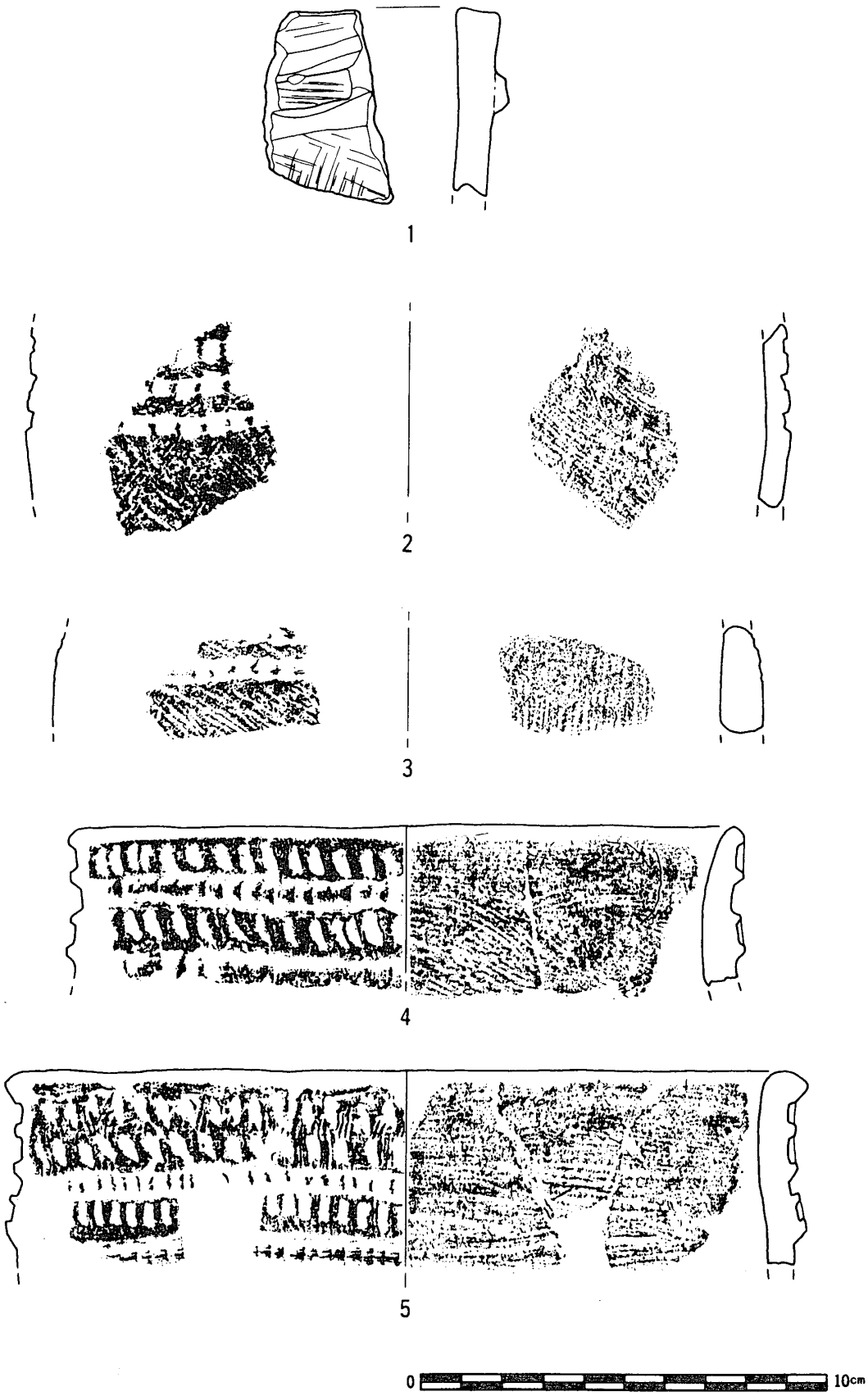
第10図10（第Ⅸ図版A・B－10）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部の破片で、口径約10cmを計る。口縁部は外反し、胴の最大径はやや下部に位置する。口唇部を押さえるため、断面は方形に近い形状を呈す。擬凸帯上には幅4mm前後の押捺刻文を刺突しながら配する。施文は左から右方向である。単篦工具による施文である。凹線部が深さ1mm程度と浅いため、擬凸帯の厚さは微弱である。器表が全体的に石灰分で薄く覆われるため調整は確認できない。器色は不明。テンパーとして石英粒、チャート粒が混入される。焼成良好。

第11図4（第X図版A・B－4）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁破片で、口径約16.2cm。口縁部は弱く外反し、口唇部上面は平坦に成形され、若干外傾する。擬凸帯上には幅約8mmの2列の押捺刻文を施し、凹線部にも同種工具によって押し引き文を施す。擬凸帯上の押捺刻文は深く刻まれ、凹線内は浅く押し引きされている。凹線は深めである。文様帯の器面はナデられているが、裏面には擦痕が円弧状に施されている。施文は左から右方向である。色調は明褐色で、部分的に石灰分が付着する。焼成は良好。胎土に石英、チャートを混入する。

第11図5（第X図版A・B－5）はW－1グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の口縁破片で、口径約18.6cm。口縁部はわずかに外反し、文様帯下端部で欠損する。口唇部を押さえて整形したため、外縁部がわずかにはみ出す。本標品も擬凸帯の典型例で、上部は巾広の凸帯に属し、いわゆるカヤウチバンタ式の断面形態をとる。下段の擬凸帯は前項と同型である。擬凸帯上には押捺刻文を配し、上部は2列で、下段は1列である。擬凸帯間の凹線部には同種工具による押し引き文が連続して浅く施されている。凹線自体は深めである。文様は全て幅7mm前後となり、単篦工具による施文である。施文方向は左から右である。表面はナデ調整を行っているが、縦位の擦痕がわずかに残り、裏面もナデられているが横位の擦痕が明瞭に残る。石英粗粒の他、



第10図　大山式土器　1(表採)，2･3(第II層)，4～7(第III層レベル0-10)，8～11(IIIの10-20)



第11図　大山式土器　1～3(第Ⅲ層レベル20-30)，4・5(Ⅲの30-40)

チャート粒の混入が認められる。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

3、不明品

文様の形態から大山式とみられるが、小破片のため分類不能のものが1点ある。

第10図6（第Ⅸ図版A・B－6）はW－3グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部の小破片で、厚手の土器である。単篦工具による押し引き文が1条認められる。文様幅は同部欠失のため不明である。施文方向は左から右である。両面ともに擦痕をなで消す。テンパーに石英粒及びチャート粒、小粘土塊が認められる。焼成は良好。赤褐色を呈する。

4、まとめ

表14によると第Ⅱ類は第Ⅲ層のレベル10～40cmで出土し、第Ⅱ類の2種ともにさほど層位的に差は見受けられない。第Ⅰ類の第1種は第Ⅲ層のレベル0～30cmの間に出土し、同第2種は第Ⅱ層の0cm～第Ⅲ層の130cm間で出土した（表14）。つまり、本貝塚では下層から上層へ第Ⅱ類→第Ⅰ類1種→第Ⅰ類2種の順に出土しているが、従来の層位的及び型式学的観点から考えると、第Ⅰ類→第Ⅱ類の方向である。また、層位資料を提供した大山貝塚（註21）でも、押捺刻文のみを施文する資料は凸帯文及び擬凸帯のグループに先行している。以上からすると本貝塚の資料は層位的に混乱していることになる。テンパーはA類のみの出土である。

表14　大山式土器の形態別出土状況

層位＼形態		部位	第Ⅰ類 第1種	第Ⅰ類 第2種	第Ⅱ類 第1種	第Ⅱ類 第2種	不明品	計
表採		口		1				1
		胴						
第Ⅱ層		口		1				2
		胴		1				
第Ⅲ層	(0-10)	口						4
		胴	1	2			1	
	(10-20)	口		1		2		4
		胴		1				
	(20-30)	口			1			3
		胴	1	1				
	(30-40)	口				2		2
		胴						
計			2	8	1	4	1	16

二、《室川式土器》

出土資料のうち室川式と同定された土器は計11点（0.9%）で、その内訳は表採2点、第Ⅱ層3点、第Ⅲ層6点である（表4）。全て深鉢形に属し、口縁部のみの資料である。口縁部の断面形状は4種ある。すなわち方形状の肥厚形態をとるもの（第Ⅰ類＝3点）、逆L字状の形態をとるもの（第Ⅱ類＝4点）、肥厚がルーズなもの（第Ⅲ類＝3点）及び無肥厚（第Ⅳ類＝1点）の4種である。テンパーはA・B・C類の3類が認められるが、A類が主体である。

以下、各グループごとに記述する。

1、第Ⅰ類〔第12図1・8・11（第XI図版A・B－1・8・11）〕

第Ⅰ類は計3点の出土で、方形状の肥厚形態を呈するものである。

第12図1（第XI図版A・B－1）は表採の口縁破片で、口径約9.6cmを計る。現存部は

直口状を呈し、断面は方形の肥厚帯を造形し、肥厚帯の幅約1.5㎝、厚さは約1.1㎝である。チャート粒及び石英粒をテンパーに使用する（A類）。表裏面ともに丁寧な横位のナデ調整を行う。黄褐色を呈し、焼成は良好である。

第12図８（第XI図版A・B－８）はW－１グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部で、軽く外反する。口縁の断面形態をみると方形状に肥厚させる資料である。肥厚帯の幅は約1.2㎝、厚さも約1.2㎝である。表裏面ともに擦痕を横位になで消しており、肥厚帯下端に１条のテンパーの引きずり痕が認められる。また擦痕も見受けられる。テンパーとして石英及びチャートを混入する（A類）。色調は褐色で、焼成は良好である。

第12図11（第XI図版A・B－11）はW－２グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の口縁部で、口縁上端に幅1.4㎝の凸帯を貼付し、口縁を方形状に肥厚させる。肥厚部外面に幅約４㎜の単篦工具によって１条の押捺手法による刻文、同直下に幅約６㎜の単篦工具によって同種文様を２条施す。施文の方向は左から右である。文様帯以下は欠損。口縁部はわずかに外反する。色調は茶褐色で、焼成は良好。器面は横位のナデ調整による。テンパーとして石英細粒、チャート粒を混入する（A類）。類例として那覇市壺川貝塚（註22）が挙げられる。

２、第Ⅱ類〔第12図２・３・５・７（第XI図版A・B－２・３・６・７）〕

第Ⅱ類は計４点の出土で、逆L字状の肥厚形態をとる。

第12図２（第XI図版A・B－２）は表採の口縁破片で、口唇部が破損している。口縁は外反し、逆L字状の肥厚帯をつくり、肥厚帯の幅は約2.1㎝である。器面は両面ともに丁寧にナデ調整される。テンパーとして多量のチャートと若干の石英及び黒雲母が認められる（C類）。色調は茶褐色、焼成は良好である。

第12図３（第XI図版A・B－３）はW－２グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁部の破片で摩耗、破損が著しい。逆L字状の肥厚帯を造形し、肥厚帯の幅約８㎜、器厚は約1.6㎝である。胎土に多量の石英粒、チャート粒を混入する（A類）。器面はナデ調整を行ったと思われるが器面摩耗のため把握できない。色調は橙褐色、焼成は普通である。

第12図５（第XI図版A・B－６）はW－２グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁部片で、口唇部は広く、内面へも若干突出し、断面は三角形に近い形状となる。肥厚帯の幅は約1.7㎝、厚さは約1.6㎝。両面ともに丁寧にナデ調整を行っている。多量のチャート、石英を混入する（A類）。黄褐色を呈し、焼成は良好である。

第12図７（第XI図版A・B－７）はW－３グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の口縁部の破片で、大きく外反するタイプである。口縁上端は逆L字状を呈し、幅約1.4㎝、厚さは約1.7㎝を計る。表裏面ともに丁寧なナデ調整が施される。テンパーとして多量の細かい黒雲母及びチャート、石英が混入される（C類）。色調は茶褐色で、焼成は良好である。

３、第Ⅲ類〔第12図４・６・９（第XI図版A・B－４・５・９）〕

第Ⅲ類は計３点の出土。肥厚部の形成が

ルーズで前述の第Ⅰ類と第Ⅱ類の中間的形状を示すものである。

第12図4（第XI図版A・B－4）はW－1グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の口縁破片で、口唇部は丸みを帯び、ルーズな肥厚帯をつくる。肥厚帯の幅約8㎜、厚さは約1.2㎝を計る。表裏面ともにナデ調整される。肥厚部直下に2条の文様状の溝が見受けられるが、器面調整の際の調整痕であろう。胎土に多量の石英粗粒を混入し、若干のチャートが見受けられる（A類）。色調は茶褐色、焼成は普通である。

第12図6（第XI図版A・B－5）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の口縁部で、上部を若干肥厚させ、かつ屈曲させる。肥厚部の厚さは約1㎝。口縁下約1.7㎝の箇所に幅約5.5㎜の単篦工具による、左から右方向の押し引き文が1条認められる。同文様は口縁部の空白部分の大きさから類推すると、1条の施文で終始する可能性がある。胎土に石英粒、チャート粒を多量に混入し、石灰質粒子（貝片）も認められる（B類）。調整は表裏面ともに横位の擦痕をなで消すが、消え切らない。特に裏面は明瞭に残る。色調は赤褐色、焼成は極めて良好である。本資料はその施文特徴から大山期に近いものであろう。

第12図9（第XI図版A・B－9）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁部で、外反する。口縁部を方形状に整形するが、ルーズな造形となり、肥厚もしない。器面の擦痕は丁寧になで消されている。表面には指頭痕が残る。テンパーとしてチャート及び石英の混入が認められる（A類）。色調は赤褐色で、焼成は良好である。

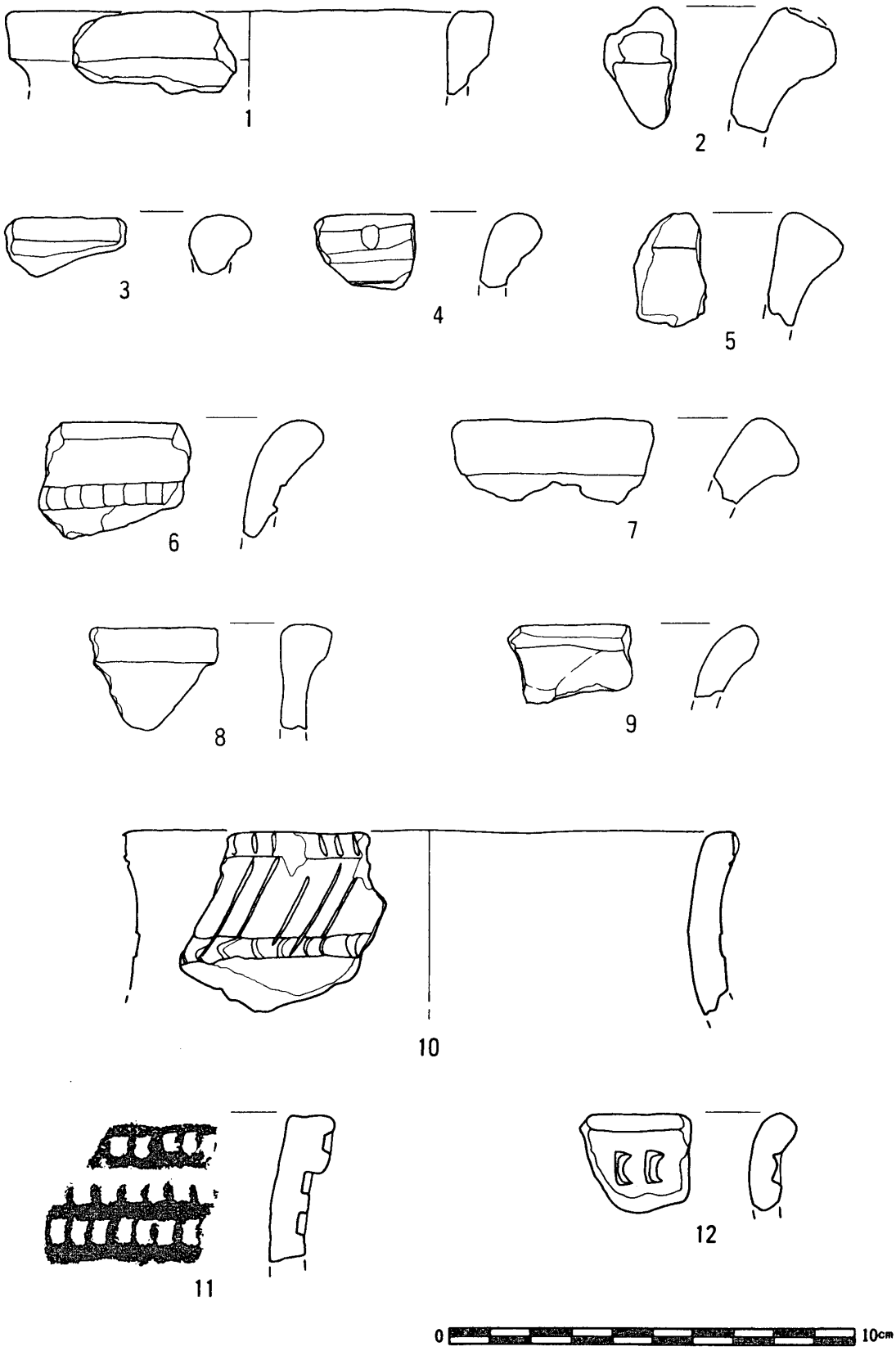
4、第Ⅳ類（1点）

第Ⅳ類は1点のみの出土で、口縁部の肥厚が認められないものである。

第12図10（第XI図版A・B－10）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル10-20）出土の口縁破片で、外反し、肥厚帯を造形しない資料である。口径約15㎝の有文資料で、文様は3段からなり、上段には口縁に沿って刻目文を施し、中段の頸部には間隔の不規則な左下がりの斜行文、下段には押し引き文を1条横走させる。施文は単一工具によるが、下段の文様からすると幅約5㎜の単篦工具が使用されており、中段を除く上下段は左から右方向に施文される。中段は右上から左下方向である。表裏面ともナデ調整される。胎土に石英粒及びチャート粒が混入される（A類）。表面は黄橙色と赤褐色のまだらで、裏面は赤褐色を呈する。焼成は良好である。本資料の類例は沖縄市室川貝塚（註23）にみられる。室川式の末期に位置づけられるものと思われる。

5、まとめ

口縁部の形態別出土状況を見ると、第Ⅰ類は第Ⅲ層のレベル10～30㎝間より出土し、第Ⅱ・Ⅲ類が第Ⅱ及び第Ⅲ層上部、第Ⅳ類は第Ⅲ層の10～20㎝間である。したがって層位的には混在し、4類間の先後関係は見出し得なかった。しかし、参考までに記すとレベル的には第Ⅰ類→第Ⅳ類？→第Ⅱ・Ⅲ類の序列となる（表15）。本型式の有文資料は3点出土しており、①押捺刻文を3条配するもの〔口縁形状分類の第Ⅰ類、第12図11（第XI図版A・B－11）〕、②押し引き文が1条認められるもの〔口縁形状分類の第Ⅲ類、第12図6（第XI



第12図　室川式土器　1・2(表採)，3～5(第II層)，6・7(第III層レベル0-10)，
8～10(IIIの10-20)，11(IIIの20-30)，
室川上層期の土器　12(第III層レベル0-10)

図版A・B－5)〕、③3段文様を構成するもの〔第Ⅳ類、第12図10(第Ⅺ図版A・B－10)〕などである。押捺刻文は3条施文する古いタイプから時間の経過とともに2条→1条と簡略化が進むものと考えられる。また、斜行文は大山式期の後半に登場し、後続の室川式にも見受けられる。以上のことから①が3例のなかで最も古く、②・③はそれに近い時期のものと推定される。ただし、肥厚形態を考慮にいれると②が③に若干先行するものと思われる。

表15　室川式口縁部の形態別出土状況

層位＼形態		第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類	第Ⅳ類	計
表採		1	1			2
第Ⅱ層			2	1		3
第Ⅲ層	(0-10)		1	1		2
	(10-20)	1		1	1	3
	(20-30)	1				1
計		3	4	3	1	11

テンパーはA類、B類、C類の3種が認められ、それぞれ8点、1点、2点となり、A類が優位にあった。しかし、これらの層位的な差異は認められなかった(表16)。

表16　混入物の層位別出土状況

層位＼テンパー	A類	B類	C類	計
表採	1		1	2
第Ⅱ層	3			3
第Ⅲ層	4	1	1	6
計	8	1	2	11

ホ、《カヤウチバンタ式土器》

カヤウチバンタ式土器は1点のみで、深鉢形を呈する口縁部である。

第13図7(第Ⅻ図版A・B－7)はW－1グリット第Ⅲ層(レベル0-10)出土の口縁破片で、若干胴上部の張る器形が想定される。口縁部に幅約2.3cmの肥厚帯を造形し、同部の断面は舌状を呈する。肥厚部外面は凹面を形成しない。すなわち典型的なカヤウチバンタのタイプからは外れる。表裏面ともに横位のナデ調整が丁寧に施される。胎土に石英粒、チャート粒及び黒雲母(C類)が混入される。色調は橙褐色、焼成は良好である。

へ、《嘉徳式系土器》

ここに分類される資料は文様の特徴から、嘉徳系と目されるものである。計6点(0.5%)の出土で、表採2点、第Ⅱ層3点、第Ⅲ層上部(レベル0-10)出土が1点で、Ⅲ層の深部には及んでいない(表4、17)。したがって、

表17　嘉徳式系土器の出土状況

層位＼型式	嘉徳系	嘉徳Ⅱ式	嘉徳Ⅰ式A変形タイプ	計
表採	2			2
第Ⅱ層		2	1	3
第Ⅲ層(0-10)		1		1
計	2	3	1	6

層位的には新しい時期の資料とみられる。すべて有文胴部の資料である。テンパーはA類が1点、C類が5点である。

以下、概要を記す。

a)嘉徳系土器〔第13図1・2(第Ⅻ図版A・B－1・2)〕

ここにまとめた2点は嘉徳式土器の文様及び器質の特徴を有するが、小破片のため全体的な形態は不明である。

第13図１（第XII図版Ａ・Ｂ－１）は表採の頸胴部で、壺形を呈すると思われる。横位の沈線文が２条認められる。この２条の文様と直交する形で縦位の擦痕様の掻痕も見受けられる。巨視的にみて嘉徳式のグループに属する資料である。表裏面ともに丹念にナデ調整され光沢が認められる。テンパーに石英、少量のチャート及び黒雲母、不明鉱物（異質岩片）をごく少量混入し（Ｃ類）、焼成はかなり良好で、堅緻である。茶褐色を呈する。

第13図２（第XII図版Ａ・Ｂ－２）も表採の胴部片で、小破片であるが、文様、焼成、その他の特徴から第13図１と同一個体と目されるが、接合はできない。１条の横位沈線文が認められる。第13図１に見られた擦痕様の掻傷は認められないが、その他の特徴は同標品と一致する。テンパーはＣ類。

ｂ）嘉徳Ⅱ式土器〔第13図３～５（第XII図版Ａ・Ｂ－３～５）〕

嘉徳Ⅱ式土器とした資料は３点出土している。

第13図３（第XII図版Ａ・Ｂ－３）はＷ－２グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の胴部の破片で、嘉徳Ⅱ式土器の文様特徴を有する資料である。沈線文を横走させ、それに接して上部に斜行文が施される。両面ともにナデ調整され、テンパーには多量の黒雲母の他石英粒及びチャート粒が使用される（Ｃ類）。色調は褐色、焼成はかなり良好である。

第13図４（第XII図版Ａ・Ｂ－４）はＷ－１グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部片で、２条の横位沈線文の間に斜行文を施す特徴から嘉徳系と考えられる。表裏面ともにナデ調整され、胎土混入物としてチャート粒及び石英粒、細かい黒雲母、小粘土塊が認められる（Ｃ類）。色調は茶褐色、焼成は良好である。器厚約６㎜の薄手である。

第13図５（第XII図版Ａ・Ｂ－５）はＷ－３グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の胴部で、綾杉文を施すが、先端の尖る工具を使用している。沈線文の幅は極めて細い。施文特徴から嘉徳Ⅱ式の範疇と考えられる。テンパーとして多量の黒雲母の他石英及びチャートの混入も認められる（Ｃ類）。色調は淡橙色、焼成は良好である。

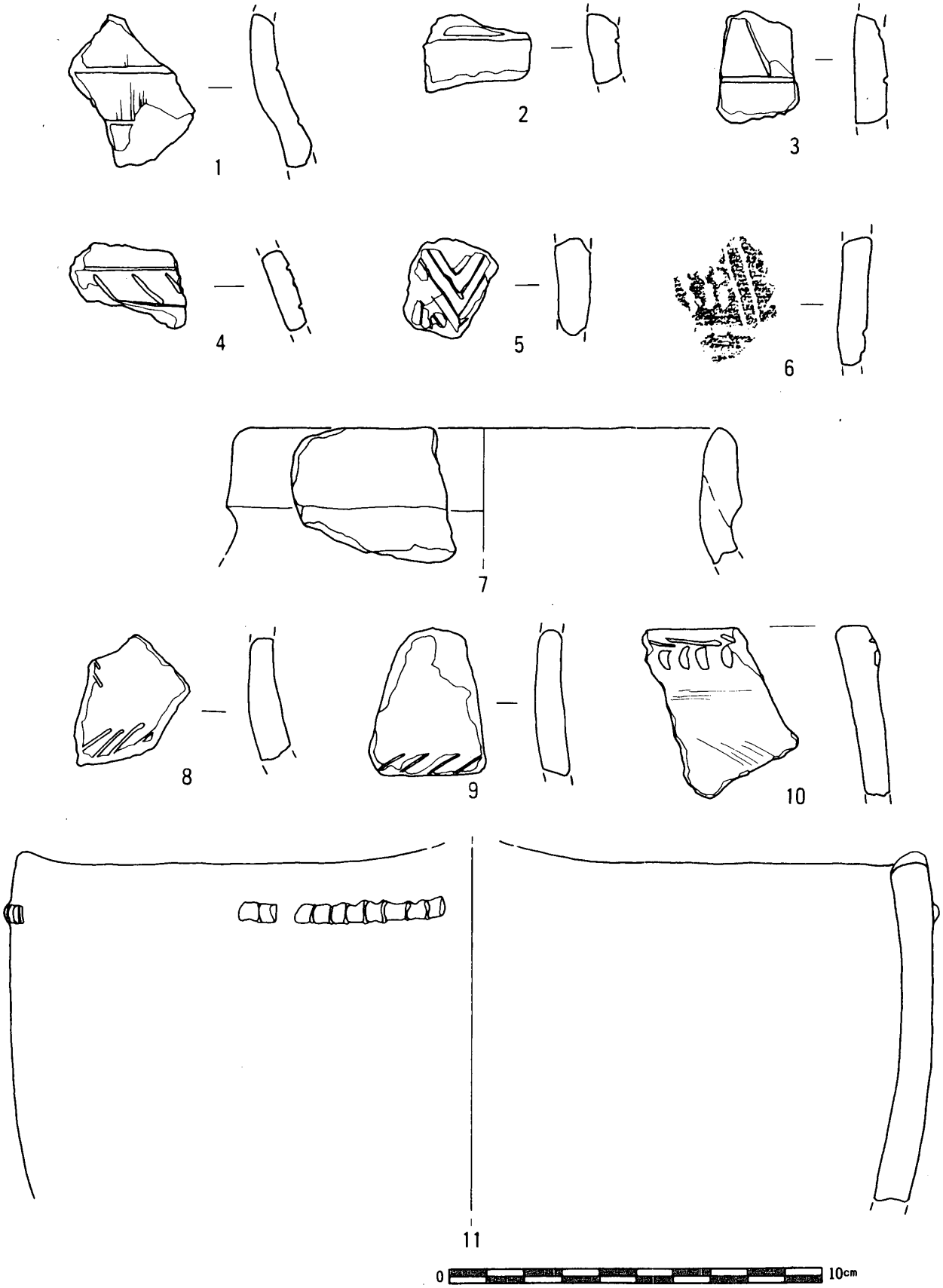
ｃ）嘉徳Ⅰ式Ａ土器の変形タイプ

本標品は斜沈線と刺突文を組み合わせる点で嘉徳Ⅰ式Ａ土器の範疇に入るが、文様の構成は従来の施文例になく、同型式の変形タイプとして分類した。

第13図６（第XII図版Ａ・Ｂ－６）はＷ－２グリット第Ⅱ層（レベル0-10）出土の胴部片で、２段の文様が認められる。上段には斜行の沈線文と連続刺突文を交互に配し、下段には連続刺突文を横走させる。後者は左から右方向に描かれ、本票品では１条のみ認められる。刺突文に使用される工具は先端が尖っており、文様の断面がＶ字状を呈する。両面ともに横位の擦痕をなで消している。胎土混入物としてチャート及び石英が使用される（Ａ類）。色調は赤褐色、焼成は良好である。

ト、《宇佐浜式土器》

宇佐浜式土器は計５点（0.4％）の出土で、その内訳は表採４点、第Ⅰ層１点である（表４）。層位的に新しい時期の土器である。こ



第13図　嘉徳系　1･2(表採)
嘉徳II式土器　3･5(第II層)，4(第III層レベル0-10)
嘉徳I式A土器の変形タイプ　6(第II層)
カヤウチバンタ式土器　7(第III層レベル0-10)
その他の有文土器　8(第II層)，9(第III層レベル0-10)，10(IIIの20-30)，11(IIIの50-60)

れらは全て口縁破片で、器種の明確に判明するものは少ないが、口縁の傾きから壺形に属するものがある。口縁は宇佐浜式土器の特徴である三角の肥厚形態をとるが、肥厚帯のルーズなものや欠損する資料もある。テンパーはA類、B類が認められ、各々3点、2点の出土である。

以下、その概要を記す。

第14図10（第XIII図版A・B－10）は表採の口縁破片で、断面にみる肥厚帯の形状はルーズで三角形になりきらず、典型的なものから外れるが、頸部のカーブは宇佐浜的である。肥厚帯の幅約1.8cm、厚さ約1.1cmの台形状の肥厚帯を形成する。表裏面ともに丁寧なナデ調整を行う。裏面は鈍い光沢が認められる。テンパーに石英及びチャートが使用される（A類）。表面は赤褐色、裏面はくすんだ黄橙色を呈し、焼成はかなり良好である。

第14図11（第XIII図版A・B－11）も表採の口縁部片で、断面が丸みを帯びた幅約1.1cmの肥厚帯を形成し、厚さは約1.4cmである。器面は丁寧なナデ調整によるもので、表面には鈍い光沢が認められ、内面にも及ぶが、それ以下は大部分が剝落し様子が分からない。テンパーに石英及びチャートが使用される（A類）。茶褐色を呈し、焼成はかなり良い。

第14図12（第XIII図版A・B－13）も表採の口縁部片で、肥厚帯の断面はルーズな三角形を呈し、肥厚帯の幅約1.1cm、厚さは約1.2cmを計る。器面は摩耗のため不明瞭だが、ナデ調整の痕跡を認めることができる。テンパーは石英及びチャートが使用されている（A類）。色調は褐色、焼成は良好である。

第14図13（第XIII図版A・B－12）も表採の口縁部片で、肥厚帯が破損しているため原形は窺えないが、残存部から断面三角形の肥厚形態が推定される。幅は推算1.6cm。調整は表裏面ともに光沢の出るまでナデられる。裏面には部分的に横位の掻傷が認められる。テンパーに石英粒及びチャート粒、不明鉱物（異質岩片）、小粘土塊が使用される（B類）。色調は赤褐色、焼成は良好である。

第14図14（第XIII図版A・B－14）はW－1グリット第I層（レベル0-10）出土の口縁部片で、肥厚帯の断面は三角形を呈する。幅約1.5cm、厚さは1.3cmを計る。胎土混入物は他と異なり、細礫（グラニュール）として混入されている。粘板岩の小礫を主体に、石英粒、チャート粒などが認められる（B類）。色調は橙褐色、焼成は良好である。本票品は宇佐浜式の中で唯一の発掘資料である。

チ、《室川上層期の土器》

室川上層期の土器は第12図12（第XI図版A・B－12）に示した1点の有文口縁部のみで、W－1グリット第III層（レベル0-10）の出土である。深鉢形を呈し、口縁部は外反する。口径は不明。口縁直下に押捺刻文が見受けられる。幅約6mmの半截竹管状工具によって左から右方向へ施文される。この種の文様が何段か施されていたとみえ、下方の破損部にも文様上端の一部が残っている。テンパーとして石英粒、チャート粒が使用される（A類）。焼成は悪く脆弱。器面は摩耗によって部分的に剝落し、また、石灰分の付着も見られる。表面にはナデ調整痕が認められるが、裏面は完全に剝落し不明。色調は黄橙色を呈する。

リ、《その他の有文土器》

この項にまとめた4点は土器の器質、文様等の特徴から縄文後・晩期のものであるが、前述の諸型式から外れるものである。出土状況は表4の通りである。

以下、その概要を記す。

第13図8（第XII図版A・B－8）はW－1グリット第II層（レベル0-10）出土で、壺形の頸胴部である。器面の下端には斜行文が深く刻まれている。クマヤー洞穴遺跡（註24）、上城遺跡（註25）の壺形土器に類するものであろう。器面は丁寧にナデ調整され、テンパーは黒雲母を主体にチャート粒や石英粒も見受けられる（C類）。焼成はかなり良好。赤褐色を呈する。

第13図9（第XII図版A・B－9）はW－3グリット第III層（レベル0-10）出土の頸胴部の破片で、前項同様、頸部下端に斜行文が施されている。器種は不明。器面はなでられているが、幾分ザラつく。胎土混入物として石英粒、チャート粒、黒雲母が使用され（C類）ており、器面への露出が著しい。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

第13図10（第XII図版A・B－10）はW－1グリット第III層（レベル20-30）出土の口縁部で、器形はわずかに内弯する深鉢形と思われる。口唇はやや幅広で、平坦に仕上げられている。口縁部直下に右下りの斜行文が施され、施文方向は左から右である。この斜行文の直下に幅約9㎜の凸帯を横走させ、同凸帯上に半截竹管状工具による刻目文を施す。器面は横位、斜位の擦痕を施した後、なで消しているが特に裏面は丁寧である。テンパーにチャート粒及び石英粒が使用され（A類）、焼成は良く堅緻。橙褐色を呈する。

第13図11（第XII図版A・B－11）はW－1グリット第III層（レベル50-60）出土の口縁部片である。器種はやや内傾する深鉢形で、この種の器形は珍しく、口縁は山形を呈していたと思われる。口縁下約1.4㎝の箇所に1条の凸帯文を横走させ、篦状工具による刻目文が約4㎜間隔で施されている。器面は両面ともにナデ調整を行っている。焼成良好で、黄橙色を呈する。胎土の肌理が細かい。縄文晩期に属する器質のようである。胎土は他の資料と異なり非常に細かく、石英粒及びチャート粒、黒雲母が混入される（C類）。

ヌ、《喜念I式系土器》

喜念I式土器及び喜念I式類似の土器は計9点（0.7%）の出土である。その内訳は表採2点、第I層1点、第III層（レベル0-10）5点、層序不明1点である（表4、18）。9点中5点が第III層上部より出土し、層位的には新しい土器として捉えられる。口縁部6点、胴部3点の出土である。口縁部の断面形状は三角形を呈し、凸帯文の両サイドに対の刺突文を施すのが基本である。ただし、対になる刺突文は叉状工具によるものではない。胴部資料のなかには曲線文の片側にのみ刺突文を施す例も1点ある〔第14図9（第XIII図版A・B－9）〕。喜念I式のテンパーはC類が2点、D類が4点、喜念I式類似はA類が1点、B類も1点、C類もまた1点となっている（表19）。

表18　喜念Ⅰ式系土器の出土状況

型式 / 層位	部位	喜念Ⅰ式	喜念Ⅰ式系	計
表　採	口	1	1	2
	胴			
第Ⅰ層(0-10)	口		1	1
	胴			
第Ⅲ層(0-10)	口	3		5
	胴	2		
層序不明	口			1
	胴		1	
計		6	3	9

表19　喜念Ⅰ式系のテンパー別出土状況

型式	喜念Ⅰ式		喜念Ⅰ式系			計
テンパー / 層位	C	D	A	B	C	
表　採		1	1			2
第Ⅰ層(0-10)				1		1
第Ⅲ層(0-10)	2	3				5
層序不明					1	1
計	2	4	1	1	1	9

a）喜念Ⅰ式土器〔第14図1・4～8（第XIII図版A・B－1・4～8）〕

第14図1（第XIII図版A・B－1）は表採の口縁部で、口縁部の断面は三角形を呈する。口唇部の一部にマウンド状の瘤が貼付され、山形口縁となる。頸部には縦位のミミズ腫れ状の凸帯文を貼付し、その両サイドに対の刺突文を施す。破損部右下端に縦位凸帯文と直交して横位の凸帯文（刺突もある）の一部も確認できるが破損が著しい。器面は丁寧にナデ調整され、胎土に石英、黒雲母を主体に、炭化物の混入も見受けられる（D類）。焼成良好、橙褐色を呈する。

第14図4（第XIII図版A・B－4）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の口縁部の破片で、口縁部断面が三角形の肥厚を呈する大型の壺形土器である。口縁下約4.5cmを空白にし、その下に横位の凸帯を貼付し、凸帯上に刺突を加えるが破損が著しく文様の全景を窺うことができない。器面は篦調整を行った後、ナデ調整を加える。テンパーは石英、黒雲母などである（D類）。焼成はかなり良好。茶褐色を呈する。

第14図5（第XIII図版A・B－5）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の胴部片で、断面三角形の横位凸帯（幅約8mm）の両サイドに刺突文が施される。また、上端の破損部には沈線文が施されていたが、同部から欠損しているため、全景は不明。器面は丁寧にナデ調整されている。テンパーとして黒雲母及び石英粒、石灰質粒子（サンゴ）が使用される（D類）。焼成はかなり良好。表面は褐色、裏面茶褐色を呈する。

第14図6（第XIII図版A・B－6）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の頸胴部で、幅約3mmの横位凸帯の上下に連続した刺突文を施す。器面は丁寧にナデ調整され、テンパーに石英粒及び黒雲母、石灰質粒子（サンゴ）が使用される（D類）。焼成は良好。茶褐色を呈する。

第14図7（第XIII図版A・B－7）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の口縁部破片で、三角形の肥厚口縁である。肥厚部直下に先端の尖った工具により2条の沈線が描かれているが、その展開は不明。同図8に類する資料である。器面はナデ調整される。テンパーにチャート及び石英、黒雲母が使用される（C類）。色調は淡褐色、焼成は良好である。

第14図８（第XIII図版Ａ・Ｂ－８）はＷ－２グリット第Ⅲ層（レベル0-10）出土の口縁部片で、器形は壺形である。口縁部を三角形に肥厚させ、肥厚部直下に綾杉文を施す。小破片のため凸帯や刺突文は認められないが、この種の良好な資料が伊平屋島久里原貝塚で出土しており（註10）、喜念Ⅰ式土器に含めてよい資料と考えられる。器面は両面とも丁寧にナデ調整される。胎土に石英粒、チャート粒及び黒雲母を混入し（Ｃ類）、焼成はかなり良好。茶褐色を呈する。

ｂ）喜念Ⅰ式類似の土器〔第14図２・３・９（第XIII図版Ａ・Ｂ－２・３・９）〕

ここには喜念Ⅰ式類似の資料（２点）と、喜念Ⅰ式の変形タイプとみられるもの（１点）を挙げた。

第14図２（第XIII図版Ａ・Ｂ－２）は破損及び摩耗が著しい口縁部で、表採品である。凸帯文の上部に幅約２㎜の篦状工具による刺突文が１点見受けられる。また口唇部外面にも刻みが施されるが施文が浅く不明瞭である。凸帯は他の喜念Ⅰ式に比して太く、刺突文も雑で、喜念Ⅰ式から外れる可能性もある。器面はナデ調整され、テンパーにチャート粒及び石英粒が混入される（Ａ類）。焼成は良好、色調は明褐色である。

第14図３（第XIII図版Ａ・Ｂ－３）はＷ－２グリット第Ⅰ層（レベル0-10）出土の口縁部の小破片で、特徴がはっきりしないが、口縁上端が丸く肥厚し、肥厚部下端に列点文が認められることから本項に含めた。胎土にチャート粒及び石英粒、石灰質粒子（サンゴ）が混入される（Ｂ類）。摩耗のため器面の残りは悪いが、一部にナデ調整が認められる。焼成は良好。褐色を呈する。

第14図９（第XIII図版Ａ・Ｂ－９）は出土地点・層序不明の胴部片で、曲線文の下部にのみ約４㎜間隔で刻目文を施す。構図は典型例と異なるが、喜念Ⅰ式土器の変形とも考えられる。器面は丁寧にナデ調整され、胎土に黒雲母及び石英、チャートが混入される（Ｃ類）。焼成はかなり良好。茶褐色を基調に部分的に黒色を呈する箇所もある。

ル、《無文口縁土器》

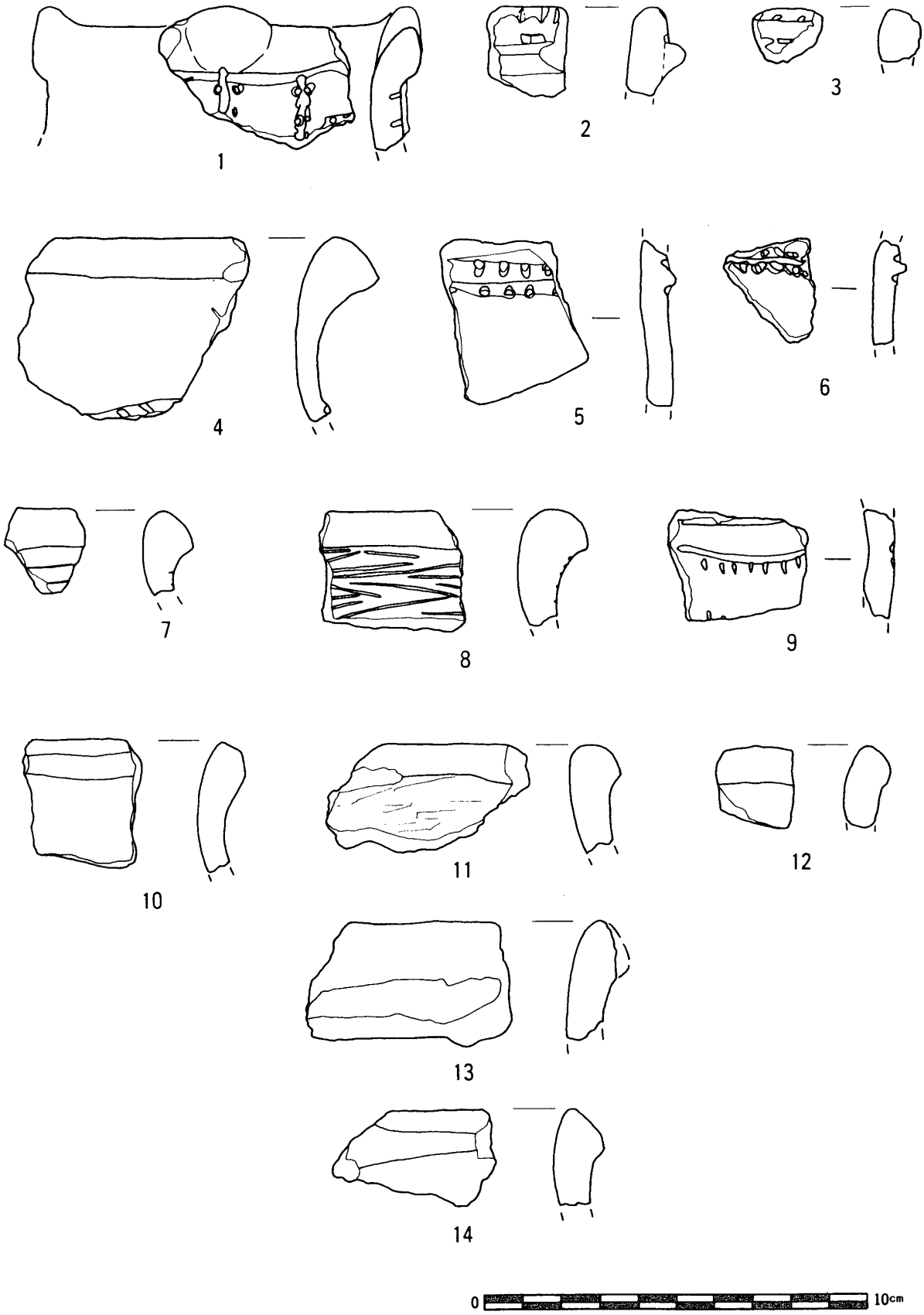
本貝塚出土の無文口縁の資料は表採３点（8.8％）、第Ⅰ層出土２点（5.9％）、第Ⅱ層７点（20.6％）、第Ⅲ層17点（50.0％）、層序不明５点（14.7％）の計34点（100％）である（表４）。

無文土器は１点の壺形の可能性のある資料〔第16図13（第XV図版Ａ・Ｂ－13）〕を除いて、全て深鉢形に属する。以下、壺形土器より記述する。

１、壺形土器（１点）

壺形土器は１点のみ認められた。

第16図13（第XV図版Ａ・Ｂ－13）は層序不明の口縁部で、小破片だが口縁部の形状から壺形に分類した。口径不明。口唇部はやや平坦に整形されており、残存部の器面に文様は認められない。器面は両面ともナデ調整され、胎土にチャート粒及び石英粒を混入する（Ａ類）。器色は赤褐色で、焼成は良好である。これらの諸特徴から荻堂期の壺形土器の可能性が考えられる。



第14図　喜念Ⅰ式土器　1(表採)，4～8(第Ⅲ層レベル0-10)
喜念Ⅰ式類似土器　2(表採)，3(第Ⅰ層レベル0-10)，9(層序不明)
宇佐浜式土器　10～13(表採)，14(第Ⅰ層レベル0-10)

2、深鉢形土器（33点）

深鉢形は口縁形態により4種にグルーピングすることが可能である。すなわち第Ⅰ類は器形が口縁にむかって開くタイプで、口縁部上端を外側に軽く折り曲げるのを基調とする。口唇部はやや丸みをもつ舌状と平坦なものとがある。第Ⅱ類もまた器形は開くタイプであるが、頸部からやや直口気味に立ち上がる。口唇部は平坦に整形される。第Ⅲ類の器形は全体がやや直立気味に立つタイプで、口唇両縁が若干丸みをもつものである。第Ⅳ類は小破片のため形状把握のできない一群で、口唇部の断面形状から4種に細分が可能である。

以下、その概要を述べる。

ⅰ）第Ⅰ類〔第17図1～7（第XVI図版A・B－1～7）〕

第Ⅰ類土器は第17図1～7（第XVI図版A・B－1～7）の計7点である。第Ⅰ類は前述のように口縁部に向かって開く器形で、開きの大きいもの〔第17図4（第XVI図版A・B－4）〕と開きの弱いもの〔同図1～3・5～7（同図版A・B－1～3・5～7）〕とがある。口径は12～16cmの範囲内にある。口縁上端を水平に整えたものは少なく若干波状を呈し、口縁部を外側へ折り曲げるのが特徴である。口唇部の断面は舌状〔同図1・3～5（同図版A・B－1・3～5）〕を呈し、なかには断面が方形に近い丸形の資料もあり〔同図2・6・7（同図版A・B－2・6・7）〕、同一個体にこれらが共存している可能性もある。器厚は8mm前後である。また、器質は全て共通し砂質であり、手触りがザラつく。両面にナデ調整が施されるが指頭痕が全面に残る。テンパーは全て粗いチャート粒及び石英粒を混入しており（A類）、器色は茶褐色を呈する。器面には部分的に石灰分が薄く付着する。やや焼成不良。全体的に雑な作りを思わせるグループである。全てW－1グリット第Ⅲ層のレベル60～70cm間より出土した（表20）。

ⅱ）第Ⅱ類〔第16図9・10（第XV図版A・B－9・10）〕

第Ⅱ類の器形は口縁が開くタイプで、わずか2点の出土ではあるが、頸部より直口気味に立ち上がり、口唇部を平坦に押さえて整形する〔第16図9、10（第XV図版A・B－9・10）〕ものである。出土層位は第Ⅲ層（レベル20-30）である（表20）。器質は第Ⅰ類よりも胎土が細かく泥胎に近い。

第16図9（第XV図版A・B－9）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の口縁破片で、同図10（同図版A・B－10）のように頸部よりやや直立気味に立ち上がる器形で、口唇部を平坦に整形する。表裏面ともに丁寧にナデ調整され、テンパーにチャート粒及び石英粒が使用されるが（A類）、器面への露出は少ない。色調は茶褐色で、焼成は良好である。

第16図10（第XV図版A・B－10）はW－2グリット第Ⅲ層（レベル20-30）出土の口縁部片で、やや開き気味に立ち上がり、頸部付近で直口状となる器形である。口唇部を平坦に整形する。両面ともに擦痕調整の後、ナデられるが特に表面の頸部以下に擦痕の残りが著しい。また、口縁部付近には整形の際の指頭痕が残っている。テンパーとしてチャート

及び石英が多量に使用される（A類）。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

ⅲ）第Ⅲ類〔第16図２（第XV図版A・B－２）〕

第Ⅲ類は１点の出土である〔第16図２（第XV図版A・B－２）〕。器形は全体的に直口気味で、第Ⅱ類と同様に口唇部をやや平らに整形するが、口唇部の両端が若干の丸みをもつ。W－２グリット第Ⅲ層（レベル0-10）の出土である。器面は両面ともに丁寧にナデ調整され、テンパーとしてチャート粒及び石英粒のほか粗い石灰質粒子（貝片）も見受けられるが（B類）、器面への露出が極めて少ない。焼成はかなり良好。器質は細かく泥質、精製である。

ⅳ）第Ⅳ類（23点）

第Ⅳ類は小破片のため器形の明示できない一群で、口唇部形態は４種見受けられる。すなわち口唇部は平坦に整形され、口唇外縁部が若干突出するタイプ（第１種）、第２種は口唇部を平坦にすることは第１種と同じだが外面への突出が見られないもの。口唇上面が外傾するものや若干の丸みを帯びるものもある。第３種は若干の肥厚を示し、断面が丸みを帯びた口唇形態を呈するもの。第４種は口唇部が舌状のものである。これら第Ⅳ類の４種の中には、口唇部の形態が前述の第Ⅰ～Ⅲ類と同種のものもある。また、第Ⅳ類はほぼ全層にわたって出土しているが、出土量が少なく、層位的な推移を知ることはできなかった（表20）。

① **第１種**〔第15図１・９・12、第16図１・４・12・14（第XV図版A・B－１・９・12、第XV図版A・B－１・４・12・14）〕

第Ⅰ種は口唇部を平坦に整形することにより外縁部を突出させる形態的特徴をもつ。器面は比較的丁寧にナデ調整されるもの（４点）や、擦痕調整後なで消すものなどが認められる〔第15図１、第16図１・12（第XV図版A・B－１、第XV図版A・B－１・12）〕。器質は砂質のザラつく手触りのものが多いが、胎土は細かい。焼成は概して良好で、色調はほとんどが赤褐色を呈する。第15図１（第XV図版A・B－１）は室川式の肥厚形態に近い。表採１点、第Ⅱ層２点、第Ⅲ層２点、層序不明２点の計７点の出土である。テンパーは全てA類に属する。

② **第２種**〔第15図２・７・10・11、第16図６～８・15（第XV図版A・B－２・７・10・11、第XV図版A・B－６～８・15）〕

第Ⅱ種は口唇上面の整形技法は第１種と同じだが、同部外縁の突出がみられないもの。口唇部が外傾あるいは内傾するものもある。ナデ調整が主体であるが、擦痕を有する資料も２点ある〔第16図７・８（第XV図版A・B－７・８）〕。テンパーはA類が５点〔第15図10、第16図６～８・15（第XV図版A・B－10、第XV図版A・B－６～８・15）〕、E類が３点〔第15図２・７・11（第XV図版A・B－２・７・11）〕認められる。概して器面への露出は少ない。焼成は良好で、色調は赤褐色を主体に、黄橙色、茶褐色もある。表採１点、第Ⅱ層３点、第Ⅲ層３点、層序不明１点の計８点の出土である。

③ **第３種**〔第15図４・６、第16図３・11（第XIV図版Ａ・Ｂ－４・６、第XV図版Ａ・Ｂ－３・11）〕

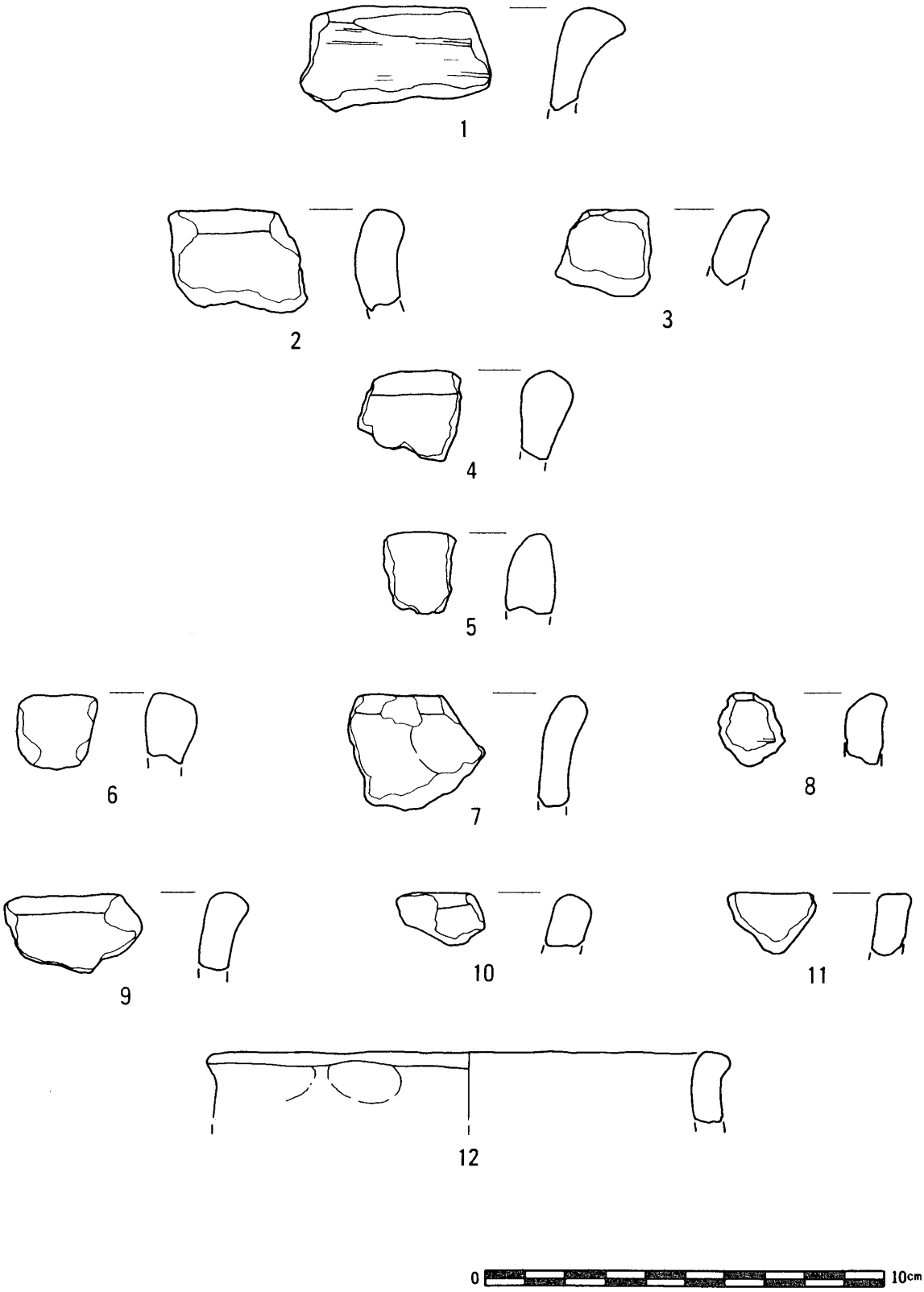
第Ⅲ種は口唇部を丸く整形するもので、若干肥厚するもの〔第15図４・６（第XIV図版Ａ・Ｂ－４・６）〕、肥厚のないもの〔第16図３・11（第XV図版Ａ・Ｂ－３・11）〕とがある。調整はナデ調整によるものが主体で、１点のみ表面に擦痕を残すものがある〔第16図11（第XV図版Ａ・Ｂ－11）〕。テンパーはＡ類が２点〔第16図３・11（第XV図版Ａ・Ｂ－３・11）〕、Ｃ類が１点〔第15図４（第XIV図版Ａ・Ｂ－４）〕、Ｅ類が１点である〔第15図６（第XIV図版Ａ・Ｂ－６）〕。器質は砂質であるが第Ⅰ種に比して胎土は細かい。赤褐色及び橙褐色がある。出土層位は第Ⅰ層で１点、第Ⅱ層で１点、第Ⅲ層で１点、層序不明１点の計４点である。

④ 第４種〔第15図３・５・８、第16図５（第XIV図版Ａ・Ｂ－３・５・８、第XV図版Ａ・Ｂ－５）〕

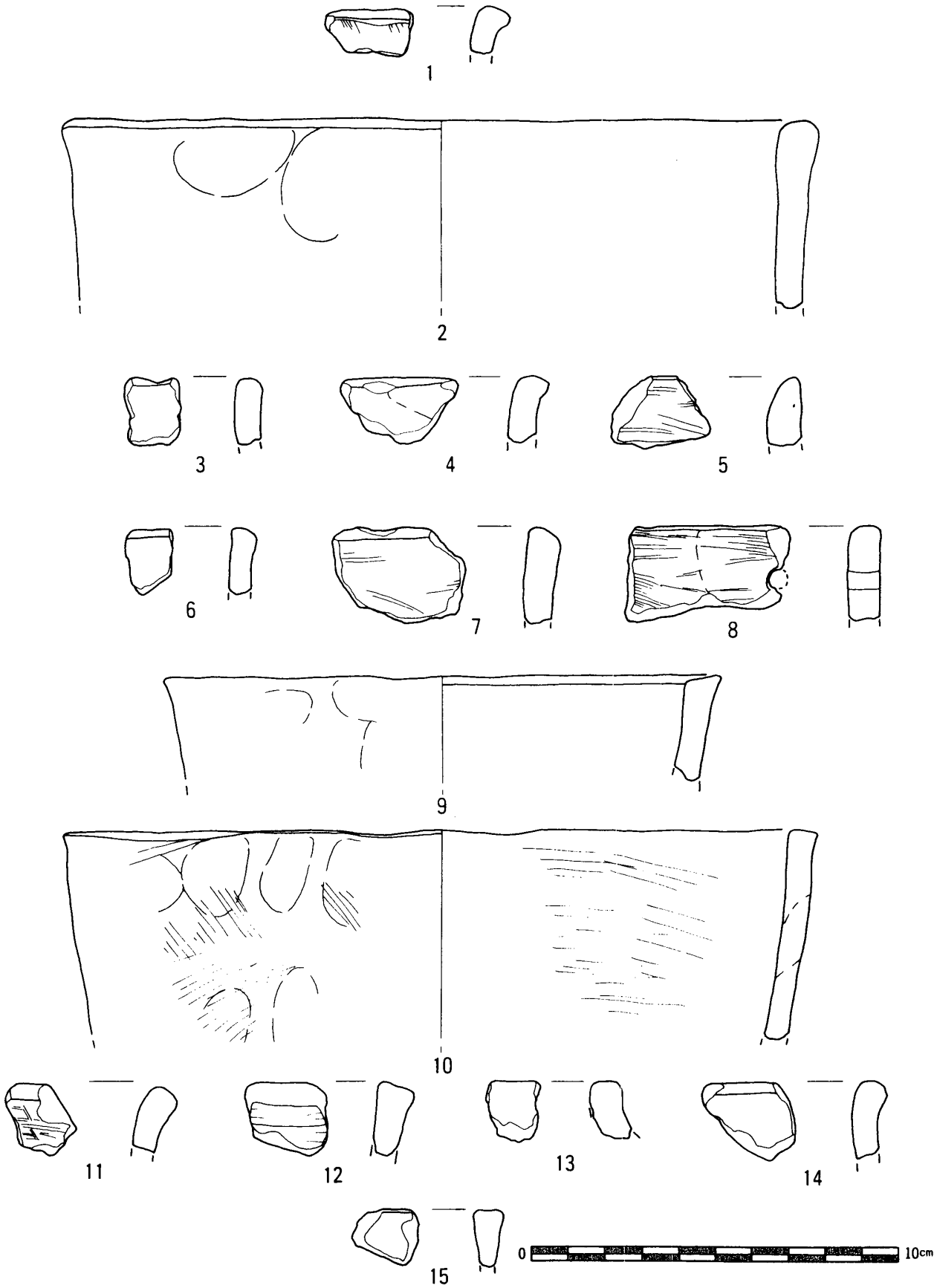
第Ⅳ種は口唇部を舌状に整形するもので、表採１点、第Ⅰ層１点、第Ⅱ層１点、第Ⅲ層１点の計４点である。このうち第15図３・８（第XIV図版Ａ・Ｂ－３・８）の口唇部は舌状を呈するものの、口唇部内面がやや内傾しており、第Ⅰ種の形状に近似する。調整は両面に擦痕の残るもの〔第15図８、第16図５（第XIV図版Ａ・Ｂ－８、第XV図版Ａ・Ｂ－５）〕とナデ調整のみ施されるもの〔第15図３・５（第XIV図版Ａ・Ｂ－３・５）〕とがあり、器質は前者が砂質、後者は泥胎である。テンパーは全てＡ類に属する。砂質を呈するものは概してテンパーの器面への露出が著しい。器色は橙褐色、灰色などがある。

３、まとめ

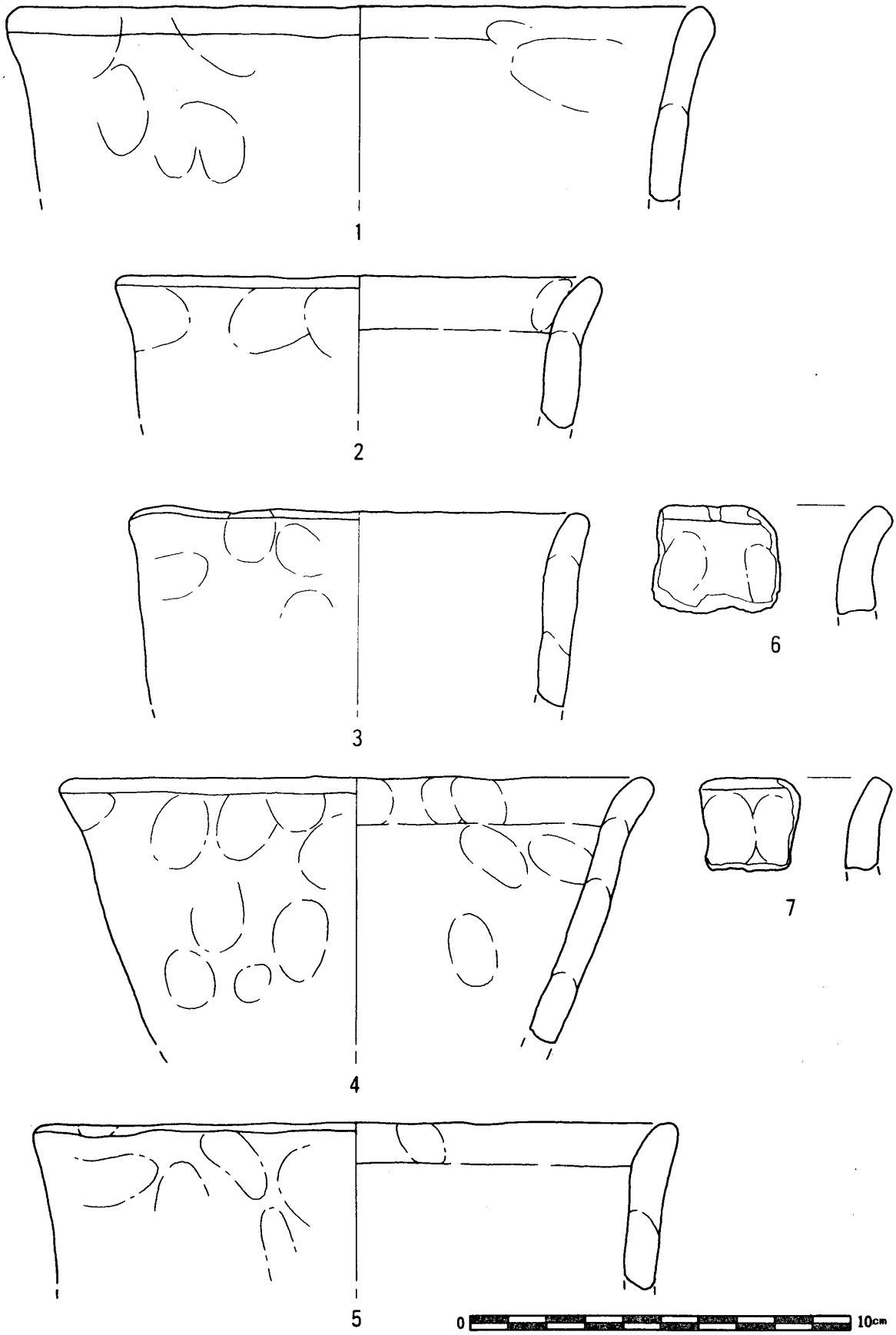
無文口縁の壺形は１点のみの出土であり、その諸特徴から荻堂期の壺の可能性がある。次に深鉢形について述べる。第Ⅰ～Ⅲ類は全て第Ⅲ層の出土で、同層内のレベルでみると第Ⅰ類は60～70cmレベル、第Ⅱ類は20～30cmレベル、第Ⅲ類は0～10cmレベルで出土しており、変遷の過程を暗示しているかにみえる（表20）。擦痕を残すものは概して少なく、ほとんどがナデ調整による。出土状況及び分類形態との関係では特定のパターンをつかむことはできなかった（表21、22）。テンパーについてみてみると、Ａ類が81.8％（27点）、Ｂ・Ｃ類はそれぞれ3.0％（１点）であり、Ｅ類は12.1％（４点）である。第Ⅰ類はＡ類のみで占められ、第Ⅱ類もまたＡ類のみ、第Ⅲ類はＢ類である。第Ⅳ類の第１種と第４種はＡ類のみの使用であり、第２種はＡ類が５点、Ｅ類が３点となり、第３種はＡ・Ｃ・Ｅ類の３種が認められ、各々が２点、１点、１点となっている。層位的にみるとＡ類は第Ⅰ～Ⅲまで及んでおり、Ｂ類は第Ⅲ層のレベル０～10cm間、Ｃ類は第Ⅰ層のレベル０～10cm間、Ｅ類は第Ⅱ層のみで出土している（表23）。また、分類形態との関係においてはＣ類は第Ⅳ種第３種のみ、Ｅ類は第Ⅳ種の第２・３種に混入される（表24）。



第15図　無文口縁土器　1～3(表採)，4(第Ⅰ層レベル0-10)，5(Ⅰの20-30)，6～12(第Ⅱ層)



第16図　無文口縁土器　1・2(第Ⅲ層レベル0-10)，3～5(Ⅲの10-20)，6～10(Ⅲの20-30)，11～15(層序不明)



第17図　無文土器　1～7(第Ⅲ層レベル60-70)

表20　無文深鉢形口縁の形態別出土状況

層位		第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類	第Ⅳ類				計
					第1種	第2種	第3種	第4種	
表　採					1	1		1	3
第Ⅰ層	(0-10)						1		1
	(20-30)							1	1
第Ⅱ層					2	3	1	1	7
第Ⅲ層	(0-10)			1	1				2
	(10-20)				1		1	1	3
	(20-30)		2			3			5
	(60-70)	7							7
層序不明					2	1	1		4
計		7	2	1	7	8	4	4	33

表21　無文深鉢形口縁の擦痕調整箇所観察表

層位＼テンパー		表裏面	表面のみ	裏面のみ	計
表　採		1			1
第Ⅱ層		1			1
第Ⅲ層	(0-10)			1	1
	(10-20)	1			1
	(20-30)	3			3
層序不明		1	1		2
計		7	1	1	9

表22　無文深鉢形口縁形態と擦痕調整の関係

部位＼形態	第Ⅱ類	第Ⅳ類				計
		第1種	第2種	第3種	第4種	
表裏面	1	2	2		2	7
表面のみ				1		1
裏面のみ			1			1
計	1	2	3	1	2	9

表23　無文深鉢形口縁のテンパー別出土状況

層位＼テンパー		A	B	C	E	計
表　採		2			1	3
第Ⅰ層	(0-10)			1		1
	(20-30)	1				1
第Ⅱ層		4			3	7
第Ⅲ層	(0-10)	1	1			2
	(10-20)	3				3
	(20-30)	5				5
	(60-70)	7				7
層序不明		4				4
計		27	1	1	4	33

表24　無文深鉢形口縁の形態とテンパーの関係

テンパー＼形態	第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類	第Ⅳ類				計
				第1種	第2種	第3種	第4種	
A　類	7	2		7	5	2	4	27
B　類			1					1
C　類						1		1
E　類					3	1		4
計	7	2	1	7	8	4	4	33

ヲ、《底部資料》

本貝塚出土の底部資料は計22点で、層序別にみると表採３点、第Ⅱ層１点、第Ⅲ層15点、層序不明３点である。全て平底に属し、小破片を含めて尖底と確認できる資料は出土していない。破損の著しい２点を除き、他の20点を図化した。

底径の推算可能な資料は13点ある。底径は約３～９cmの範囲にあり、大型（７cm以上）、中型（５～6.9cm）、小型（３～4.9cm）に細分できる。それぞれ３点、５点、５点の出土である。出土状況をみると大型は第Ⅲ層（レベル30-40）が１点、同層のレベル60～70cm出土が２点となり、中型は第Ⅲ層（レベル0-10）１点、同層のレベル30～40cmで２点、レベル60～70cmで２点の出土である。小型は表採１点、第Ⅲ層（レベル10-20）１点、同層レベル20～30cmより１点、層序不明が３点出土している。すなわち層位資料からみると小型は第Ⅲ層の10～30cm間にあり、中型は０～70cm間、大型は30～70cm間に見受けられる（表25）。大型及び中型は深層より、小型は上層より出土した。今後の層位資料に注意したい。

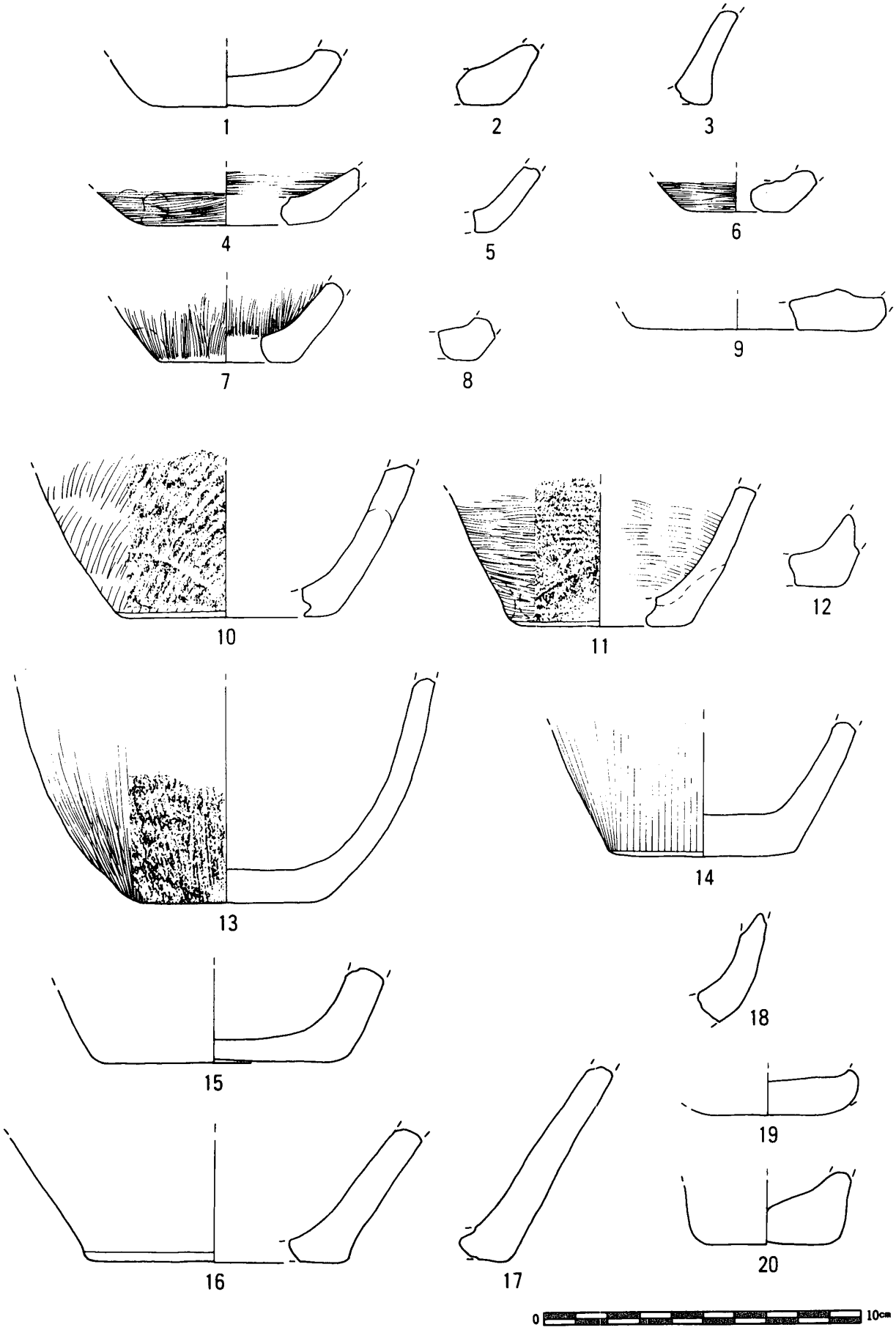
また、器壁は底面からの立ち上がり部が直線状に伸びるもの〔第18図14～17（第XVII図版

表25　底径(推算)

	実測図番号 図版番号	推算底径	タイプ	テンパー	出土地点・層位	備　　考
1	第18図1 第XⅦ図版A・B－1	約4.0cm	小型	A類	表　　採	表裏面ともにナデ調整
2	第18図4 第XⅦ図版A・B－4	約5.0cm	中型	A類	W－2　Ⅲ(0-10)	表裏面ともに横位の擦痕
3	第18図6 第XⅦ図版A・B－6	約3.2cm	小型	A類	W－1　Ⅲ(10-20)	表面に横位の擦痕
4	第18図7 第XⅦ図版A・B－7	約4.2cm	小型	A類	W－3　Ⅲ(20-30)	表面に縦位の擦痕
5	第18図9 第XⅦ図版A・B－9	約8.4cm	大型	A類	W－2　Ⅲ(30-40)	表裏面ともにナデ調整
6	第18図10 第XⅦ図版A・B－10	約6.2cm	中型	A類	W－1　Ⅲ(30-40)	表面に条痕様の調整
7	第18図11 第XⅦ図版A・B－11	約5.2cm	中型	A類	W－1　Ⅲ(30-40)	表裏面ともに横位の擦痕
8	第18図13 第XⅦ図版A・B－13	約5.4cm	中型	A類	W－1　Ⅲ(60-70)	表面に縦位の擦痕
9	第18図14 第XⅦ図版A・B－14	約5.6cm	中型	C類	W－1　Ⅲ(60-70)	表面に縦位のヘラナデ様調整
10	第18図15 第XⅦ図版A・B－15	約7.2cm	大型	A類	W－1　Ⅲ(60-70)	表裏面ともにナデ調整
11	第18図16 第XⅦ図版A・B－16	約7.8cm	大型	A類	W－1　Ⅲ(60-70)	表裏面ともにナデ調整
12	第18図19 第XⅦ図版A・B－19	約3.6cm	小型	A類	層序不明	表裏面ともにナデ調整
13	第18図20 第XⅦ図版A・B－20	約4.0cm	小型	A類	層序不明	表裏面ともにナデ調整

A・B－14～17)〕とやや膨らみのあるもの〔同図10・11・13(第XⅦ図版A・B－10・11、第XⅦ図版A・B－13)〕が見受けられるが、形態が窺えない資料が多い。底面と器壁面の接点が角をなすもの〔同図2・6～8・11・12・14・15(第XⅦ図版A・B－2・6～8・11・12、第XⅦ図版A・B－14・15)〕とやや丸みをもつ資料がある〔同図3～5・9・10・13・17・19・20(第XⅦ図版A・B－3～5・9・10、第XⅦ図版A・B－13・17・19・20)〕。角をなすものの中には立ち上がり付近を指で押さえることによって同部が若干くびれる資料もある〔同図3・11・16(第XⅦ図版A・B－3・11、第XⅦ図版A・B－16)〕。底部資料は全て無文であるが、なかには擦痕が消え切らずに残っている資料が7点あり、うち5点は両面に見受けられ、2点は外面のみに認められる。前者は第Ⅱ層～第Ⅲ層の40cmの間において出土し、後者は第Ⅲ層のレベル10～70cm間で出土した(表26)。内外面にみられる擦痕の方向は縦位、横位、斜位などで、層位的な変化は見出し得なかった。

また、他の残存資料のうち2点は調整技法が異なっており、表面に条痕様の粗い調整痕を斜め方向に施し、裏面にも横位の擦痕を施している。表面にこの種の調整痕を施すのは



第18図　底部資料

1・2(表採)，3(第II層)，4・5(第III層レベル0-10)，6(IIIの10-20)，7・8(IIIの20-30)，9～12(IIIの30-40)，13～17(IIIの60-70)，18～20(層序不明)

稀である〔第18図10（第XVII図版A・B－10)〕。他の1点は器表面において縦位の浅い凹線状(ヘラナデ様)の調整痕が残る資料〔同図14(第XVII図版A・B－14)〕である。さらに、上記以外に底面を光沢の出るほどナデ調整する資料〔同図9（同図版A・B－9)〕もある。

テンパーは1点のみC類が見受けられた〔第18図14（第XVII図版A・B－14)〕。他の資料は全てA類に属する。

表26　底部における調整痕の残存状況

調整		擦痕		条痕様	ヘラナデ様	計
層位＼部位		表裏面	表面のみ	表面のみ	表面のみ	
第Ⅱ層		1				1
第Ⅲ層	(0-10)	2				2
	(10-20)		1			1
	(20-30)	1				1
	(30-40)	1		1		2
	(60-70)		1		1	2
計		5	2	1	1	9

ワ、《無文胴部》

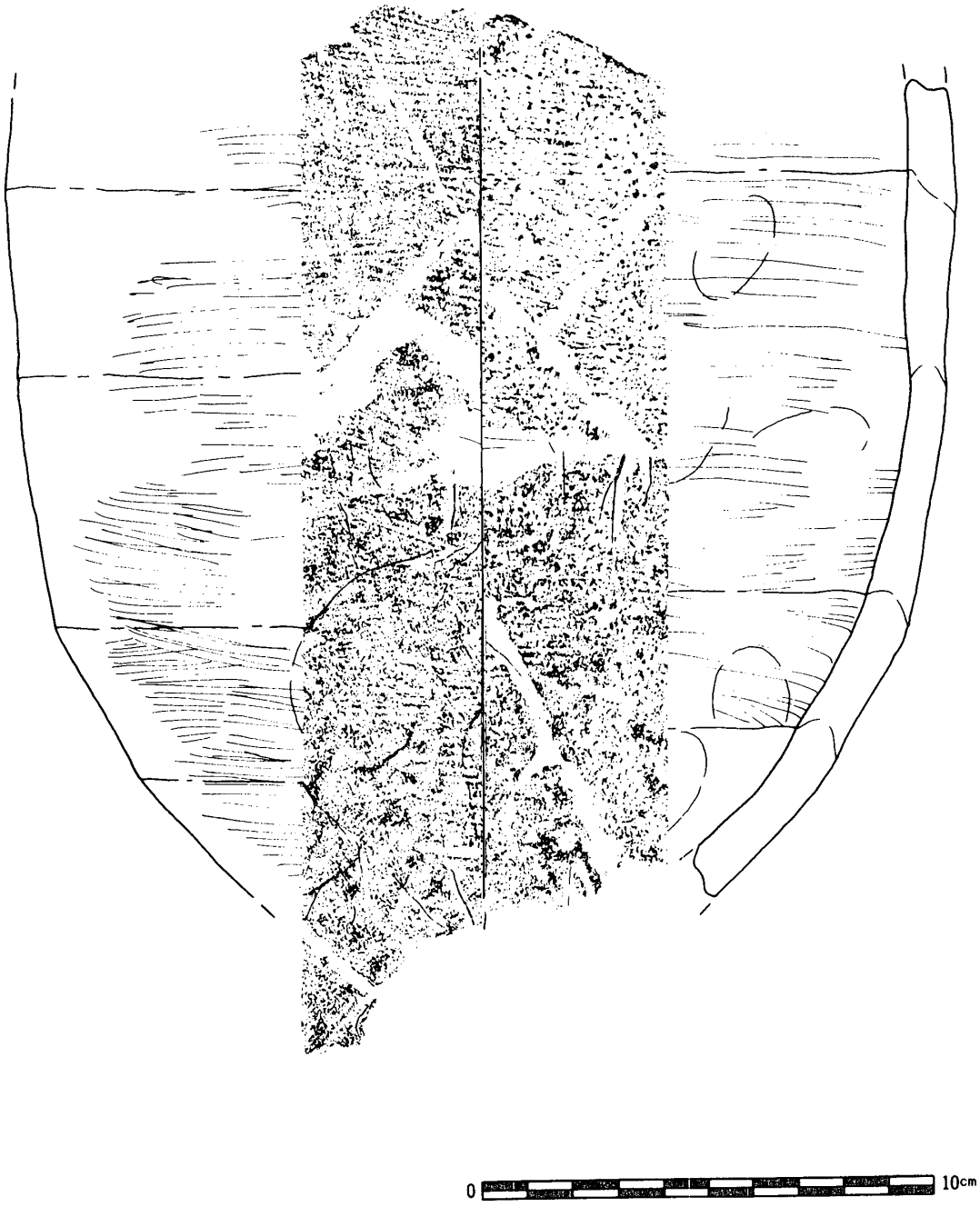
本貝塚出土の無文胴部は、型式不明の一群をまとめたもので、表採資料は1点、第Ⅰ層出土が110点、第Ⅱ層が184点、第Ⅲ層が563点、第Ⅳ層が240点、第Ⅴ層が3点の計1101点（100%）である。

器面は擦痕調整の後なで消すが、消え切らずに擦痕が残存する資料が36.7%あり、残りはナデ調整のみ残る。このことは同一個体に両調整痕が共存することを示唆するものであろう。擦痕のなで消しよりもナデ調整のみなされる資料の個数が上回ることから両者の関係は器面における調整箇所の面積の差異を表しているものと思われる。また、他に縄文晩期の土器には著しい擦痕が残ることが少ないため、これも出土量の差異に影響を及ぼしているものと思われる。これらを調整及び残存箇所で分類すると、両面に擦痕が残存するもの(第Ⅰ類)、表面のみ(第Ⅱ類)、裏面のみ(第Ⅲ類）の3類に分けられ、他方、擦痕が認められず、ナデ調整のみの資料(第Ⅳ類)も多い。第Ⅰ類は215点（19.5%)、第Ⅱ類は86点（7.8%)、第Ⅲ類は103点（9.4%）で、第Ⅳ類は696点（≒63.3%）である。これらを層序別に見てみたが、一定の規則性は見出し得なかった（表27)。

表27　無文胴部の擦痕残存別出土状況

層位＼部位		表裏面	表面のみ	裏面のみ	計
第Ⅰ層	(0-10)	2		4	6
	(10-20)	1	1	4	6
	(20-30)		1	1	2
第Ⅱ層		12	8	16	36
第Ⅲ層	(0-10)	30	19	25	74
	(10-20)	44	17	13	74
	(20-30)	54	12	14	80
	(30-40)	22	7	7	36
	(40-50)	10	1		11
	(50-60)	17	3	3	23
	(60-70)	3	2	4	9
第Ⅳ層		18	15	12	45
第Ⅴ層		2			2
計		215	86	103	404

また、前述の分類基準で混入物の出土状況をみると、A類は983点、B類は3点、C類は94点、D類は2点、E類は19点の出土で、テンパーはA類が89.3%で最もポピュラーである。次いでC類が8.5%とかなり低比率となり、E類が1.7%、B類はわずかに0.3%である。E類は明らかにそれを主体に混入した



第19図　無文胴部(第III層レベル30-40)

例が無文口縁土器にあり、何らかの意図が考えられるが、B類はその出土量の少なさだけでなく、器体に混入される量自体も少ないことから土器製作時の偶然性によるものと考えられる。これは無文胴部だけでなく、型式の同定された土器でも同様なことがいえる。C類・D類などの黒雲母混入の在地土器は沖縄本島ではあまり例をみないことから、奄美以北との関連が考えられる。奄美では黒雲母混入の土器が知られている。また、伊波式・荻堂式及び大山式に黒雲母の混入例がないことから、他のテンパーとの時期差も考慮に入れることができよう。時期差は層序別出土状況からも窺える（表28）。

表28　無文胴部のテンパー別出土状況

層位＼テンパー		A類	B類	C類	D類	E類	計
表採		1					1
第Ⅰ層	(0-10)	34		1			35
	(10-20)	45	1	2		1	49
	(20-30)	20		5		1	26
第Ⅱ層		150	2	25		7	184
第Ⅲ層	(0-10)	165		30		5	200
	(10-20)	116		5			121
	(20-30)	104		1			105
	(30-40)	47					47
	(40-50)	19					19
	(50-60)	31					31
	(60-70)	40					40
第Ⅳ層		208		25	2	5	240
第Ⅴ層		3					3
計		983	3	25	2	5	1101

器質は砂質で肌理が粗いものと泥質で肌理が細かいものとがあり、前者が大半を占める。前者は焼成の脆弱なものが多いが稀に良好なものもある。泥質は一般に焼成が良好である。色調は両者ともに褐色の系統と黒色の系統、黄色の系統があり、褐色系統が主体である。

第19図（第XIX図版A・B）に示した資料はW－2グリット第Ⅲ層（レベル30-40）出土の胴部で、口縁部、底部を欠失するが、ほぼ胴の全景が窺えるものである。深鉢形を呈し、胴部は張りの見られないタイプである。胴の最大径は約11cm。器面全体に調整痕が著しく残る。整形痕は2種見受けられる。1つは接合部における指頭による凹凸で、器面の内外に認められる。他の1つは擦痕で、表面の胴上半は横位の擦痕をなで消しているが消え切らず、特に胴下半には明瞭に残る。内面は横位の擦痕を施し、底部近くではナデ調整を行っているが擦痕は観察できる。胎土にチャート粒及び石英粒を多量に含むが（A類）、器面への露出は少ない。橙褐色を呈し、焼成は良好である。部分的に石灰分の付着が見られる。層位や器質の特徴からみて荻堂式か大山式に属するものと思われる。

D）その他の遺物（後世遺物）

本項では本貝塚出土の後世遺物について紹介する。これらの遺物には陶磁器類や鉄製品があり、前者は24点、後者は3点である（表1）。

陶磁器はW－1グリットで8点、W－2グリットで11点、W－3グリットで3点、グリット不明が2点の計24点の出土である。そのほとんどが撹乱層である第Ⅰ層（表土層）からの出土であるが、W－2グリットではⅡ層から1点近代陶器が出土している（表29）。したがって撹乱が一部第Ⅱ層に及んでいることになる。

鉄製品はW－1グリットで1点、W－2グリットで2点出土している。3点とも第Ⅰ層で出土している。弾丸1点と鉄片（原形状及び用途不明）2点に分けられる（表29）。

以下、上記遺物の概要を述べる。

表29　後世遺物出土表

遺物 / 層序		陶磁器																		鉄製品			計
		中国青磁			湧田焼			灯明台？			陶磁器	現近代		瓦片			不明品			鉄片		弾丸	
グリット名		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	2	
第Ⅰ層	(0-10)					1					.5				2				1	1			
	(10-20)		1	1							1			2	2			1			1	1	24
	(20-30)		1						1							1		1					
第Ⅱ層																		1					1
層序不明															2								2
計		3			1			1			6			9			4			2		1	27

イ、《陶磁器》

陶磁器類は手塚直樹氏に鑑定していただいた。その結果、以下のように同定された。すなわち、中国製青磁3点、湧田焼1点、沖縄産陶器の灯明台？が1点、近現代の陶磁器（19～20C）が6点、瓦片9点、その他の不明品が4点の計24点である。これら陶磁器のうち不明品を除いた7点を図化した。

1、中国製青磁

青磁は3点得られ、口縁部のみの出土であり、全て15世紀の製品である。3点とも碗形に属し、有文資料はない。

第20図1（第XX図版－1）はW－2グリット第Ⅰ層（レベル10-20）出土の青磁碗の口縁部片で、口径は約13.0cm、器厚は約0.4cmを計る。灰白色の素地に青灰色の釉が薄く施され、貫入はない。

第20図2（第XX図版－2）はW－3グリット第Ⅰ層（レベル10-20）出土の青磁碗の口縁部片で、口径約12.6cm、器厚約0.3cmである。灰白色の素地に青灰色の釉が薄く施される。表面及び裏面の上部に細かい貫入が入る。裏面にはロクロ痕が残り、同部を指で押さえたため口縁部が若干肥厚している。

第20図3（第XX図版－3）はW－2グリット第Ⅰ層（レベル20-30）出土の青磁碗の口縁部片である。口縁部の残りが悪く、そのため口径及び傾きは不明である。器厚は約0.25cmの薄手である。灰白色の素地に、薄く青灰色の釉をかける。表裏面にロクロ整形の際の浅い凹凸が認められる。

2、沖縄産陶器

沖縄産陶器と目される資料は2点出土しており、1点は湧田焼である。

第20図4（第XX図版－4）はW－2グリット第Ⅰ層（レベル0-10）出土の湧田焼である。碗の底部で、底径は約6.0cm、底面の厚さは0.7cmを計る。表面にはロクロの整形痕が残る。肌色の素地に青灰色の釉が施釉されていたと推察される。

第20図5（第XX図版－5）は沖縄陶器の灯明台？の破損品である。口径約4.2cm、器厚約0.3cmの小形品である。素地は灰色を呈し、部分的に亀裂が入る。黒色鉱物の混入も認められる。全面に黒褐釉が施される。

3、近現代陶磁器

近現代の陶磁器は6点出土しているが、これらのうち磁器は2点、陶器は4点である。

全て施釉され、釉色は白色、黒色の２種あり、前者は３点、後者も３点である。ほとんどが原形を留めない小破片であるため、どの部位に属するか不明である。したがって以下、口縁部１点、底部１点を図化した。

第20図６（第XX図版－６）はW－１グリット第Ｉ層（レベル10-20）から出土した現代の磁器の底部で、白色の素地に明青色の絵付けをし、透明釉で施釉される。小破片のため文様構成は不明。器壁は約0.3㎝、底径約4.0㎝、底面の厚さは0.2㎝である。20世紀の遺物と考えられる。

第20図７（第XX図版－７）はW－１グリット第Ｉ層（レベル0-10）より出土した現代の磁器の口縁部で、口径約6.4㎝、器厚は約3.5㎝を計る。直口状の器形で、口縁部に向かって薄く整形される。表面にはロクロ痕が明瞭で、浅い稜線を形成する。灰緑色の色絵で染め付けられ、下端に文様の一部が見受けられるが、全体の構成は小破片のため不明である。透明釉が施釉されており、素地は白色で混入物はみられない。20世紀の所産と考えられる。

４、不明陶器及び瓦片

この項にまとめた13点は時期及び産地などの同定ができない一群で、施釉陶器１点、陶器１点、陶質土器２点、瓦片９点である。全て形状不明の部分資料であるため図化しなかった。以下、その概要を述べる。

施釉陶器は両面に光沢のない茶褐色の釉が施される。器面には（施釉時の？）不純物の付着があり、ザラつく。両面にロクロの整形痕が残る。橙褐色の素地には黒色の微粒子が若干混入されている。器厚は約0.4㎝である。焼成はかなり良好。

陶器片は器厚が約0.6㎝で、表面に縦位の細かい掻傷が残り、裏面にはロクロ整形の跡が明瞭に稜をなして残存している。施釉されないが、表面のみがあたかも施釉されたように色調が異なる。胎土はエンジ色で、わずかに黒色の微粒子の混入が見受けられる。焼成は極めて良好。

陶質土器は２点ともに器厚約0.3㎝の薄手である。いわゆる陶質土器と呼ばれるもので、グスク及び近世の村跡から出土することがある。本標品もそれに属する。ロクロを使用し、両面ともに整形時の指痕が残る。混入物らしきものは見受けられない。色調は全体的に黄褐色である。

瓦片と目されるものは９点あり、いずれも破損した小破片であるため、原形は窺えない。表面は丁寧にナデられ、裏面には布の圧痕が残るものもある。器色は淡い肌色を呈し、胎土に混入物は見受けられない。

ロ、《鉄製品》

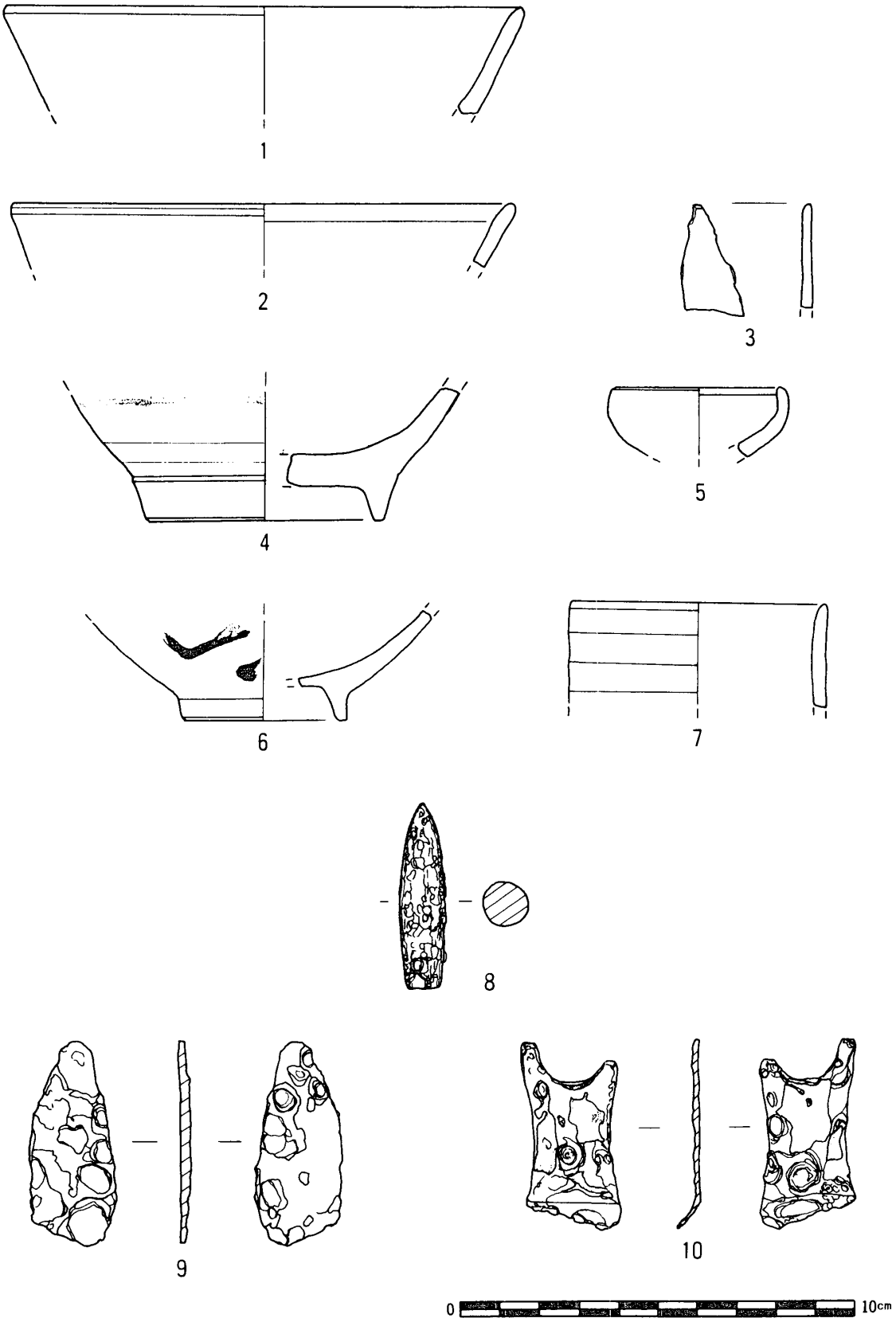
鉄製品は３点の出土で、全て現代遺物である。

１、弾丸

第20図８（第XX図版－８）はW－２グリット第Ｉ層（レベル10-20）出土の弾丸である。長さ47㎜、最大径12㎜、重量は約27ｇを計る。全面に錆が目立つ。

２、鉄片

第20図９（第XX図版－９）はW－２グリット第Ｉ層（レベル10-20）出土の鉄片で、残



第20図　中国青磁　1・2(第Ⅰ層レベル10-20)，3(Ⅰの20-30)，湧田焼　4(第Ⅰ層レベル0-10)
灯明台　5(第Ⅰ層レベル20-30)，
現代磁器　6(第Ⅰ層レベル10-20)，7(Ⅰ層の0-10)
弾丸　8(第Ⅰ層レベル10-20)，鉄片　9(第Ⅰ層レベル10-20)，10(Ⅰの0-10)

存長は約5.2㎜、幅は約2.2㎝、厚さ0.2㎝、現存の重量は約8.6ｇである。欠損が著しく、また、錆による剝離も加わって原形は不明。

第20図10（第XX図版－10）はW－１グリット第Ｉ層（レベル0-10）出土の鉄製品で、残存長は約4.8㎝、厚さ約0.2㎝、現存の重量約6.2ｇである。上端部には円形の孔があったと思われ、半欠している。推定径約1.8㎝を計る。破損部下端はくの字に折り曲げられている。表裏面に茶色のペイントが残っており、金具の一部である可能性が強い。

Ⅴ．結

本貝塚は海岸砂丘に形成された、暫定編年（註26）の前Ⅳ～Ⅴ期に属する遺跡である。本貝塚は1957年、多和田真淳によって発見された。その後、宅地造成による土地開発に伴う緊急調査や学術調査、踏査などが今日までに５機関によってなされている。

今回の発掘調査で５枚の層が確認された。第Ｉ層は基本的に撹乱層であり、少量の土器の他、耕土撹乱などによって混入した陶磁器、鉄製品などの後世遺物が確認された。第Ⅱ層はわずか10㎝前後の薄い層で、先史遺物が少量と１点の陶磁器が確認された。第Ⅲ層は基本的に先史遺物包含層である。先史遺物が最も多く出土し、本貝塚の盛期であろうと思われる。石器、貝製品、土器などが出土しており、特に土器が最多である。第Ⅳ層は基本的に遺物包含層であるが遺物の出土は少なく、今回は土器のみの出土である。第Ⅴ層は白砂の基盤層で無遺物層であるが、その上面より４点の土器が検出され、他の遺物の出土はなかった。１点は荻堂期の壺形土器である。これらの詳細は前述した。

今回の調査は小発掘ながら遺物内容は比較的充実しており、自然遺物、石器、貝製品、土器、現代遺物が得られたが、遺構と思われるものは検出されなかった。

自然遺物は獣魚骨及び貝類が検出されており、当然前面の海浜を生業の場とした結果であろう。本貝塚における食料残滓の組成も沖縄先史時代の類例遺跡に共通するものであるが、全体の遺物総量からすれば2.9％と割合少ない。良好なラグーンをもっていながらその食料残滓の少ないことは、おそらく今回の発掘地区が貝塚の中心部ではないと解すべきであろう。しかし、1979年に報告された本貝塚の調査報告においても自然遺物は比較的少量であり、貝類の出土数に関してみても陸産貝のオキナワヤマタニシ、海産貝のアマオブネガイ及びイソハマグリを除いては今回の出土比率と類似している（註３）。検討を要するものである。今回専門家による自然遺物の同定は行えなかった。次回に報告したい。出土数は第Ｉ層10点(25％)、第Ⅱ層12点(30％)、第Ⅲ層17点（42.5％）、層序不明１点（2.5％）の出土である。

次に人工遺物であるが、石器は先史人工遺物総数1271点(100％)のうち10点(0.8％)で、貝製品は５点(0.4％)、土器は1256点(98.8％)である。石器及び貝製品の出土が類例遺跡に比してあまりにも少ない。また、骨製品は出

土していない。このこともまた調査範囲の極めて狭かったことによるものであろうと推測する。

石器は石斧と磨石が確認された。形態の判明するものはほとんどが表採であるが、石斧はその特徴から本貝塚に属するものとみて良いと思われる。磨製の両刃が認められた。刃部を欠損する資料もこれに属するものと思われる。敲石への転用例が1点ある。磨石は大型の製品が1例表採されており、本貝塚に属するものと断定はできないが、あまり類例をみない資料である。今後の資料に注意したい。石質については伊是名島に産しない岩石もあるようで、石材の入手に際し他の地域との交流も考慮しなければならないが、これは今後の課題としたい。表採5点（50%）、第Ⅲ層が3点（30%）、層序不明が2点（20%）である。

貝製品は製品及び未製品などが確認されている。ヤコウガイ製貝匙、ヤコウガイ製ペンダント、フデガイの有孔製品及びイモガイの螺塔部を加工した未製品である。

貝匙は体層部を切り取ったもので柄のモチーフもない粗造品である。その破損品を転用したと思われるペンダントも見受けられる。フデガイの有孔製品は体層部に外面から1孔を穿ったのみで貫通しないものが1例得られている。イモガイ製の未製品についても同様に製品として機能したか不明である。加工痕は認められず、また、本期にはいわゆる貝盤（シェル・ディスク）の出土が極めて稀であることからも自然遺物の可能性もある。貝製品は第Ⅰ層1点（20%）、第Ⅲ層4点（80%）の出土である。

土器は最多の出土量を占め、本貝塚の土器文化の様相の一端を知ることができる。本貝塚の土器は前述のように前Ⅳ～Ⅴ期の範疇にあり、沖縄産の土器を主体に奄美系の土器が数型式認められた。前者は荻堂式を主体とし、次いで大山式、室川式、伊波式、宇佐浜式の順となり、カヤウチバンタ式及び室川上層期のものが1点づつ出土している。後者は嘉徳系土器の他、喜念Ⅰ式系の土器が検出されている。これらの土器は各層において混然としており、各型式が層位別に確認されたわけではない。第Ⅱ層以下において後世の大幅な撹乱はないと思われることから、堆積時の状況を反映したものであろう。型式が確認された土器の大半は第Ⅲ層より出土しているが、レベル的にはある程度の出土状況が見出された。すなわち表4（P14）にみられるように、伊波・荻堂式が他の土器より下層に出る傾向にある。

伊波式は計7点の出土で量的には少ない。深鉢形のみの出土である。文様は点刻文、沈線文、鋸歯文など叉状工具による施文や、押し引き文と鋸歯文を組み合わせた文様を半截竹管状工具で描くものなどが認められる。

荻堂式は39点の出土があり、第Ⅲ層を主体に出土するが、最下層からも検出されている。壺形土器及び深鉢形土器が認められ、後者の出土が多いが、前者も類例遺跡に比して高い比率を占める。器形は従来知られている範疇内にあるが、全景を窺える資料は無い。口径から類推すると小型に属するものが多い。文様は連点文と鋸歯文の組み合わせ、押し引き文と鋸歯文、押し引き文と斜行文の組み合わせなどが見受けられ、1点ではあるが波状の

外耳状凸帯に沈線文を描き、その上位に横位押し引き文、下位に鋸歯文を配する希少例もある。

大山式は16点の出土があり、第Ⅲ層を主体に出土する。器種は全て深鉢形に属し、口径は10～12cmの小型に属するものと、16～19cmの中型に属するものとがある。文様は2類に大別でき、第Ⅰ類は沈文（押捺刻文・押し引き文）のみ有する資料であり、第Ⅱ類は沈文の他、浮文の凸帯文や擬凸帯を配するものである。

室川式は計11点の出土で、全て無文深鉢形に属する。口縁部の肥厚形態で細分できるが、その変遷を捉えることはできなかった。

カヤウチバンタ式は口縁部1点のみの出土である。深鉢形に属し、無文である。

嘉徳式系土器と思料されるものは6点出土しており、嘉徳Ⅱ式、嘉徳Ⅰ式A土器及び嘉徳系とに細分される。全て文様の特徴とテンパー（黒雲母混入）、焼成（堅緻）などによって在地土器とは区別される。

室川上層期の土器もまた1点のみ出土しており、有文口縁部である。深鉢形を呈すると思われ、半截竹管状工具による押捺刻文が認められる。

宇佐浜式は5点の出土。口縁部のみ確認され、同型式の特徴である断面三角形の肥厚口縁を呈するが、肥厚形態がややルーズなものもある。器種は深鉢形と壺形が認められた。

その他の有文資料として分類された4点はいずれも縄文後・晩期のものと目されるが、前述の諸型式からは外れるものである。2点は口縁が内傾するもので、在地土器にはあまりみられない形態であり、類例の増加が待たれる。

喜念Ⅰ式及び喜念Ⅰ式類似の土器は9点得られ、壺形と思料される。文様はミミズ脹れ状凸帯の両サイドに刺突文を配するものである。類似土器として分類したものは小破片であるため、文様の構成が把握できない。また、沈線文の片側のみに刺突文を有する資料もあり、今後の類例を待たなければならない。テンパーについてはこれらの資料も嘉徳式系の土器と同様に、他の沖縄産の土器に比して黒雲母の多量混入という特徴がある。

無文口縁土器は34点出土しており、1点が壺形土器の可能性が窺える他は全て深鉢形に属する。縄文後・晩期のものと目される。これらは先述の諸型式の中心文様から外れた部分の可能性をもつ資料もある。他方、上記とは別に無文第Ⅰ類や第Ⅳ類の第Ⅰ種などは口縁部を折り曲げる、あるいは口唇部を突出させる特徴があり、今後注意を要する。

底部資料は全て平底であることから縄文後期に属すると考えられる。形態はほぼ類似しているが、擦痕調整の仕方には多少の異同がある。これについては前述した。

本貝塚の土器のテンパーについてはA類が主体となり、C類、E類、B類、D類の順に減少する。特にC類以下はほとんどその出土がないことから、製作時の偶然性による例外であろうと思われる。これらについても各型式ごとに詳述した。

以上のように今回の試掘では、広範囲にわたる伊是名貝塚の全容及び縄文後・晩期の様相をつかめたとは言い難い。石器や貝製品のバラエティーの貧弱なことや欠落した資料（住居址・骨製品）などもあって十分とはい

えないが、良好な包含層とともに土器型式の動向がつかめたことや、石器及び土器から他地域との交流を想定できたことは一つの収穫であった。北からの文化伝播経路に位置する伊是名島の地理的条件は無視できない。沖縄縄文文化の源流、系統関係を考えるうえで今回も一つの示唆を得た意義は大きい。

末尾ながら調査、資料整理などの諸分野でご指導・ご協力を賜った手塚直樹・大城逸朗両氏に対して厚くお礼申し上げたい。

【註】

註1 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会,1960

註2 『具志川島遺跡群発掘調査概報』 伊是名村教育委員会,1991

註3 『伊是名貝塚』伊是名村教育委員会,1979

註4 伊是名貝塚学術調査団『伊是名貝塚発掘調査概報1』 1992

註5 伊是名貝塚学術調査団『伊是名貝塚発掘調査概報2』 1993

註6 高宮廣衛「野國海岸発見の石器について」『沖大論叢』創刊号 嘉数学園沖縄短期大学,1960

註7 白木原和美「南西諸島とイネの道」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』和佐野喜久生編,1995

註8 沖縄国際大学考古学研究室「室川貝塚第4次発掘調査概報」『沖国大考古』第6号 1982

註9 『北原貝塚』沖縄県教育委員会,1995

註10『久里原貝塚』伊平屋村教育委員会,1981

註11 『伊是名ウフジカ遺跡』伊是名村教育委員会,1980

註12 『浜崎貝塚』伊江村教育委員会,1976

註13 『室川貝塚』沖縄市教育委員会,1993

註14 嵩元政秀・新田重清「嘉手納貝塚発掘報告書」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会,1960

註15 『知花遺跡群』沖縄県教育委員会,1978

註16 『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会,1978

註17 安里嗣淳・盛本勲「伊江島阿良東遺跡の試掘調査」『紀要』第1号,沖縄県教育委員会,1984

註18 「V 琉球大学史学科考古学研究室」『沖縄県の考古資料（土器）目録』沖縄県立博物館,1984

註19『古座間味貝塚』沖縄県教育委員会,1982

註20 当間嗣一・大城慧「東貝塚発掘調査報告」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』,1979

註21 賀川光夫・多和田真淳「沖縄県宜野湾市大山貝塚調査概要」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会,1959

註22 高宮廣衛「14 壺川貝塚」『那覇市の考古資料』 1968

註23 『室川貝塚』沖縄市教育委員会,1979

註24 「北谷町内の遺跡」『北谷町史』第3巻民俗下,北谷町教育委員会,1994

註25 「第5章 上城遺跡の調査」『上城跡・上城遺跡』大島郡与論町教育委員会,1990

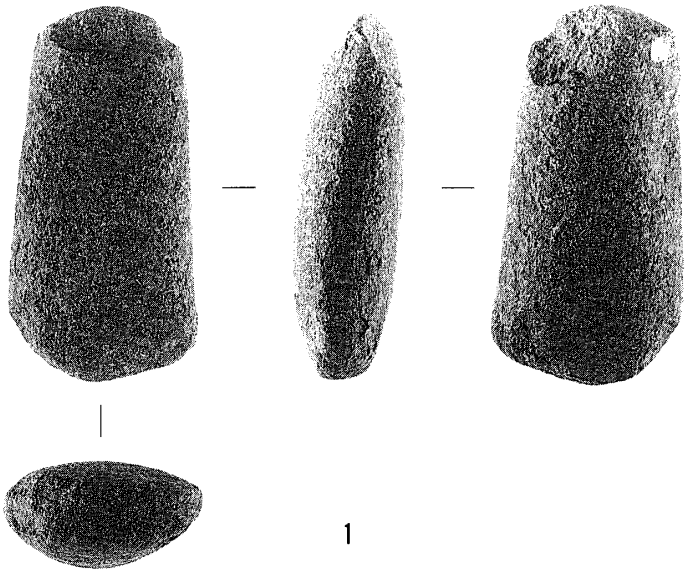
註26 高宮廣衛「南島考古雑録（1）」『南島考古』第11号,沖縄考古学会,1991

第1表　沖縄諸島の暫定編年

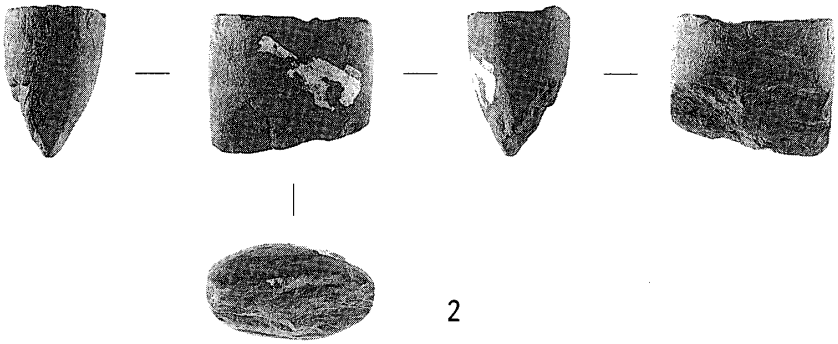
本土		沖縄	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	原行編年
縄文時代	早期	前期 I	野国第4群 ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140Y.B.P. 東原式 6450±140Y.B.P.	早期
	前期	II	条痕文土器 室川下層式土器 曽畑式土器 神野A式土器 神野B式土器	条痕文土器 曽畑式土器	曽畑式（渡具知東原） 4880±130Y.B.P.	
	中期	III	面縄前庭I式土器 面縄前庭II式土器 面縄前庭III式土器 面縄前庭IV式土器 面縄前庭V式土器	←旧具志川A式 ←旧具志川B式 ←旧具志川C式 ←旧神野C式 ←旧面縄前庭式		
	後期	IV	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器		伊波式（熱田原） 3370±80Y.B.P. 伊波式（室川） 3600±90Y.B.P.	前期
	晩期	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器	中期
弥生時代	前期	後期 I	真栄里貝塚	板付II式土器 亀ノ甲類似土器		後期
	中期	II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期	III	アカジャンガー式	免田式土器	アカジャンガー式は中津野式並行か？	
古墳時代〜平安時代		IV	フェンサ下層式土器		類須恵器	

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

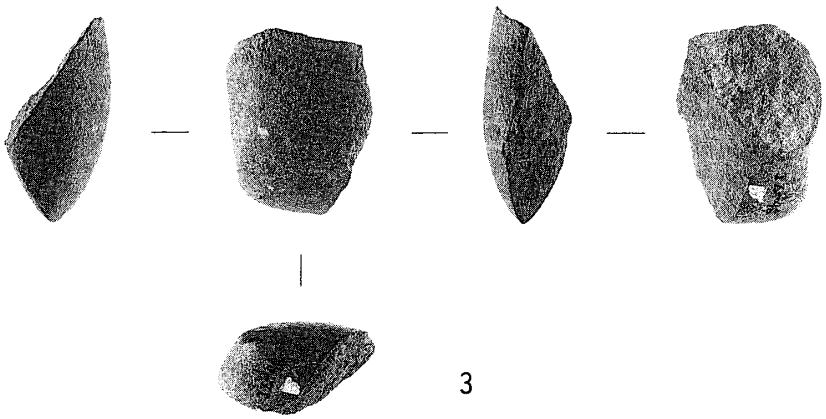
図　　版



1

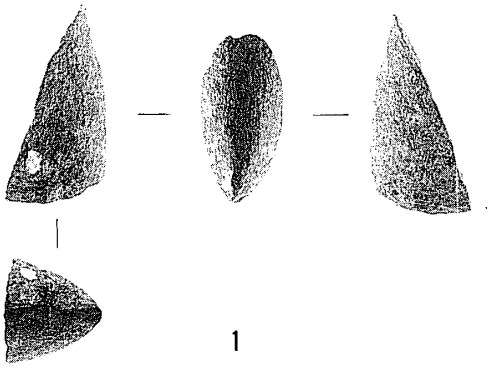


2

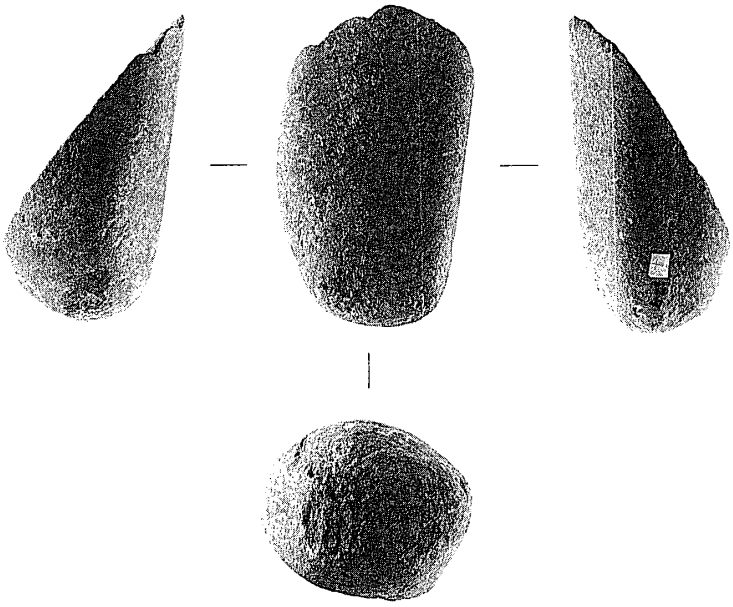


3

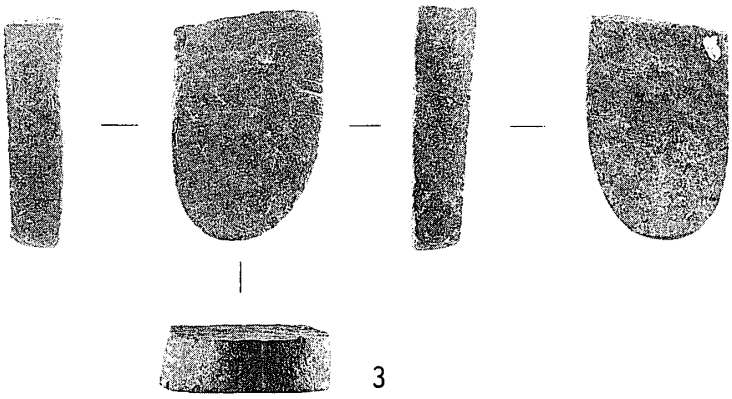
第Ⅰ図版　石器：1～3 石斧



1

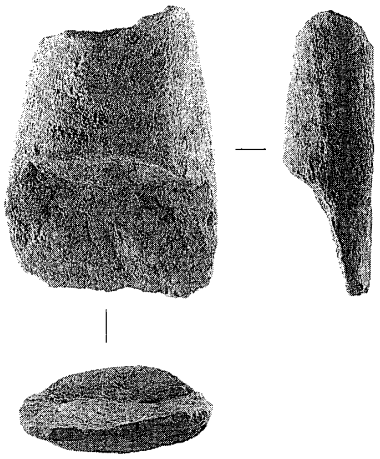


2

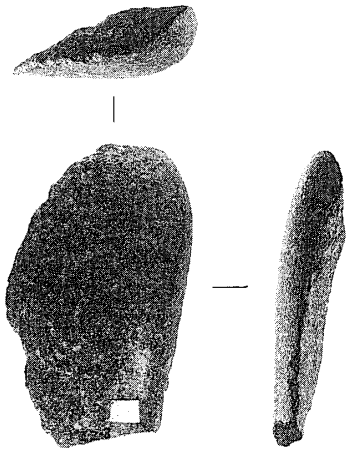


3

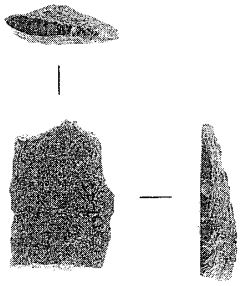
第II図版　石器：1 石斧　2･3 磨石



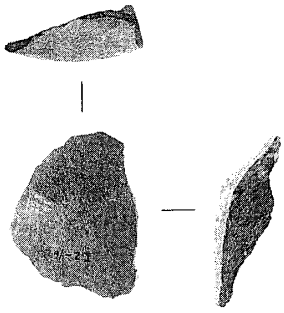
1



2



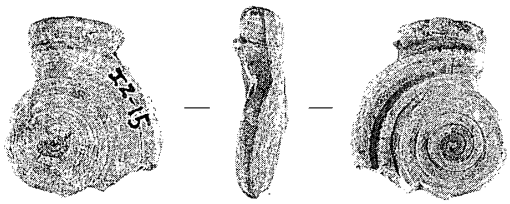
3



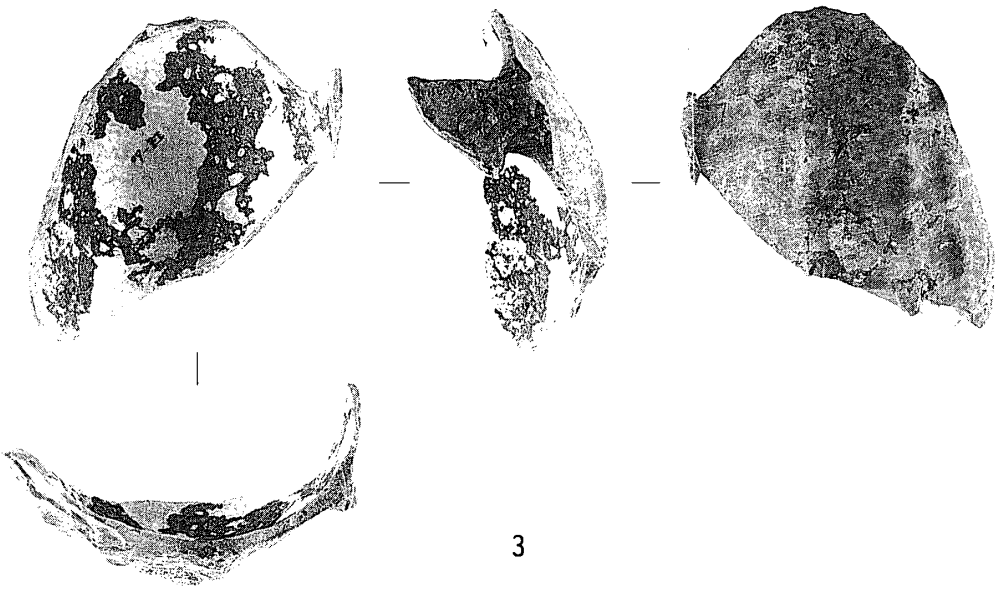
4

第III図版　石器：1～4 不明品

1



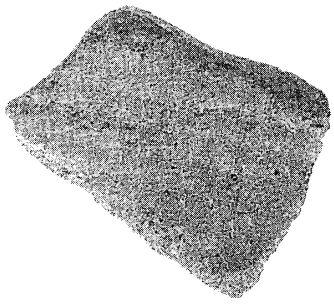
2



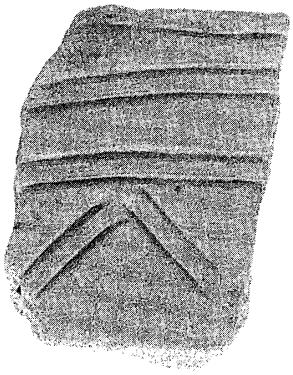
3

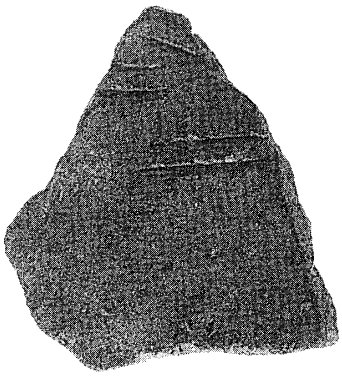
4

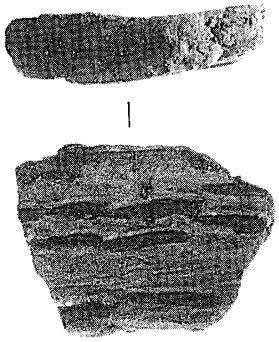
第Ⅳ図版　貝製品：1 有孔製品，2 不明品，3･4貝匙

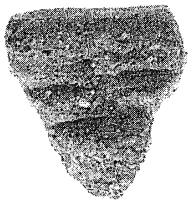

1

2

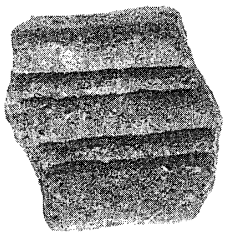

3

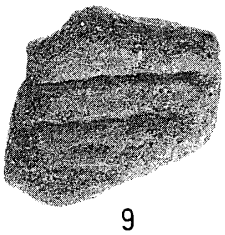

4

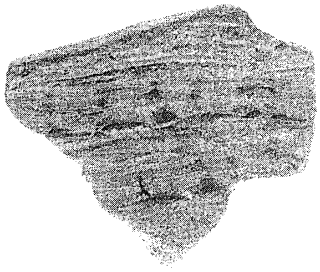

5


6

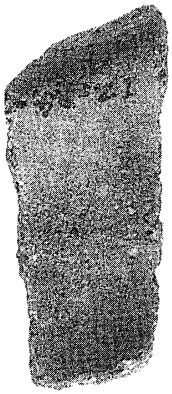
7


8


9

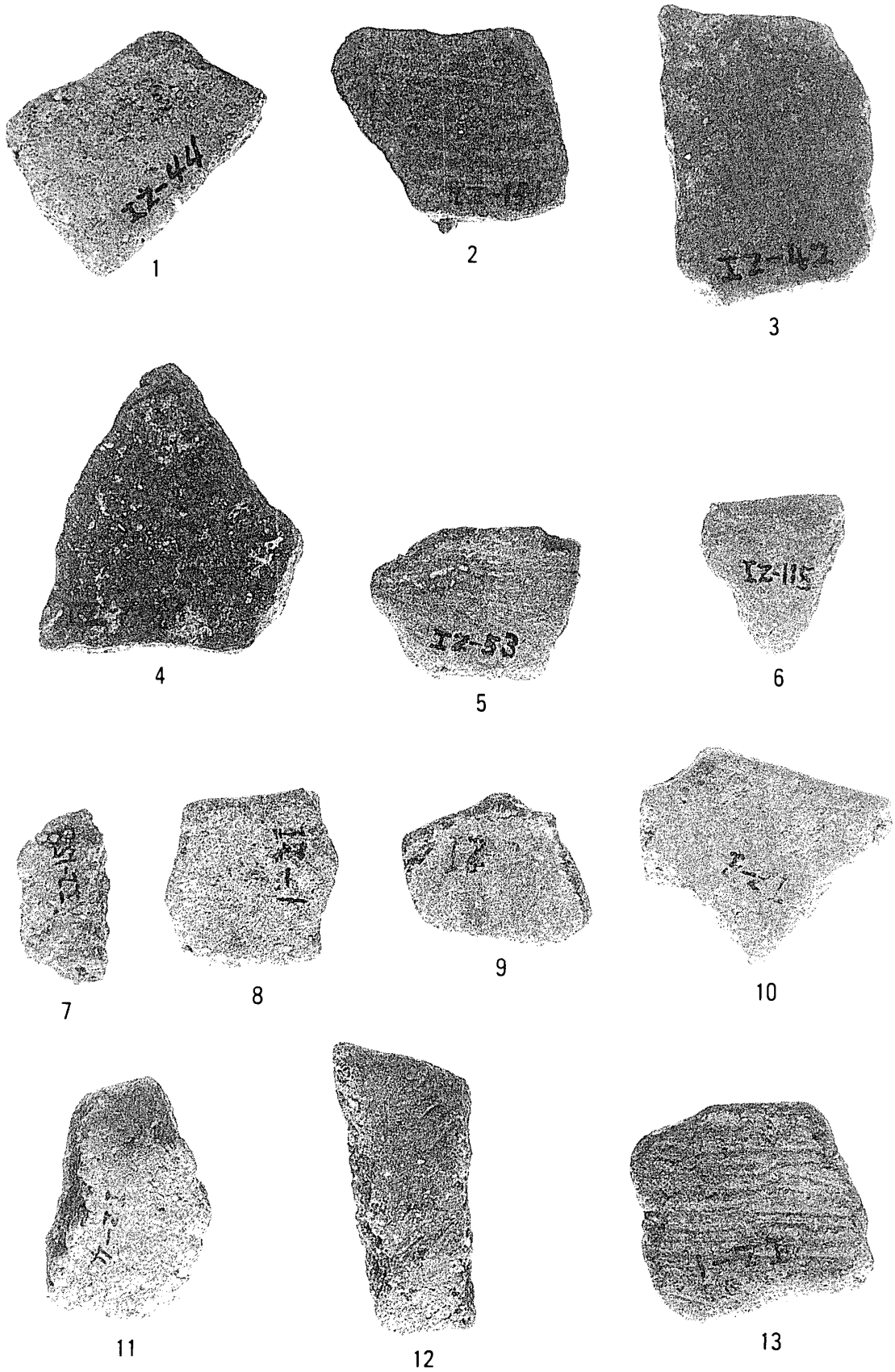

10

11

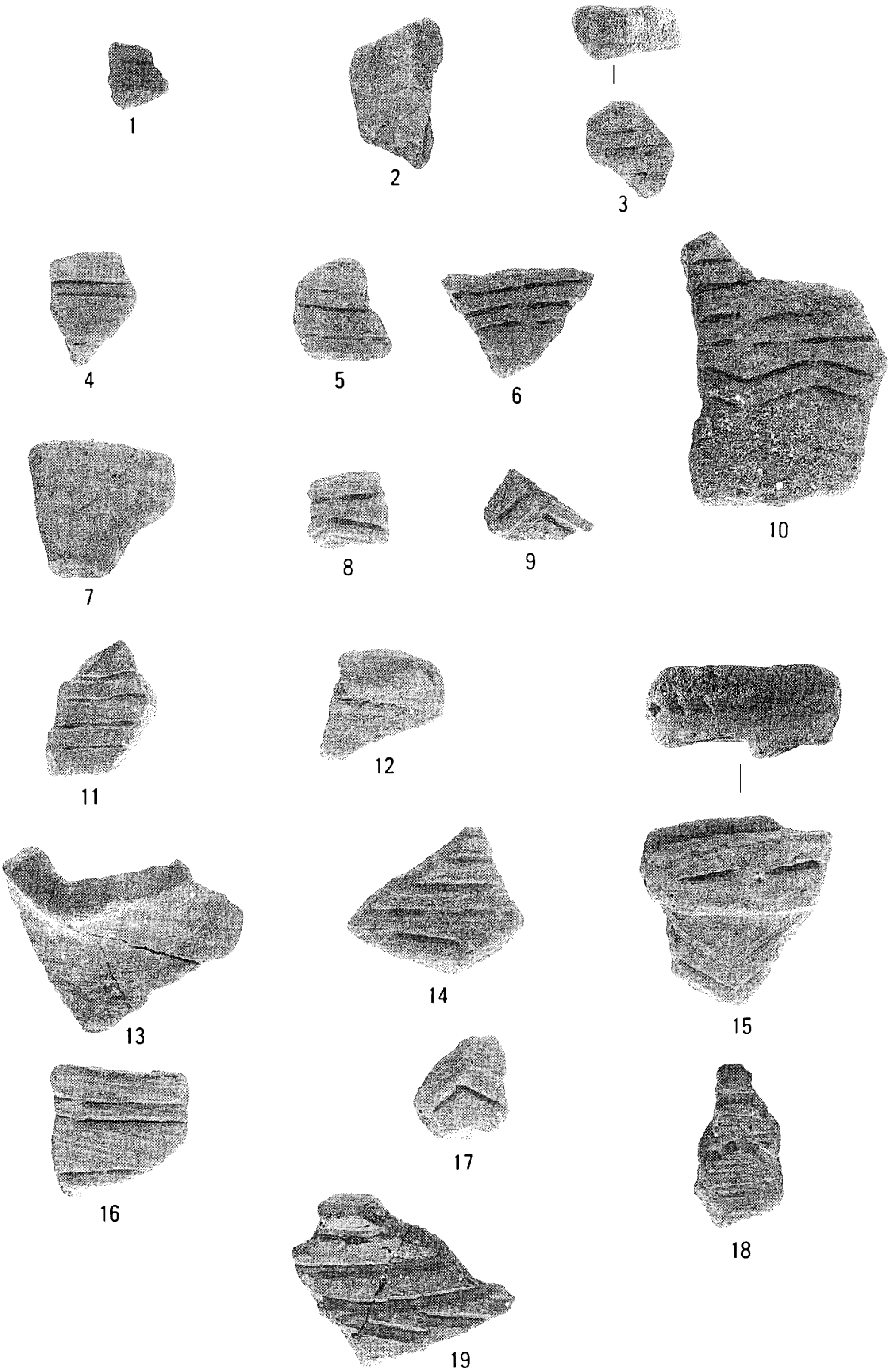

12

13

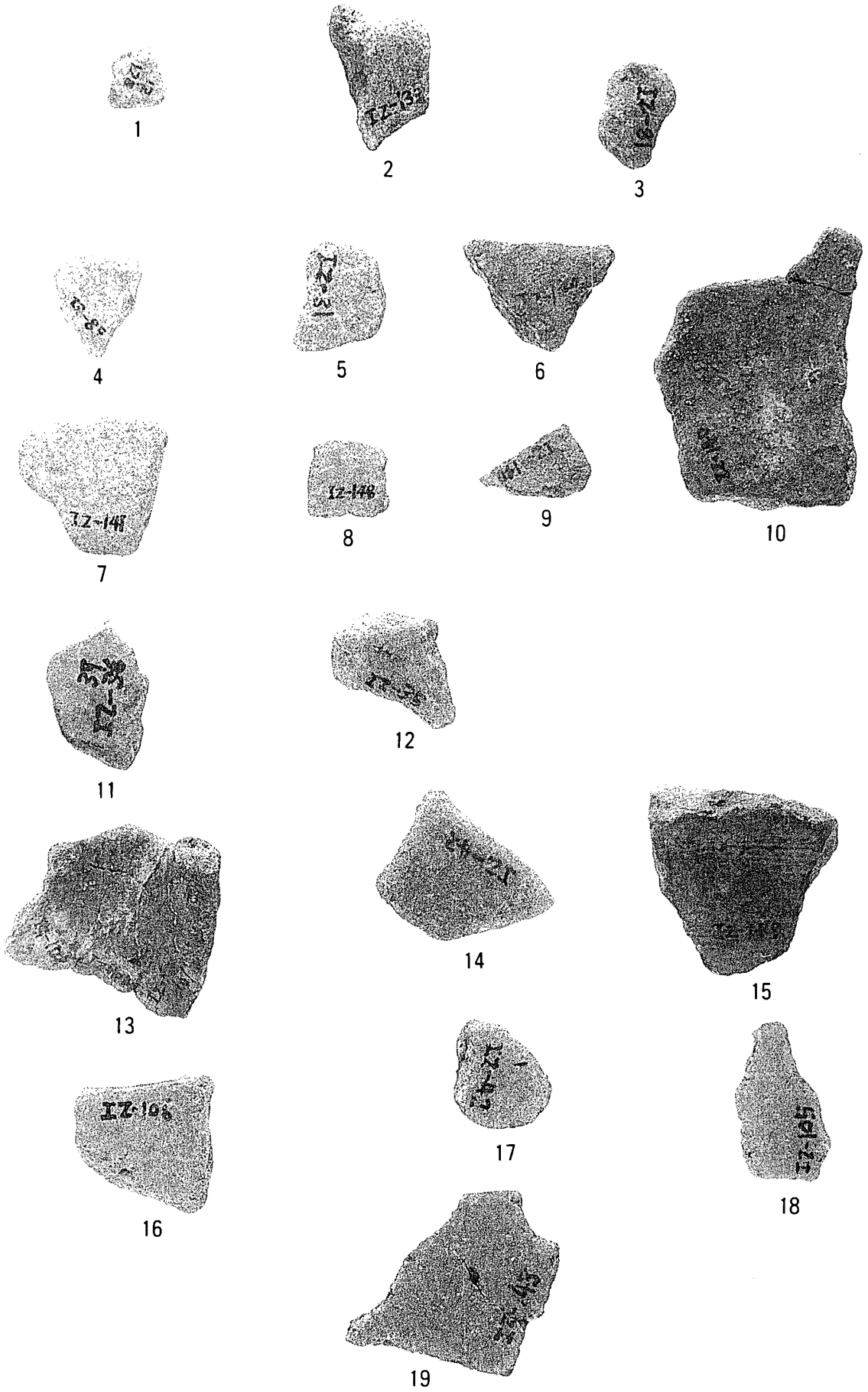
第Ⅵ図版A　1～7 伊波式土器(表面)，8～13 荻堂式土器(表面)



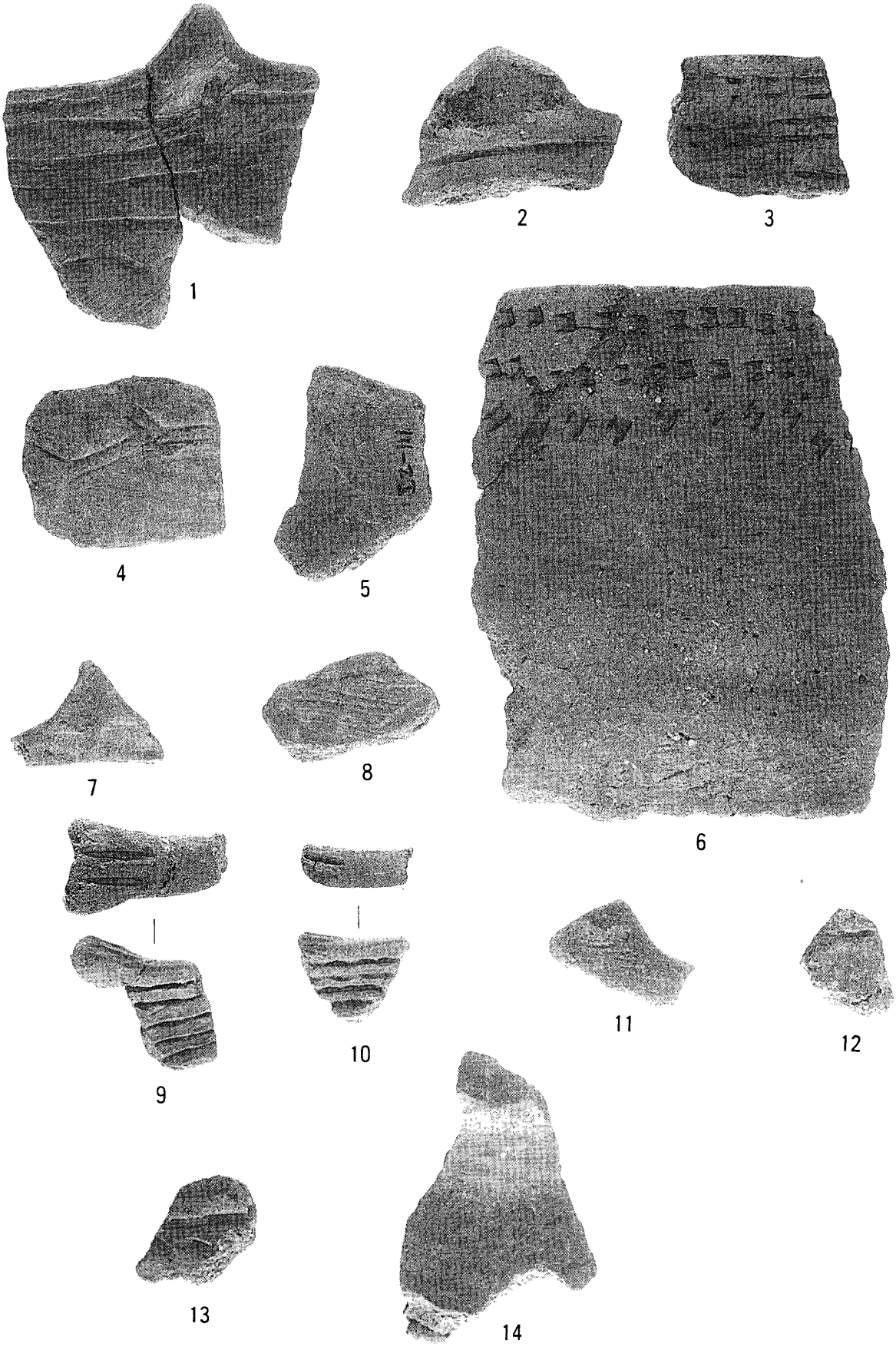
第Ⅵ図版B　1～7 伊波式土器(表面)，8～13 荻堂式土器(裏面)



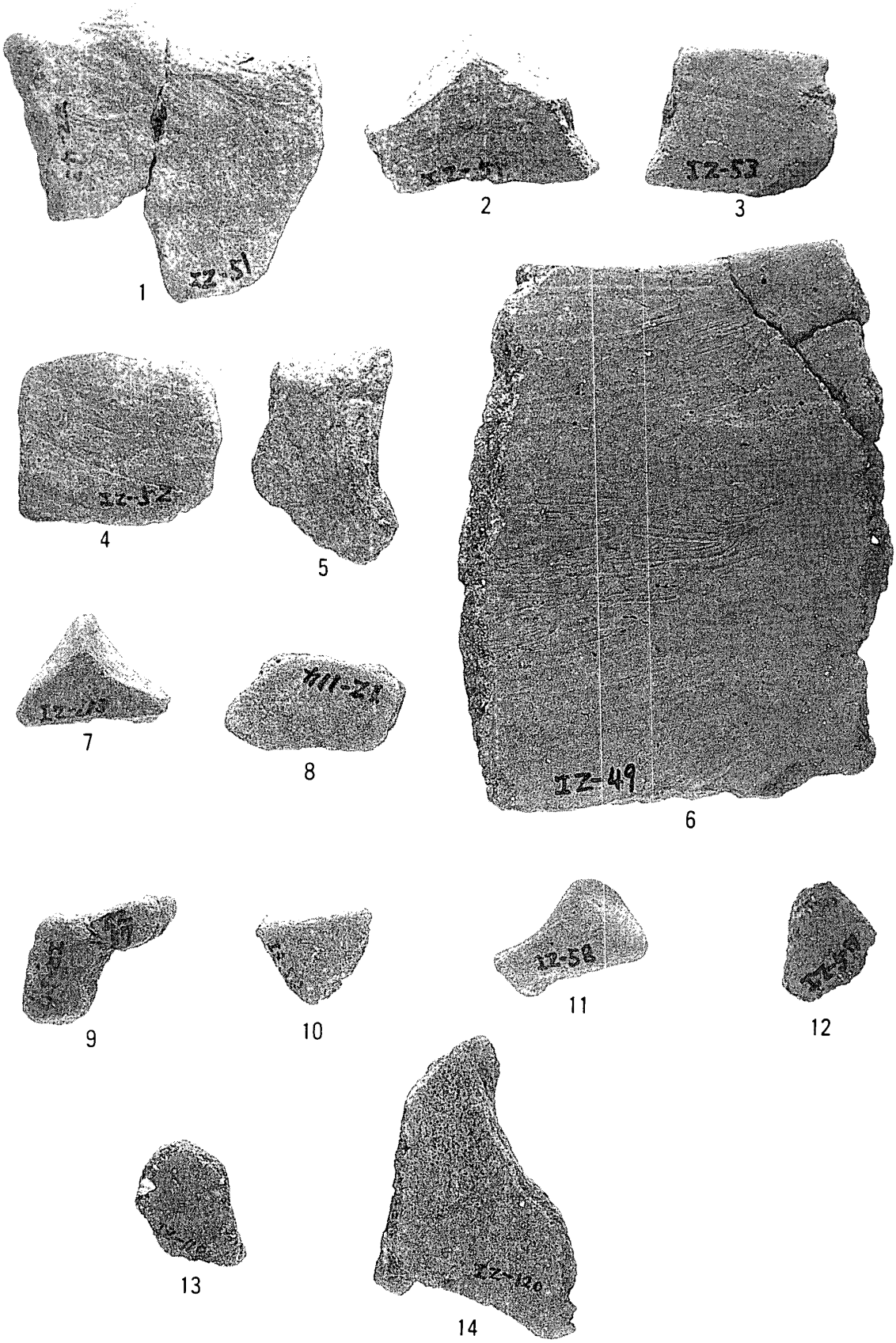
第Ⅶ図版A　荻堂式土器(表面)



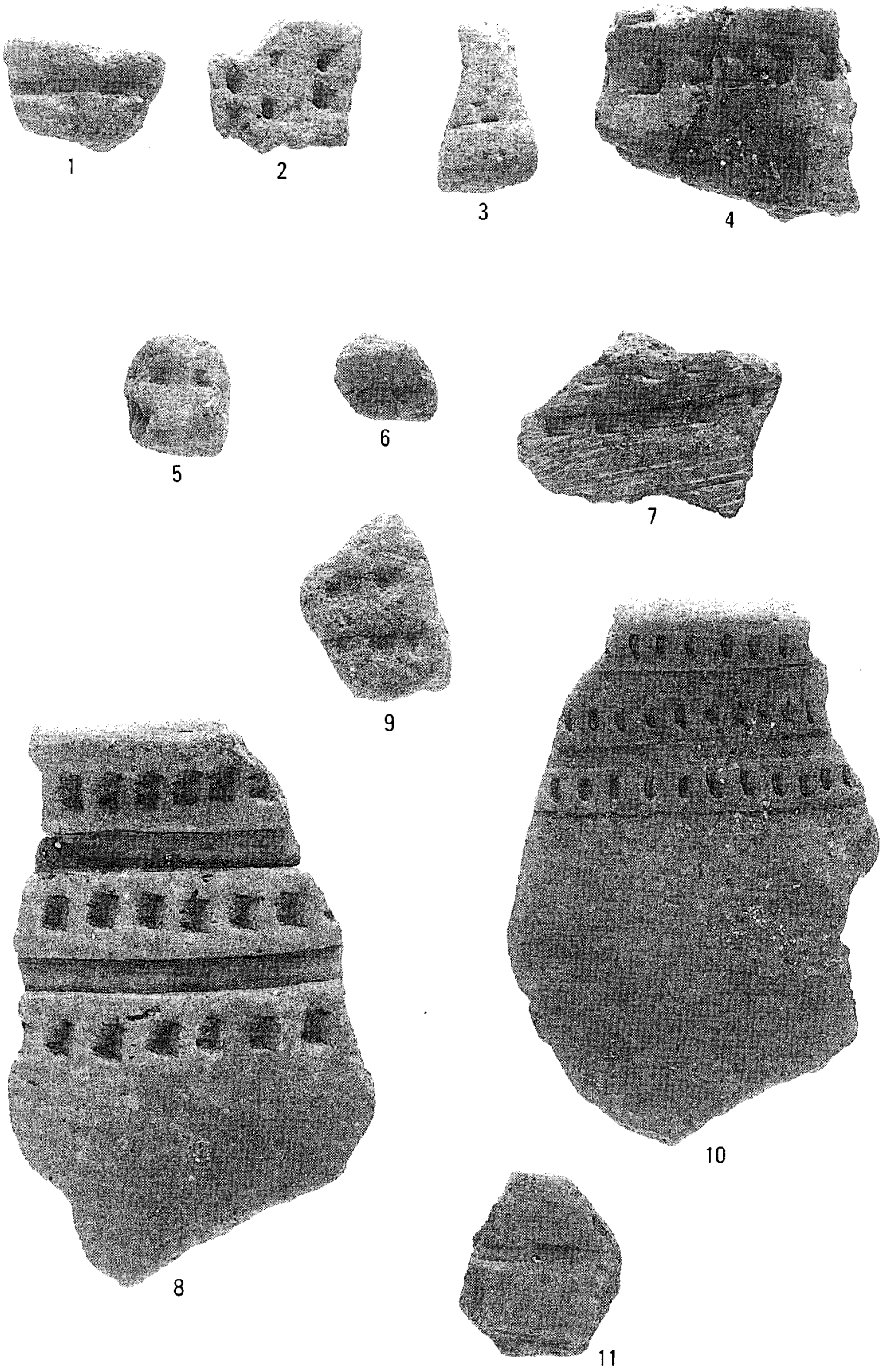
第Ⅶ図版B　荻堂式土器(裏面)



第Ⅷ図版A　荻堂式土器(表面)

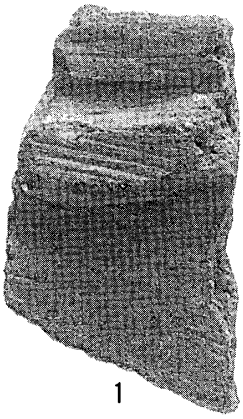


第Ⅷ図版Ｂ　荻堂式土器(裏面)



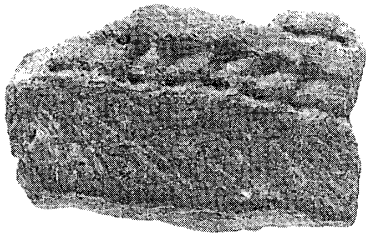
第Ⅸ図版A　大山式土器(表面)

第Ⅸ図版Ｂ　大山式土器(裏面)

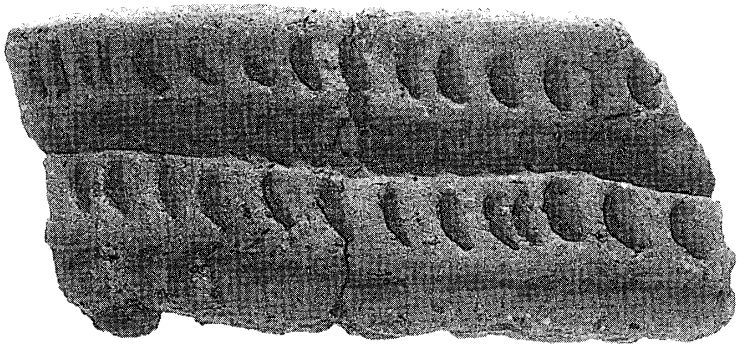


1

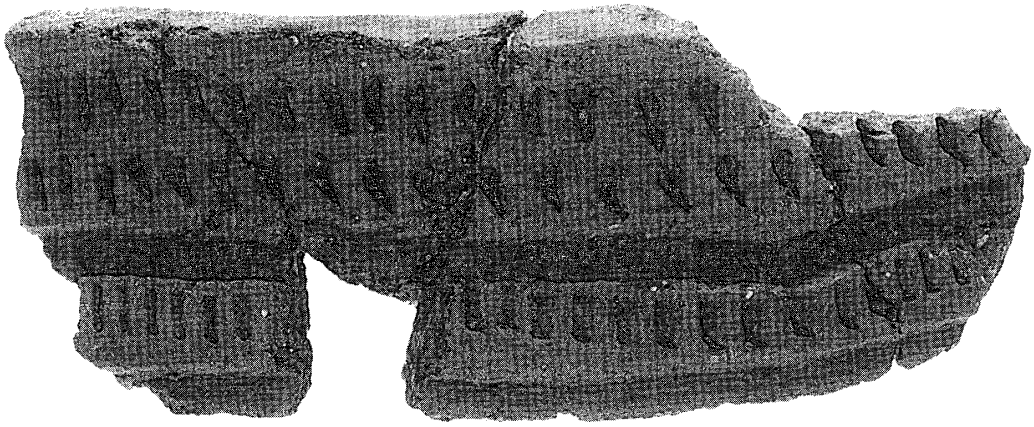
2



3



4

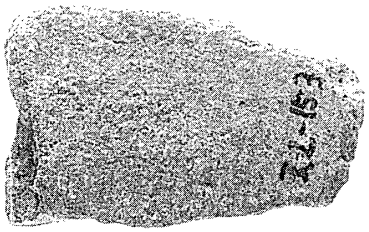


5

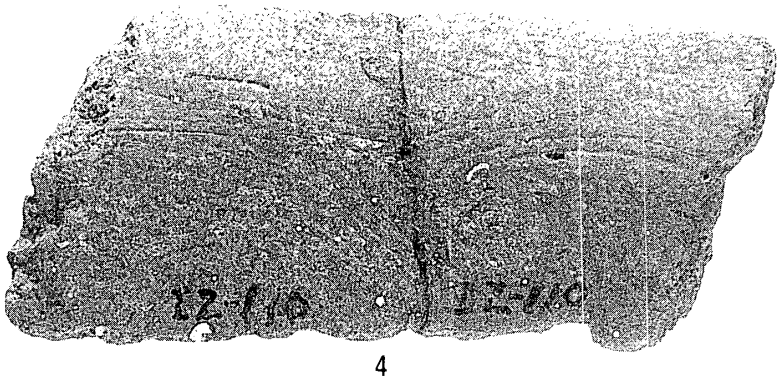
第Ⅹ図版A　大山式土器(表面)

1

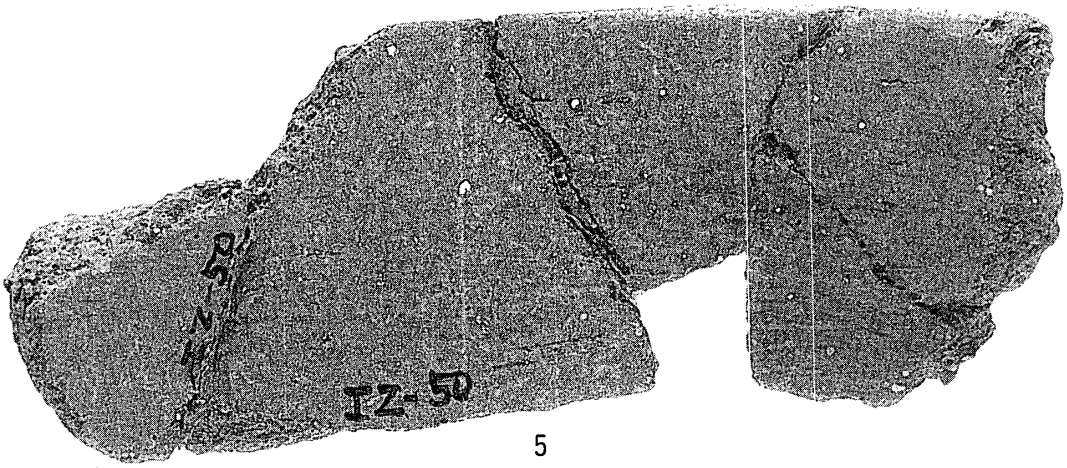
2



3

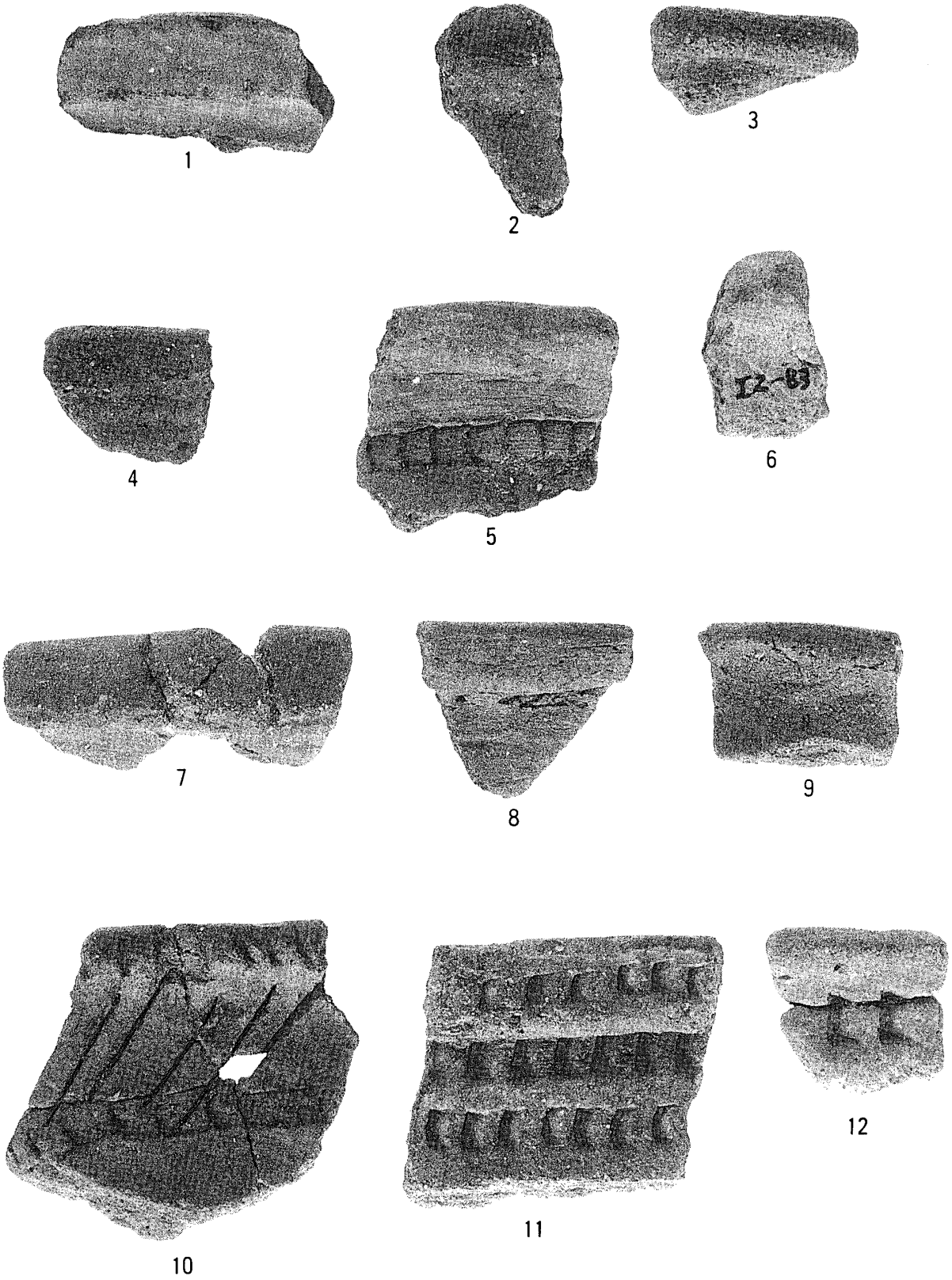


4

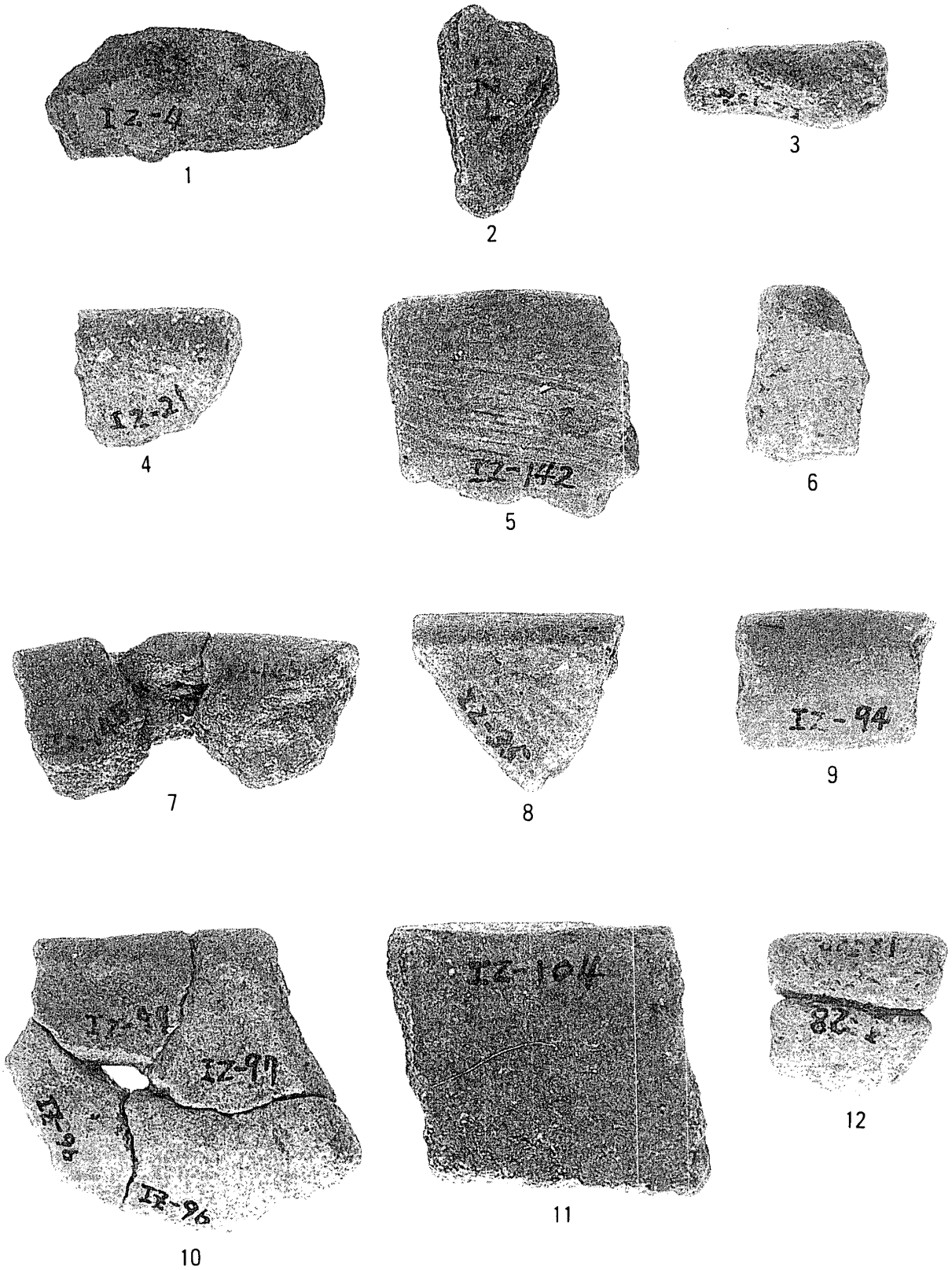


5

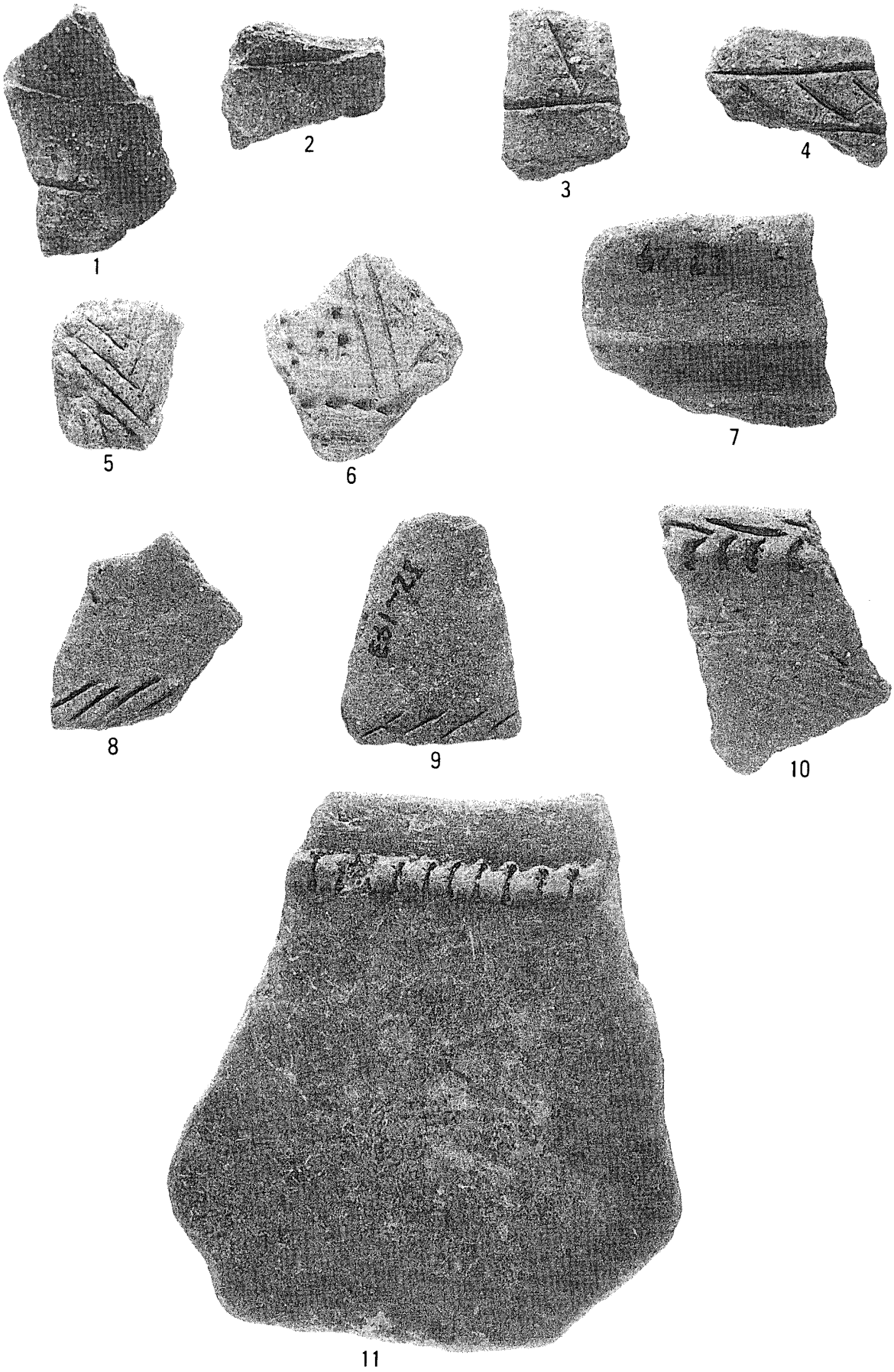
第Ⅹ図版Ｂ　大山式土器(裏面)



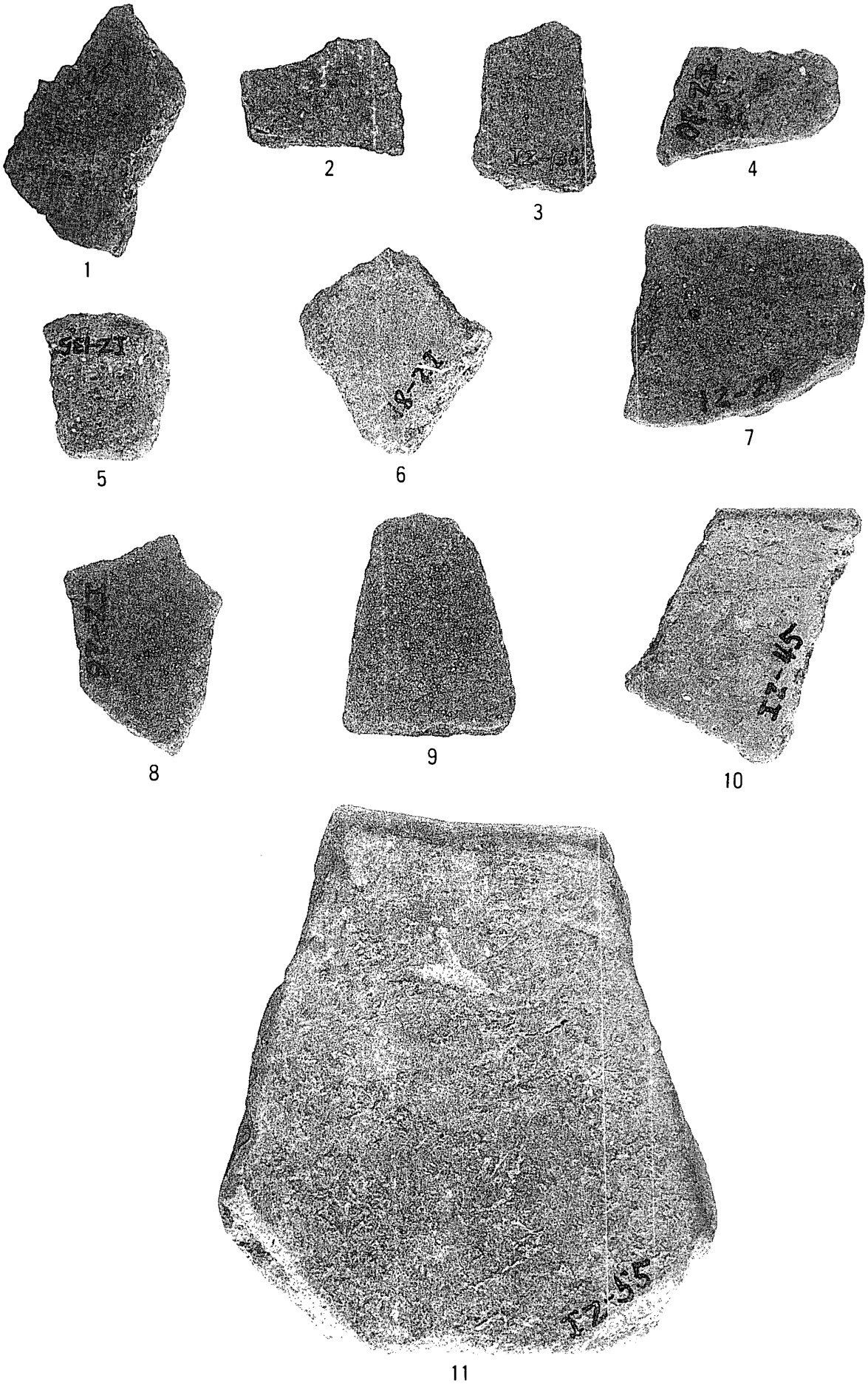
第XI図版A　1～11 室川式土器(表面)，12 室川上層期の土器(表面)



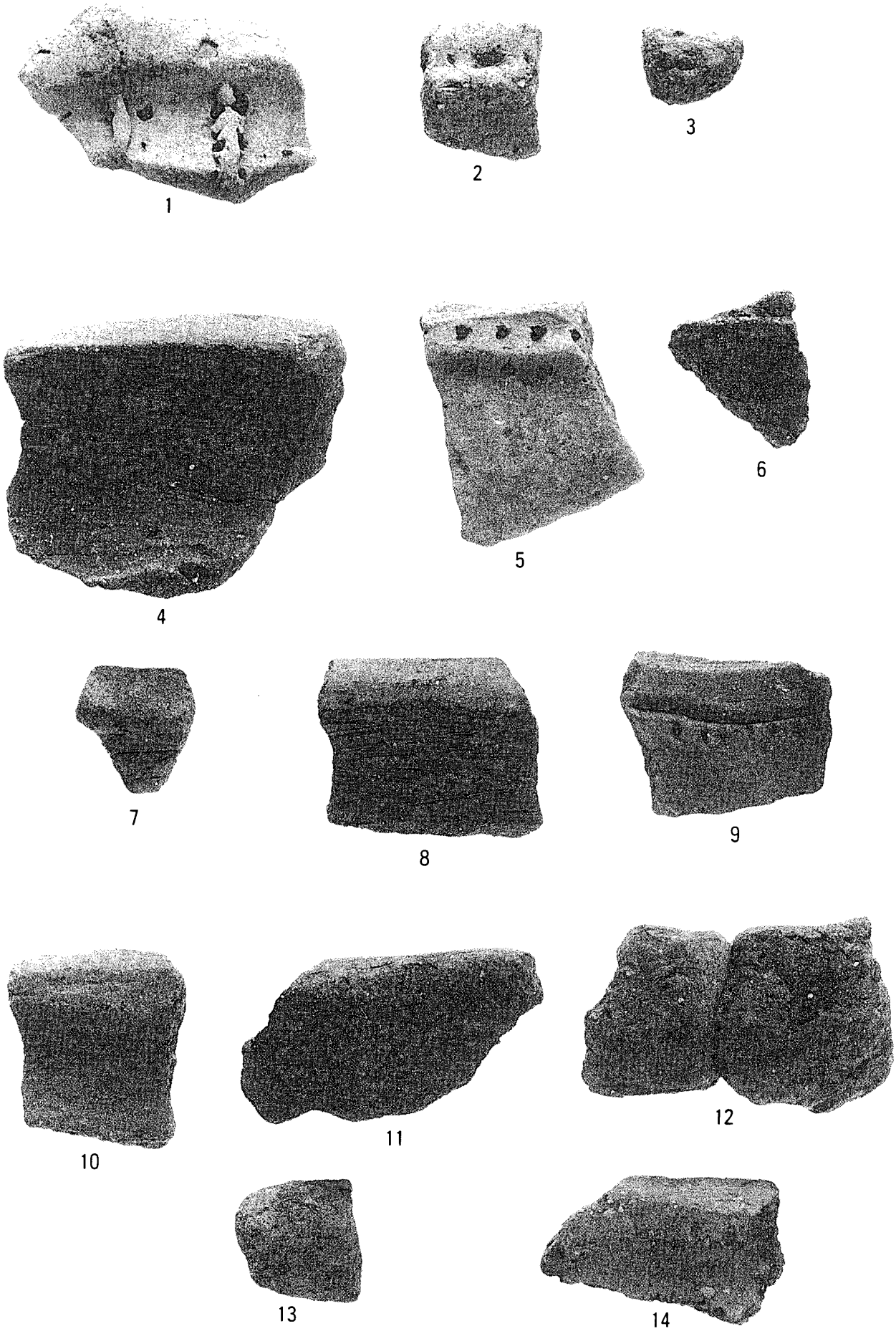
第XI図版B　1～11 室川式土器(裏面)，12 室川上層期の土器(裏面)



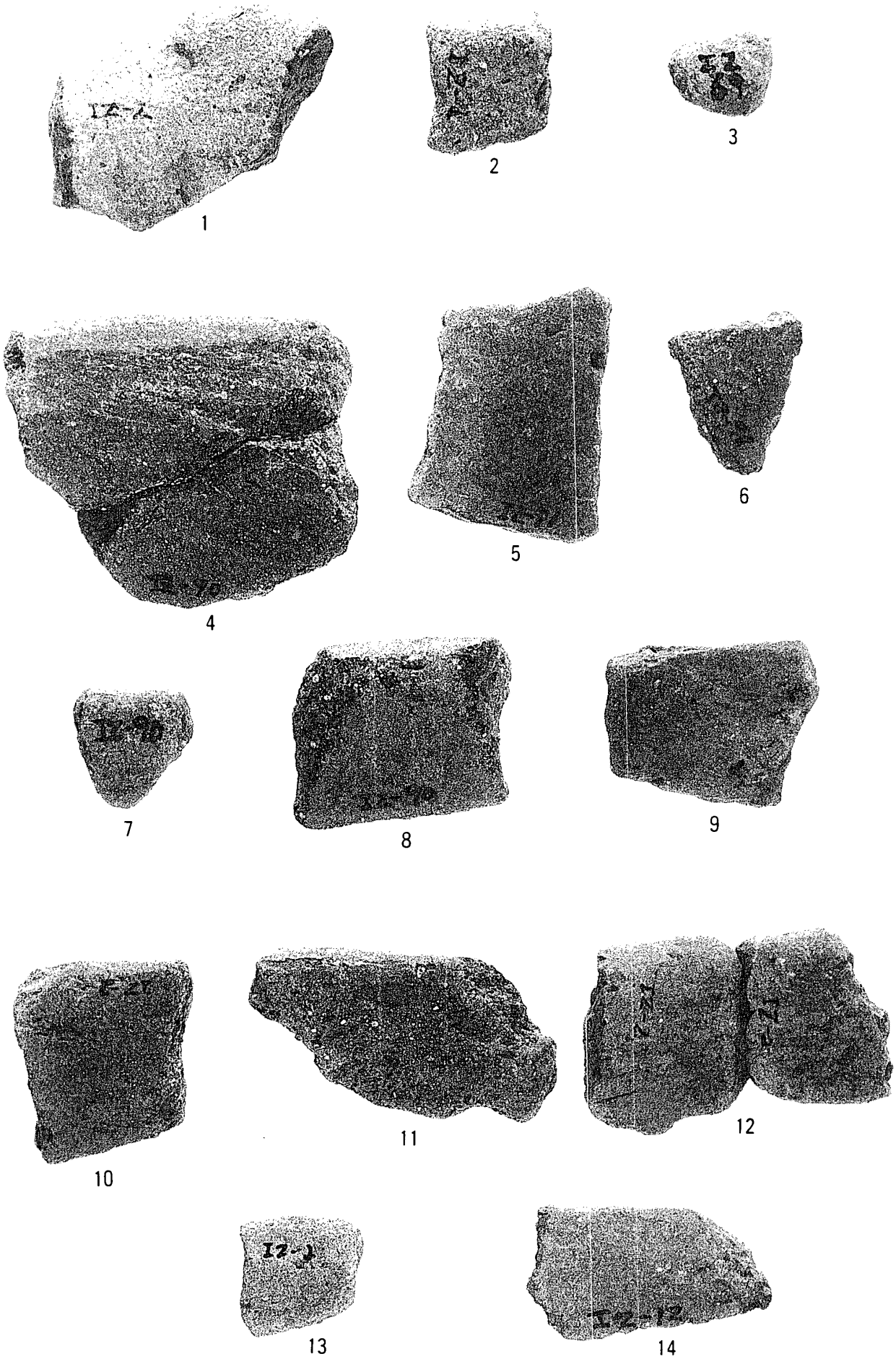
第XII図版A　1～6 嘉徳式系土器(表面)，7 カヤウチバンタ式土器(表面)，
8～11 その他の有文土器(表面)



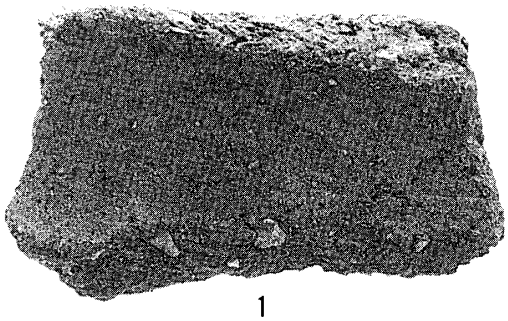
第XII図版B　1～6 嘉徳式系土器(裏面)，7 カヤウチバンタ式土器(裏面)，
8～11 その他の有文土器(裏面)

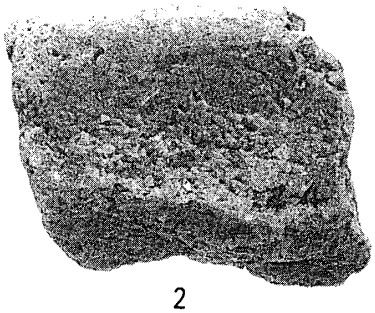


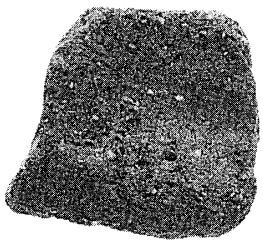
第XIII図版A　1～9 喜念Ⅰ式土器(表面)，10～14 宇佐浜式土器(表面)

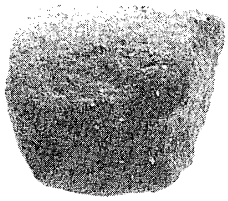


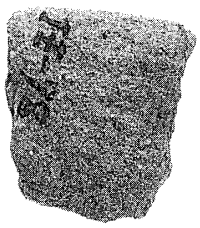
第XIII図版B　1～9 喜念Ⅰ式系土器(裏面)，10～14 宇佐浜式土器(裏面)

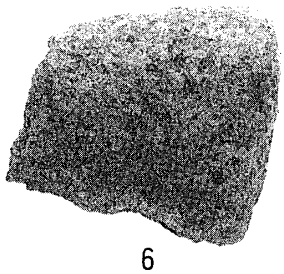

1


2

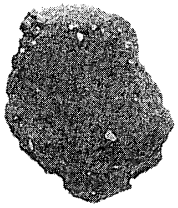

3

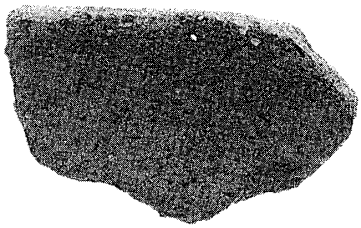

4


5

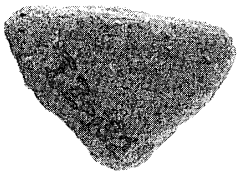

6

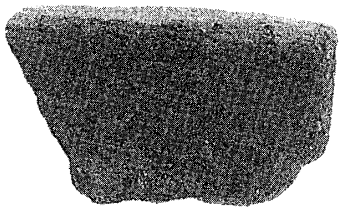
7


8

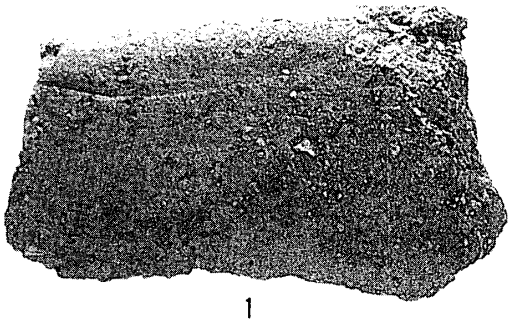

9

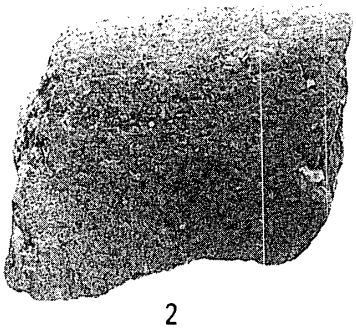
10

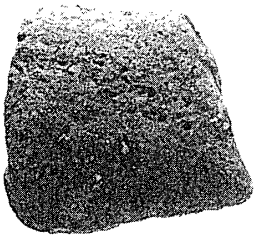

11


12

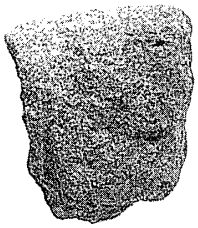
第XIV図版A　無文口縁土器(表面)　1・9・12 第Ⅳ類第1種，2・7・10・11 第Ⅳ類第2種
4・6第Ⅳ類第3種，3・5・8第Ⅳ類第4種

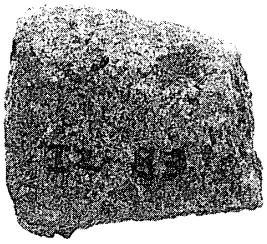

1

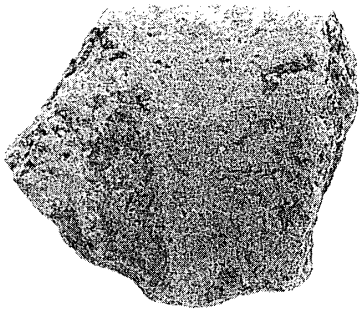

2


3

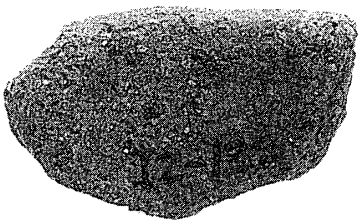
4


5

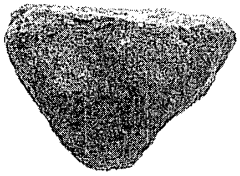

6

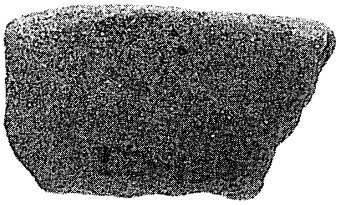

7

8

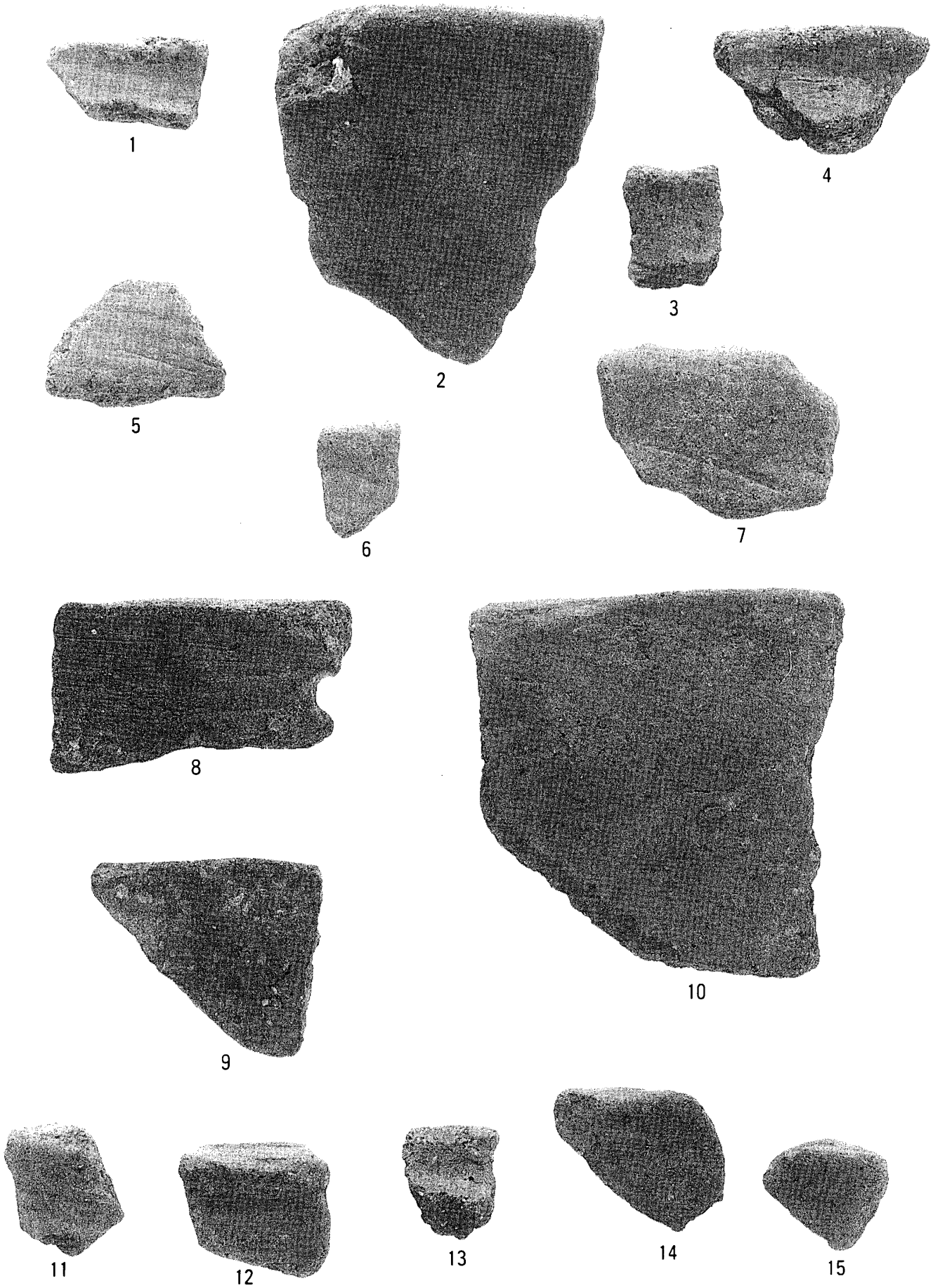

9

10

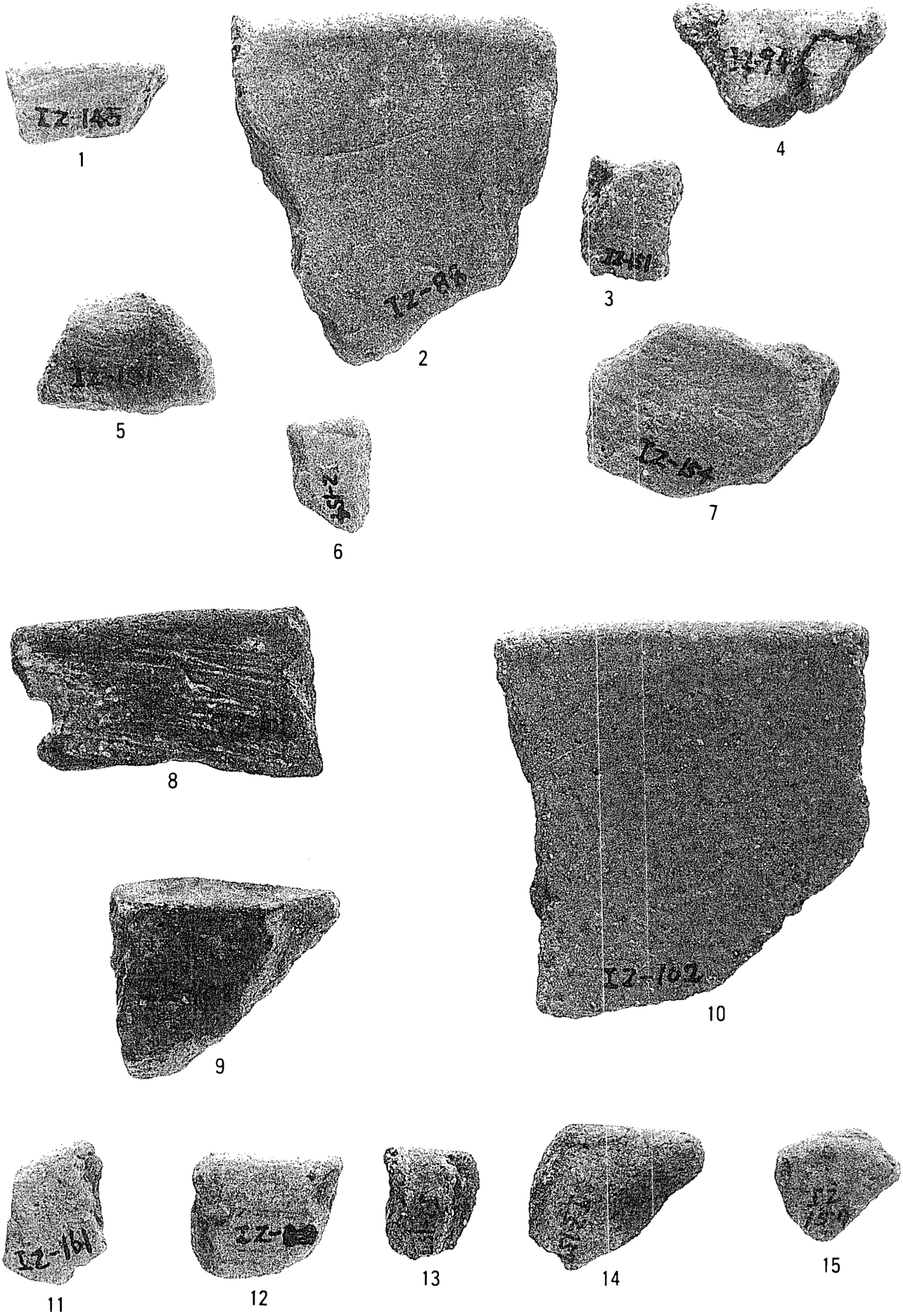

11


12

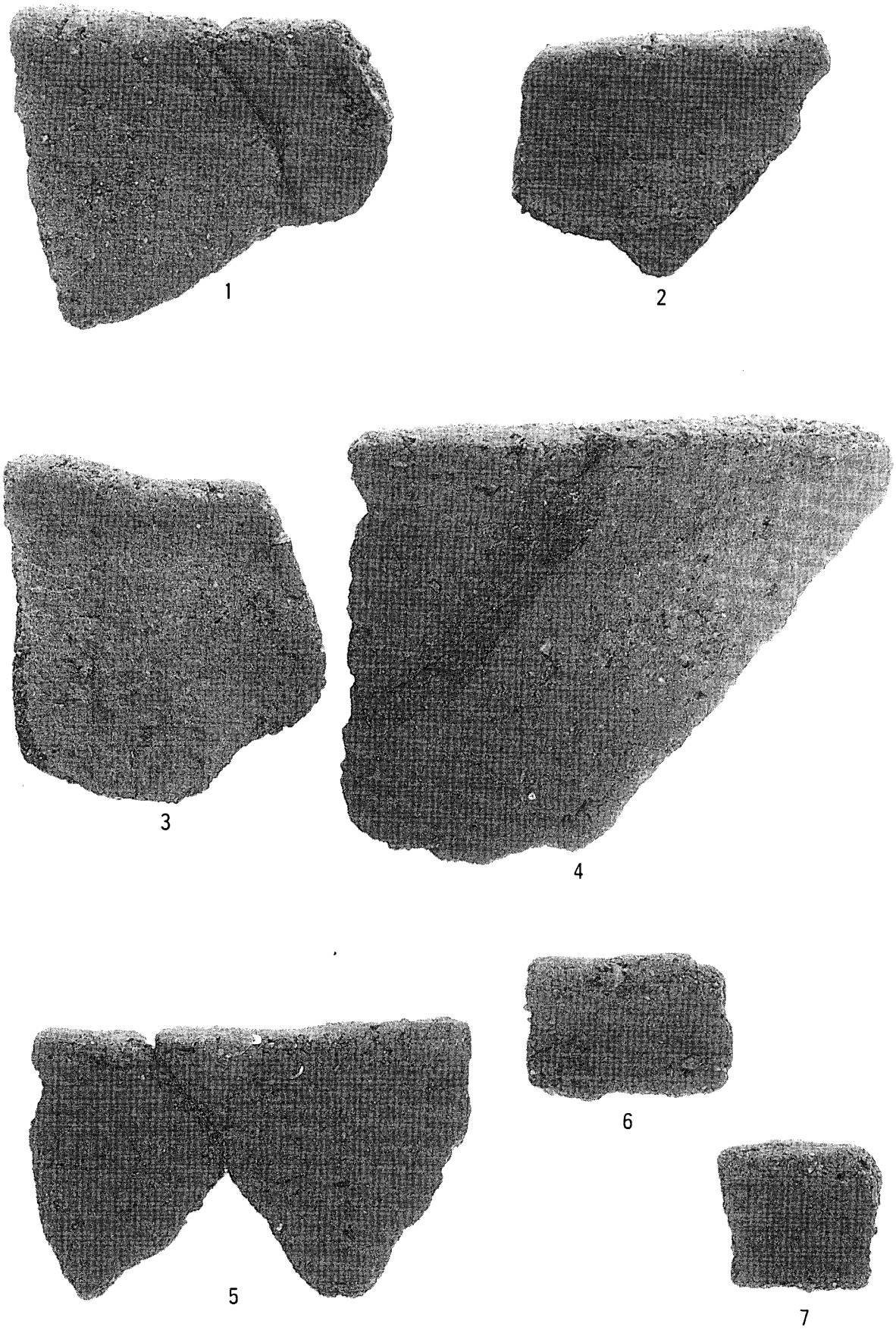
第XIV図版B　無文口縁土器(裏面)



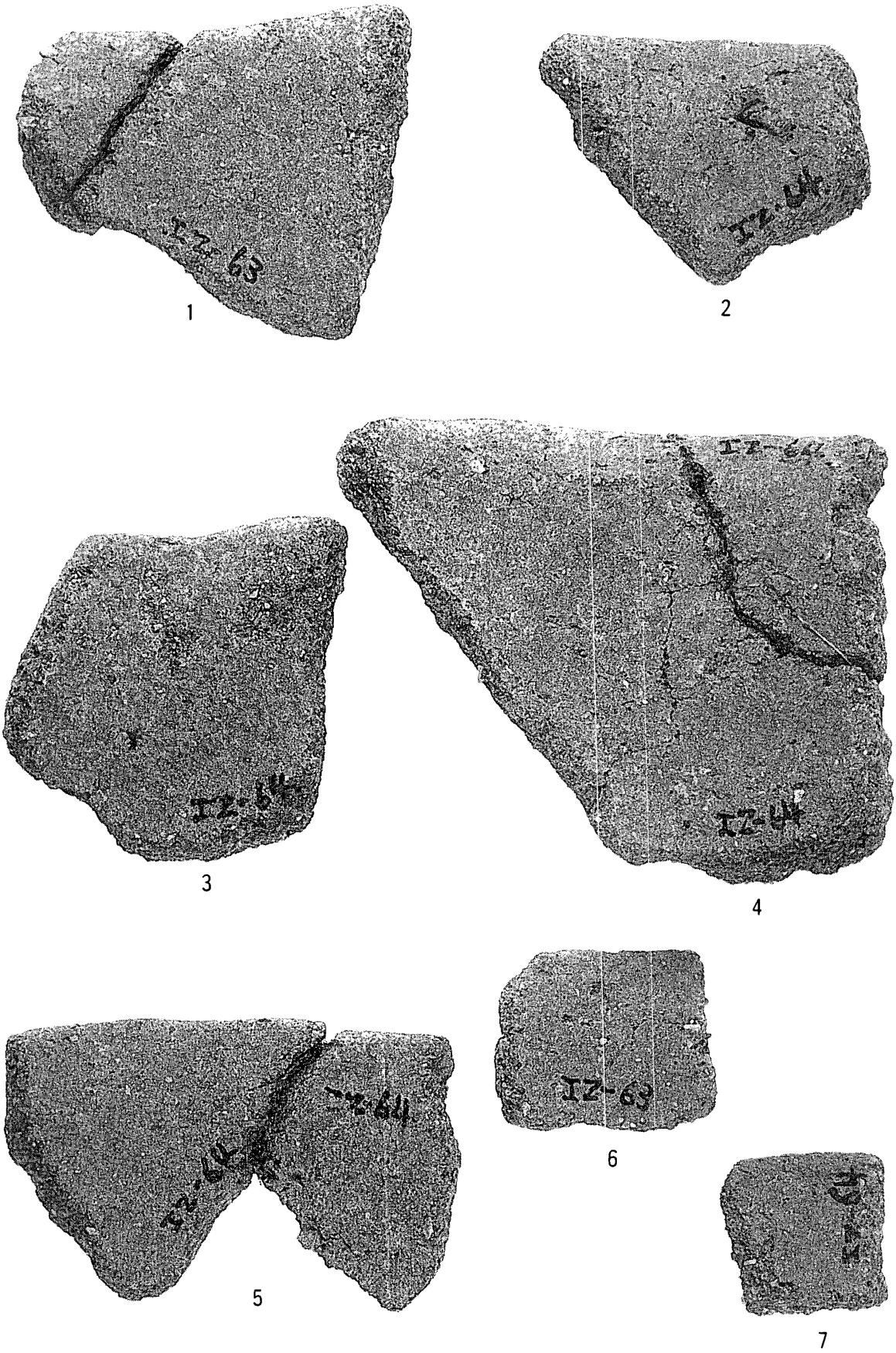
第XV図版A　無文口縁土器(表面)　9・10 第II類，2 第IV類，1・4・12・14 第IV類第1種
6～8・15 第IV類第2種，3・11 第IV類第3種，5 第IV類第4種



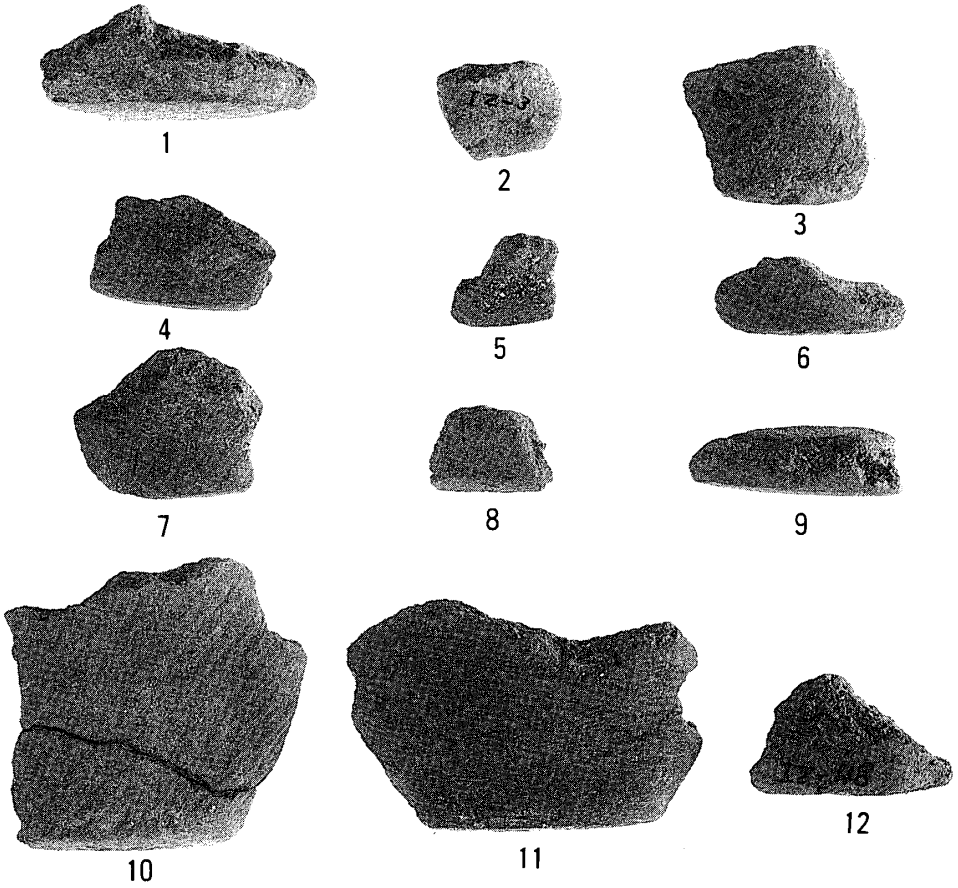
第XV図版B　無文口縁土器(裏面)



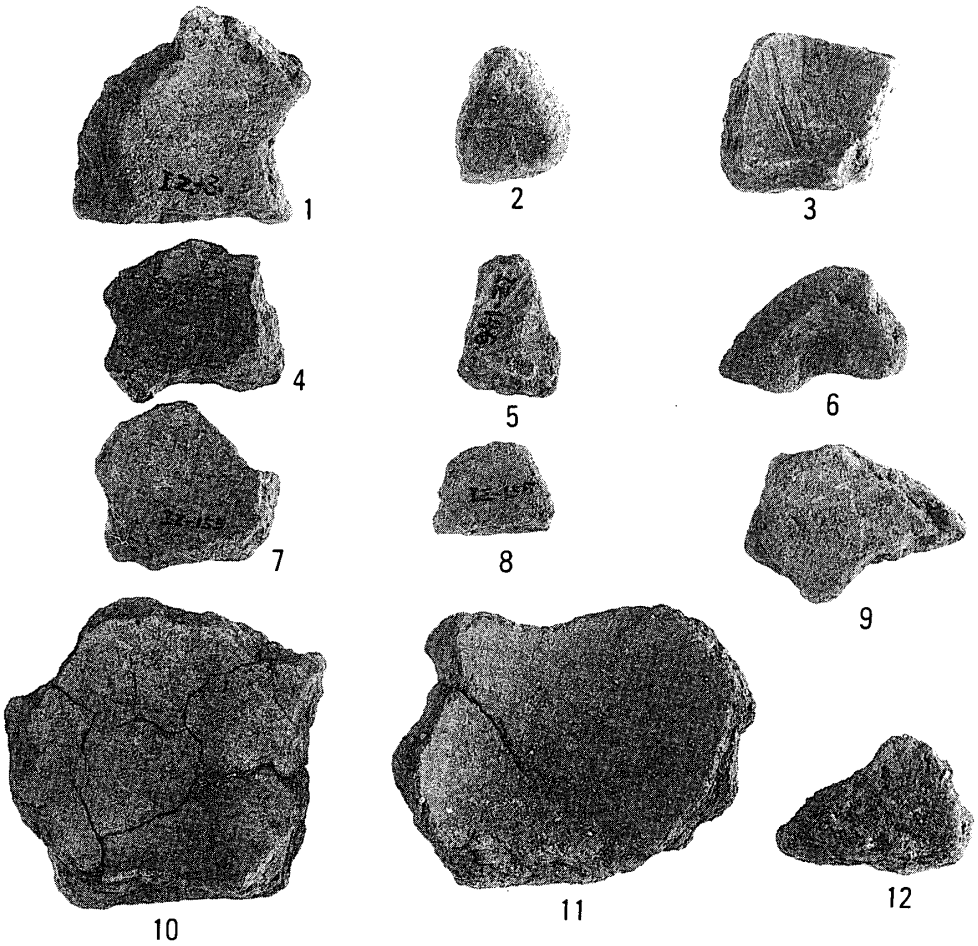
第XVI図版 A　無文口縁土器(第Ⅰ類)の表面



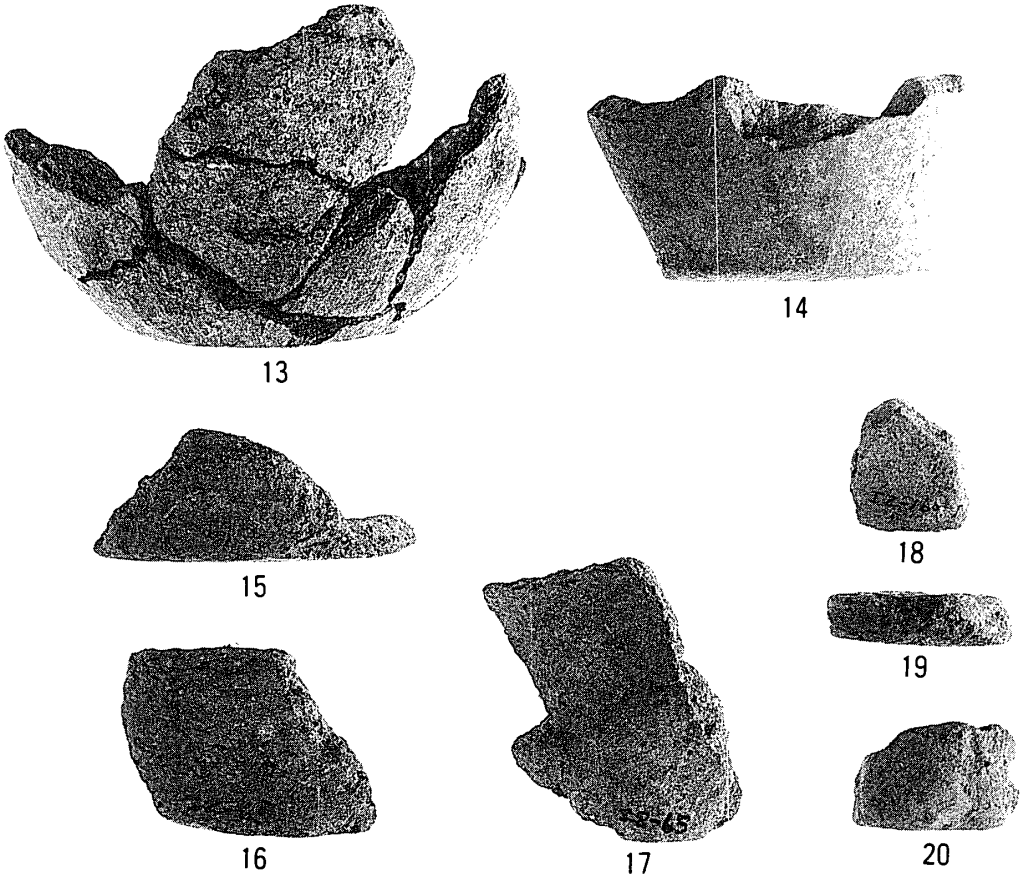
第XVI図版B　無文口縁土器(第Ⅰ類)の裏面



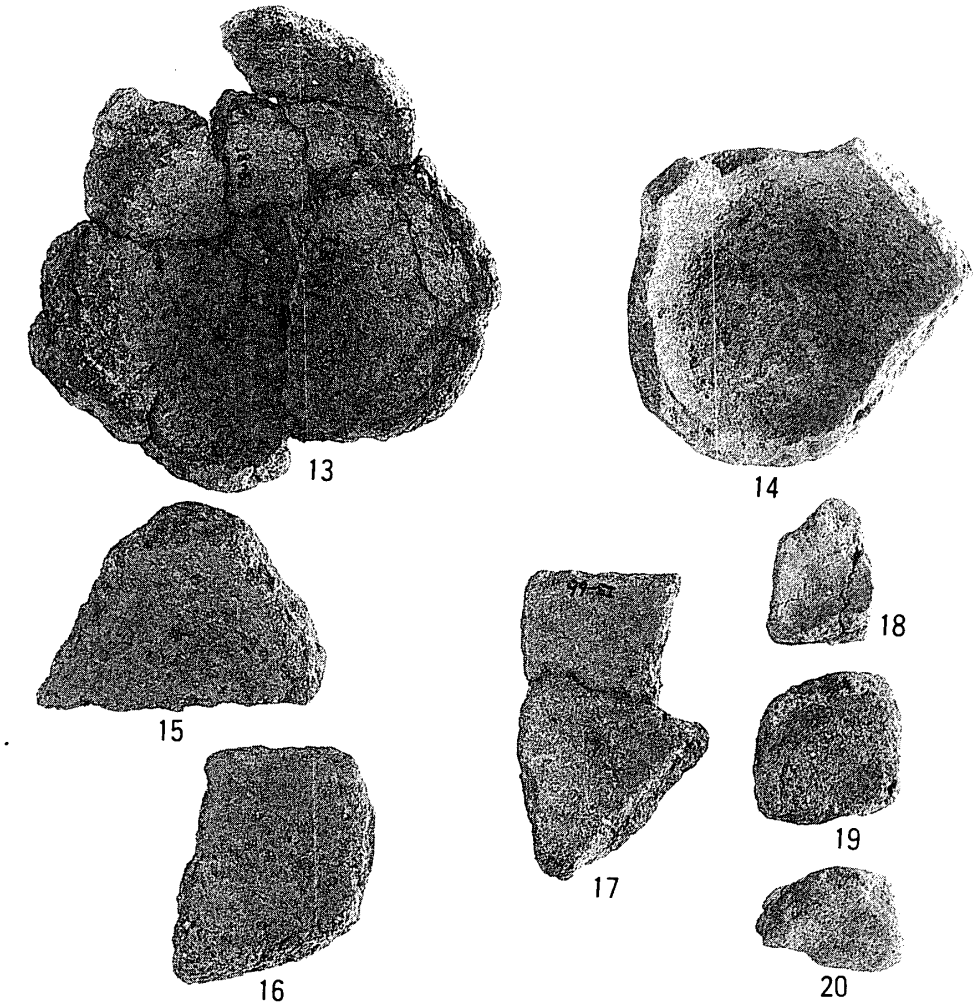
第XVII図版A　底部資料(外面)



第XVII図版B　底部資料(内面)

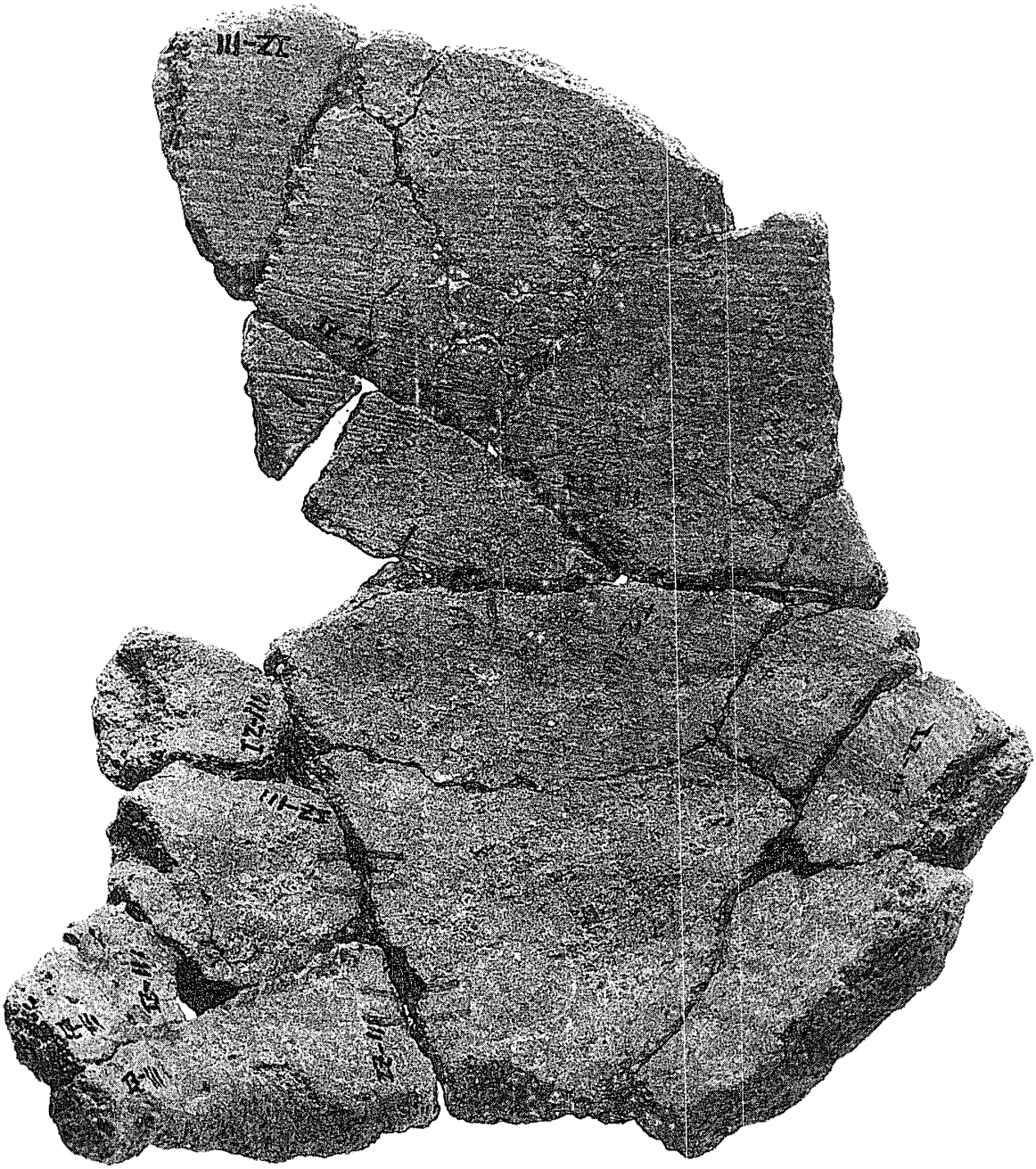


第XVIII図版A　底部資料(外面)

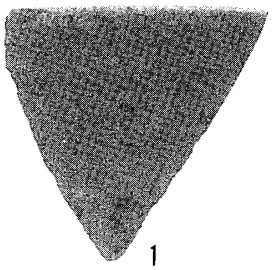


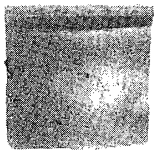
第XVIII図版B　底部資料(内面)

第XIX図版 A　無文胴部(表面)

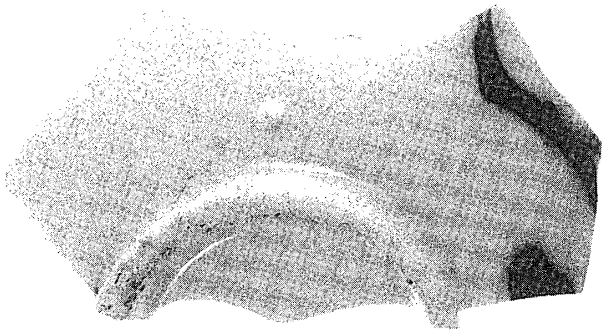


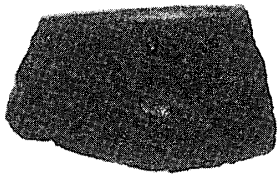
第XIX図版B　無文胴部(内面)


1

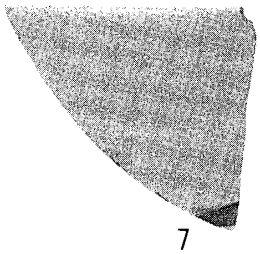

2

3

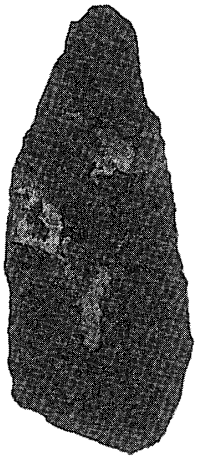

4

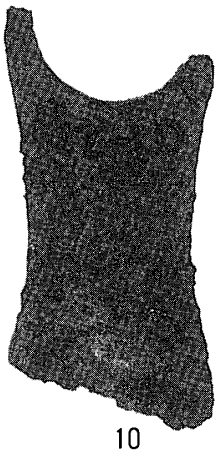

5

6


7

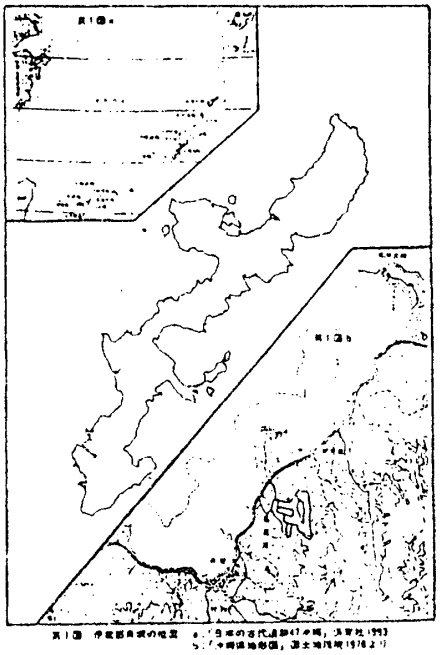
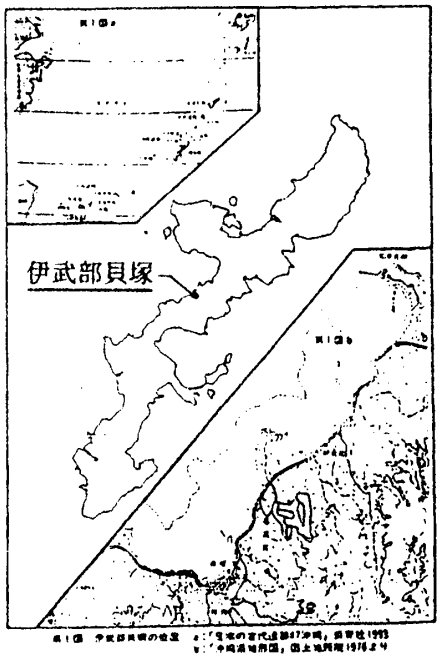
8


9


10

第XX図版　1～7 陶磁器，8～10 鉄製品

沖国大考古 第11号　正誤表

<table>
<tr><th>ページ</th><th>訂正箇所</th><th>誤</th><th>正</th></tr>
<tr><td>30</td><td>表7の2～4、6・7の図版番号</td><td>
<table>
<tr><td>2</td><td>第9図1
第Ⅶ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>Ⅰ類1</td></tr>
<tr><td>3</td><td>第9図2
第Ⅶ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>Ⅰ類1</td></tr>
<tr><td>4</td><td>第9図6
第Ⅶ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr>
<tr><td>6</td><td>第9図5
第Ⅶ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約 4.6cm</td><td>Ⅰ類</td></tr>
<tr><td>7</td><td>第9図14
第Ⅶ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約 4.1cm</td><td>Ⅰ類</td></tr>
</table>
⇨
<table>
<tr><td>2</td><td>第9図1
第Ⅷ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>Ⅰ類1</td></tr>
<tr><td>3</td><td>第9図2
第Ⅷ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>Ⅰ類1</td></tr>
<tr><td>4</td><td>第9図6
第Ⅷ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr>
<tr><td>6</td><td>第9図5
第Ⅷ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約 4.6cm</td><td>Ⅰ類</td></tr>
<tr><td>7</td><td>第9図14
第Ⅷ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約 4.1cm</td><td>Ⅰ類</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>58</td><td>表25の8～13の図版番号</td><td>
<table>
<tr><td>8</td><td>第18図13
第XⅦ図版A・B－13</td><td>約5.4cm</td></tr>
<tr><td>9</td><td>第18図14
第XⅦ図版A・B－14</td><td>約5.6cm</td></tr>
<tr><td>10</td><td>第18図15
第XⅦ図版A・B－15</td><td>約7.2cm</td></tr>
<tr><td>11</td><td>第18図16
第XⅦ図版A・B－16</td><td>約7.8cm</td></tr>
<tr><td>12</td><td>第18図19
第XⅦ図版A・B－19</td><td>約3.6cm</td></tr>
<tr><td>13</td><td>第18図20
第XⅦ図版A・B－20</td><td>約4.0cm</td></tr>
</table>
⇨
<table>
<tr><td>8</td><td>第18図13
第XⅧ図版A・B－13</td><td>約5.4cm</td></tr>
<tr><td>9</td><td>第18図14
第XⅧ図版A・B－14</td><td>約5.6cm</td></tr>
<tr><td>10</td><td>第18図15
第XⅧ図版A・B－15</td><td>約7.2cm</td></tr>
<tr><td>11</td><td>第18図16
第XⅧ図版A・B－16</td><td>約7.8cm</td></tr>
<tr><td>12</td><td>第18図19
第XⅧ図版A・B－19</td><td>約3.6cm</td></tr>
<tr><td>13</td><td>第18図20
第XⅧ図版A・B－20</td><td>約4.0cm</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>108</td><td>第3表の項目</td><td>
<table>
<tr><td rowspan="2">土器</td><td>土厚 (mm) ＼ 層序</td><td>4.0</td><td>5.0</td><td>6.0</td><td>7.0</td><td>8.0</td><td>9.0</td></tr>
<tr><td></td><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr>
</table>
⇨
<table>
<tr><td rowspan="2">土器</td><td>器厚 (mm) ＼ 層序</td><td>4.0</td><td>5.0</td><td>6.0</td><td>7.0</td><td>8.0</td><td>9.0</td></tr>
<tr><td></td><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>117</td><td>《註文献・注釈》の（註1）</td><td>（註1）東恩納寛惇・・・1964</td><td>⇨（註1）東恩納寛惇・・・1964年</td></tr>
<tr><td>128</td><td>第1図伊武部貝塚の位置（中央の図）</td><td>  </td><td>⇨ 
</td></tr>
<tr><td>132</td><td>左段の22行目</td><td>第2図4は口頭部に・・・</td><td>⇨第2図4は口縁部に・・・</td></tr>
</table>